

島津家歴代制度卷之卅六

天明享保

一朔日

五社 御社參、

元日朝諏訪神前、大般若司參小番御名字下、

大雄山 御宮 御代參、

御一門・御家老於御座ノ間御礼、

御馬乗初、

大平楽・甕之御酒、御家老・若年寄於櫓之間頂戴

二日

福昌寺朝首頭御規式、御名代並御家老御相伴、

川上嫡家・福昌寺三役人 御目見、

御掃除初、御年男勤之、

三日

御対面所御書院ニテ一所持・御側役以上・諸地頭

御太刀進上、

夜入御謠初、

諸土御祝儀出仕、三町年寄・年行司・唐通事・長

崎御屋代、

四日

御鷹御覽於御座之間、

年中御式

公義年中御式

年中行事

御用日

御寄合日

年頭御規式

八朔御規式

諸節句御規式

年中御式

二四三九

正月

淨光明寺 御代參、

十一日

着座門首、南泉院・大乘院門首、神徳院・山内寺・

御吉書初、御右筆勤之、

遠寿寺・般若院・諏訪神主御礼、

於虎之間大般若経御祈禱、

五日

御鎧御祝、

福昌寺・大龍寺・広濟寺・正興寺・正建寺・二見

但、大目附以上梅ノ間、右以下御役々芍薬ノ間、

清左衛門御礼、

詰合ノ諸士於鷲ノ間被下之、

六日

十三日

護摩所・稻荷・八幡・天神・不働(勳)・福ヶ迫諏訪社・

花尾山御代參、

築地神明宮・靈符堂・表御看経所 御參詣、

十四日

淨光明寺・不断光院・寿国寺・願成寺・在番琉球

御座ノ間御飾下ル、

人・靱木平右衛門・金山町人御礼、

十五日

七日

月次御礼、

若菜ノ御祝儀、

但、御役人已上熨斗目・麻袴、

八日

大雄山 御宮 御參詣、御太刀金・馬代御献納、

一乘院・弥勒院・宝満寺・感応寺・幸善寺・本永

但、御供御小納戸以上布衣、

寺・正国寺、執印・丹下御礼、

淨光明寺 御參詣、御進納物有之、福昌寺・恵灯

御座ノ間 於梅ノ間講釈教授勤之、以来毎月、

院同断、

十七日

但、七本御道具、

南泉院御札卷数上、

十八日

浄光明寺御代参、

四月

廿一日

吉野御馬追、御名代並川上嫡家、

廿日

加世田野間権現祭礼、御代参当番頭、

御帰国御暇、

廿八日

月並出仕御役人已上、熨斗目・麻袴、

五日

大慈寺・飯隈山御礼、

端午御祝儀、惣出仕、

二月

朔日

御条書弘メ、以来毎朔、

六月

丁日积菜、

朔日

御参勤、

御関狩、

嘉祥御祝儀、御側役已上於御座之間、
(輪力)
於御対面所愛染明王供大般若転説、

御連歌、廿五日於護摩所、

暑氣中伺 御機嫌、

三月

十八日

三日

上巳御祝儀、惣出仕、

廿三日

但、御役人已上熨斗目、御一門・諸大身分・寄

南林寺大中忌、御家老御代参、

合・御側役已上・諸地頭長袴、

七月

朔日

惣廟祭、今日ヨリ至于廿九日祀場中、

二日

福昌寺大施餓鬼、御家老御代参、

七日

七夕ノ御祝儀、地頭持已上白帷子・長袴、

於虎ノ間御旗・御鎧虫干、御兵具方勤之、

於御対面所御系図・御文書等虫干、御記録奉行勤

之、

十四日

十五日

御寺方就盆御灯笼上、諸御寺御代参、

八月

朔日

八朔御祝儀、一所持御太刀進上、諸地頭中紙進上、

但、御側役以上白帷子、

十日

萩菜、

十五日

御月見、

廿五日

御連歌、

九月

九日

重陽ノ御祝儀、萩ノ御飯上、

但、御側役已上青ノ物、

十九日

開闢宮祭礼、寺社奉行被差越、

十月

初亥

亥猪ノ御祝儀、御側役已上於御座ノ間、餅御手自

被下之、

廿五日

大汝八幡御祭礼、鎗流馬有之、

十一月

三日

稻荷神事 御名代、鎗流馬有、

十二月

六日

上誕日、

十三日

於虎之間⑨疏之銘御祈禱、大慈寺・正興寺・弥勒院

勤之、

御煤下・御煤竹、御年男勤之、

但、御役人限麻袴、

廿九日

暮之御祝儀、大目附以上於梅之間、

御年繩、坂元家ヨリ差上之、

御書院・御樓門松飾、坂元村三門ヨリ勤之、

椀飯ノ御飾、於御書院御包丁人勤之、

節分

豆打、

但、御休息所御内証御年男、御座ノ間表御年男、

御対面所表御書院御包丁人、御近習番所其外次

年男勤之、

二四四〇

一御煤払御定日、十二月十三日被相替候付テハ、当日⑨疏

銘御祈禱ニ相掛候面々ハ有来通罷出、御祈禱相濟次第

退出、其外御祈禱ニ不相掛面々ハ諸御役座共当番迄罷

出、御用仕廻次第退出、尤、御役人中ハ麻上下着用可

致候、且又十二月廿七日ヨリ晦日マテ御役人中麻上下

着用致来候ヘ共、廿七日其儀ニ不及、廿九日儀モ晦日

有之節ハ着用ニ不及候、此旨表方ヘ致通達、奥掛・御

勝手方ヘハ写ヲ以可相達候、

天明三年卯十一月

将監

二四四一

天明三年卯

一御煤下ノ事、御煤払④*

一御煤竿ノ事、御煤竹

右之通相唱候様被 仰出、

天明三卯正月

二四四一

寛政元酉二月

一 江戸御煤払ニ付御規式左ノ通

一 御座之間御煤竹ハ御内証御年男、御近習番所其外ハ

次年男勤之、

一 東御殿同断、

一 大御書院・表御書院・東御書院、御包丁人勤之、

一 御国元御規式御請被遊候節

一 御休息所御煤竹御内証御年男、御近習番所其外次年

男勤之、

一 御座ノ間、表御年男勤之、

一 御書院・御対面所、御包丁人勤之、

一 御在国ニテ御礼御請不被遊節

一 御座之間ハ御内証御年男勤之、

一 表向之御座々ハ有来通、

一 御留主年ニハ

一 御書院・御対面所迄御煤竹御包丁人可相勤、且又豆

蒔御掃勤之儀モ右兩御座御包丁人相勤之、

右之通被仰渡、

寛政元酉二月

二四四三

延宝四辰

覚写

一 極月廿一日御煤払日、極月十三日可然旨去年雖被仰付

候、当年ヨリハ極月廿一日ニ被仰付候間、可被致其心

得候、以上、

延宝四年辰十二月三日

黒葛原源左衛門

二四四四

一 年頭御謠初ノ儀、被下方ノ御入価ニモ相成ハ、御年限

中御引取、御式ノ儀ハ是マテノ通被仰付候、

一 正月十一日御鎧御祝ノ餅被下候儀、御年限中大目附已

上並物頭且掛ノ肝煎ヘ計被下候、

一 大般若經並愛染明王御祈禱ノ節、出家ヘ御賄被下候儀

〔密旨〕致作略、一度被下粥ノ儀ハ御年限中御引取被仰付

候、末略、

文化六年巳四月

(顯姓久壽) 信濃

二四四五

一就重陽御書院へ御出座、御規式相濟、直ニ御対面所へ御出座、月次之通御礼被遊御請候、引次道之島与人へ御目見被仰付候、畢テ諸士へ御目見被仰付候条、此旨与頭・奏者番其外可承向々へ可申渡候、

安永六年西九月

采女

二四四六

天明七年未

一明七日 御出座ニ付、諸大身分・寄合並同嫡子末子等

モ表諸御役人等モ御書院ニテ御目見被仰付候、

但、御座之間 御目見並龍之間御通掛 御目見有之

来分ハ其通可仕候、

右、可申渡候、

未七月

(市田教國)
勘解由

公義年中御式 但、寛文十年ノ御式

二四四七

一正月元日

御黒書院、甲府館林御礼、

御白書院、御三家、御次越後・加賀・相模、次ニ御三

家ノ次男・御老中、次ニ四品、

大広間大廊下ニテ御詰衆・諸番頭・諸大夫等、

同下段ニテ三千石已上・法印・法眼、

同上段御着座万石以上御譜代・諸大夫、

一同二日

御白書院、御三家ノ部屋栖・松平左兵衛佐、

大広間、国持大名持参太刀着座、御盃・呉服頂戴、次

ニ喜連川呉服台ニテ頂戴、

一同三日

御黒書院、紀伊大納言隠居カ、

御白書院、無官部屋栖大名、

御座之間ニテ柳生氏父子ヲ被召、御兵法初、時服拜領、

同時御馬召初、諏訪部氏同、

今晚御謡初、御三家・御譜代ノ内、依家々登城、老

松・東北・高砂・弓矢立合、御盃台国持大名進上、

一 正月五日

上野御門主・門中、

一 同六日

増上寺門中・新田大光院・金地院・東海寺御礼、御白

書院、

大広間、諸宗出家・神主・山伏、

一 同七日

七種御祝、御三家・御老中、

一 同十一日

御具足御祝、御譜代、

一 二月朔日

日光・久能御鏡餅御頂戴、御装束、

一 三月三日

御熨斗目・御長袴、御着座ニテ 御目見、

一 五月五日

染御帷子・長御袴、御出座、

一 六月十三日

⑨於 御城、端午之 御内書被相渡、国持大名ハ柳之間

ニテ被相渡、使者ニ時服ニツク被下、右外ヘハ御老中

宅ニテ被相渡、

一 六月十六日

御嘉定、御長袴ニテ 出御、国持大名着座、御菓子頂

戴、

一 七月六日

七夕ノ鯖代進上、金一枚、銀^⑩ニ有之、

一 七月七日

白御帷子・御長袴ニテ 御出座、諸大名御礼、依家々

進上物有之、

一 八月朔日

白御帷子・長御上下、国持大名持参太刀、其外ハ前ニ

御太刀置、一同ニ御礼、

一 九月九日

染御小袖・長御上下、諸大名御礼、

一 十月亥亥、御譜代登 城、

一 歳暮

片色、

寛府年中行司

二四四八

正月

元日

松飾、新年ヲ賀ス、

元朝、民間雜煮・芋羹ヲ食テ糴ヲ不設、

四日

高持ノ面々農民ヲ祝ス、

六日

晡時煎豆ヲ打、追儺ヲ行フ、

但、他所節分、此夕国俗用、

七日

若菜ノ節句、払晝兒輩行爆竹、俗児火ト云、

十五日

農家年豊ヲ祈ル、モチトシ望歳ト云、家々食小豆粥、

二月

朔日

俗ニ太郎朔日ト云、

三日

下六日町雛市、俗初市ト云、

十五日

諸寺涅槃会、

彼岸中日

荒田八幡境巡リ神事、

三月

三日

上巳節句、女兒雛飾、

廿一日

談儀講所大師参リ、

四月

朔日

更衣、

八日

諸寺灌仏会、

五月

五日

端午菖蒲飾、

十一日

福昌寺開山忌、

六月

朔日

此日餅飯ヲ食ス、俗万石米ト云、

十五日

祇園会、上下町以年番勤之、

此月中、諸神社・仏宇当祭日設灯籠、貴賤群参、

是ヲ六月灯ト云、

七月

朔日

朔日ヨリ廿八日迄宗廟祀場中、

二日

二日ヨリ十一日マテ近在並上下町踊、及谷山・桜

島、

七日

乞巧奠、児女輩短冊・機糸ヲ設ク、

十四日

十五日

孟蘭盆、俗祭聖靈、詣墓所、設灯籠、

十八日

於頭屋神事能、

廿六日

福ヶ迫諏訪祭礼、

廿八日

諏訪祭礼神事、

八月

朔日

八朔節句、

十五日

月見、

廿五日

天神祭礼、

九月

二日

船玉祭礼、

九日

重陽節句、久富貴宮祭礼、

十三日

月見、

十九日

天守若宮・武大明神等祭礼、

十六日

築地神明宮祭礼、

十月

十三日

正建寺談儀①讀

十八日

宇治瀬祭礼、

初亥

玄猪ヲ祝ス、家々赤飯ヲ食ス、

十一月

三日

稻荷祭礼、鎗流馬、仁王門外市立敷日、

十二月

朔日

俗食稲餅、

十三日

児輩破魔弓・羽子板ヲ弄ス、

廿九日

年頭松飾等ヲ設ケ、年末ヲ祝ス、

御用日

二四四九

一御前御用日

二日 八日 十六日 廿二日 廿七日

右之通、当 御在國中毎月、

一御家老寄合日

五日 十三日 十七日 廿四日 廿八日

右之通被相定候間、此段御支配ノ諸座へ可被仰渡旨御

差函ニテ候、以上、

宝永六年丑八月十七日 仁礼仲右衛門

右之通、此節 御在國中御用日被相定候間、諸役座ヨ

リ申出候御用又ハ諸人ヨリ訴訟等、右日限申出候儀差

扣可申候、乍然日ヲ限タル儀ハ御用・私用共ニ格別ノ

儀ニ候間、右定日無構可被申出候、此旨支配中へ可被
申渡也、

丑八月廿日

御家老座印

二四五〇

(二四四九号行簡朱書)
覚

一 毎月十三日 廿七日

右ノ通、御前御用日被仰出候間、兼テ被仰渡置^⑦ノ通

ニ相心得、相違無之様ニ可仕候、此段可致通達旨御差
図ニテ候、以上、

享保二年酉四月廿日

向井十郎太夫
(友榮)

二四五二

一 毎月 四日 十三日 廿五日

右ハ、当御在國中 御前御用日右之通被 仰出候条、

此旨表方へ致通達、御側方へハ写ヲ以可相達候、

安永二巳四月

(島津久徳)
仲

二四五一

一 毎月 四日 十三日 廿五日

右之通、以来 御前御用日被立置候旨被仰出候条、此

旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へハ写ヲ以可相達候、

天明七未三月

(喜入久徳)
安房

二四五三

一 六日 十三日 廿五日

右之通、毎月 御前御用日被相定、来月六日ヨリ御用

可被聞召上候、差当ノ御用ハ時々可被 聞召上候、

右之通被仰渡、

宝曆元未六月

(島津久徳)
主殿

二四五四

一 毎月 三日 九日 十三日 十九日 廿二日 廿七日

右、御吟味日、

一 毎月 六日 廿七日

右、御再聞、

右之通被召定、
(相力)

一御首途後ハ月次御礼被遊 御請問敷候、且御用日御用

不被聞召管候へトモ、急成儀ハ間ニモ可被 聞召上候、

旁取調可奉伺旨被 仰出候、

右之通被 仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝

手方へモ可相達候、

寛政八年辰八月

(伊勢貞起) 播磨

可相達候、

文化六年巳八月

(島津久泰) 将監

御寄合日

二四五七

年始

一中将様 御部屋栖様①ナシ、 太守様 御前様 若殿様ヨ

リ御料理被進候、其節御惣方様へ被仰入御寄合、

中将様 御部屋栖様①ナシヨリモ右ニ被準可被進候、

但、不被入御方様へハ御向々ニテ可差上候、

御餞別

一太守様①え、 中将様 御部屋様ヨリ御料理被進候、其

節御惣方様へモ被仰入御寄合、

但書同断、

一御前様 若殿様ヨリハ右ニ被準、別段可被進候、

但書同断、

御発駕並御参府ノ節

二四五五

一正月十四日

右ハ正月十三日 御前御用日、以来右之通被相替、其

外ハ是迄之通被仰付置候段申来候条、此旨表方へ致通

達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

天明八申三月

(菅入八権) 安房

二四五六

一四日 十三日

但、正月ハ十四日 廿五日、

右之通、以来 御前御用日被定置候旨被 仰出候段申

来候条、此旨奥(マ)・表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ

一 御惣方様へ御寄合、

但書同断、

一 御入用ノ儀ハ、 中将様 ^㉞ 御前様 若殿様△ 御部屋
様御相中ヨリ可被進候、

御国元御発駕並御着城ノ節

一 御内証様ヨリ御料理可被進候、 中将様御在国ノ節ハ

御相中ヨリ可被進候、

但、御家老方御上下ノ節モ右ニ準候事、

一 太守様御在国ノ節、 中将様其外様御上下ノ節ハ、 諸

御手当向都テ有来通、

御参府脇

一 中将様 御前様 若殿様 御部屋様へ、 太守様ヨリ

御料理被進候、 其節御惣方様へモ被仰入御寄合、

但、不被為入御方様へハ御向々ニテ可差上候、

右之通被仰渡、

寛政九年巳二月廿日

二四五八

一 太守様高輪御屋敷へ被為 入、且又 中将様芝御屋敷

へ被為入候節ハ、御互ニ御挨拶振ノ儀左之通、

一 御慶事其外何ソニ付被為入候様御使者ヲ以被仰進候上、
被為 入候節^㉞、御互ニ御挨拶向御側役御使ニテ被仰
進候、

一 前広御奉札ヲ以被仰進被為 入候節ハ、御小納戸頭取

御小納戸へ被仰付、御互ニ右御役々ヨリ書付ヲ以御挨拶

向取計候様被仰付候、

一 不図被為入候節ハ、御互ニ御挨拶向被仰進間敷候、

但、被為入候段被仰出候ハ、御小納戸頭取御小納

戸ノ間ヨリ被為入候旨、御刻限等マテモ申上候様被

仰付候、

右之通被仰渡、

寛政八年辰十二月廿五日

年頭御規式 年中御式可見合

二四五九

一年頭御規式被遊 御請候儀、当分ノ御交代ニテハ後年

不被遊 御請候テハ及中絶儀モ可有之候間、 思召ヲ
以時々可被遊 御請旨先年被 仰渡置候、年頭御規式
ノ儀ハ格別ノ御事候故、右被 仰出置候通、時々被遊
御請候ヘトモ、当時御儉約年限中ニテ、残年数モ今少
シニ相成候間、右年限中ハ不被遊 御請、七ケ年過候
以後ヨリ 思召ヲ以可被遊 御請旨被 仰出候条、此
段表方ヘ致通達、御側方・御勝手方ヘハ写ヲ以可相達
候、

明和八年卯十一月六日

(權山久智)
左京

小林中(政史)太兵衛

二四六〇

一年頭御礼ノ儀ハ格別成御大礼ノ詛ヲ以、七ケ年中トテ
モ御礼ノ式マテ可被遊 御請候、且年限内熨斗目着無
用被仰付置候向々、年頭三ヶ日ハ熨斗目着仕候様被仰
付候、

安永三年午十二月

二四六一

一当年頭ヨリ江戸御国元共、表向御福引被相止候旨被仰
出候、

明和八年卯正月

二四六二

一享保七年寅正月十五日、元日ノ御取持ニテ御規式其外
椀飯御飾等有之、

一同日、支度熨斗目・半切、

一同日、寄合並已上ノ歷々其外諸役人出仕、年始ノ御祝

儀申上、御家老被為逢候、

一同日、六組ノ諸士出仕、

一同十六日、寺院・山伏・仕人琉人出仕、

但、正月四日ヨリ十五日マテ罷出候、寺院一日出仕、

一三町年寄・年行司御祝儀申上候、

一外城衆中・金山町人、十六日ヨリ廿三日迄ノ内御祝儀、

一同日、諸御役人、熨斗目・半切、

一同十八日、御鎧御祝有之、例年之通、支度熨斗目・半

切、右之通被仰渡、

享保六年丑十二月晦日

右ニ付、御船手御船祝十六日、

二四六三

一年頭御規式ノ内、御手掛之事、御喰摘ウシヅク共兩様相唱、御

次第書等ニハ、御喰摘ト可相認旨被 仰出、

天明三年卯十月

二四六四

文化五年辰十一月、御儉約ニ付左之通

一高輪御殿 御書院

右、年頭其外、立松・寿老人相飾来候へトモ、此節ヨ

リ都テ御取止被 仰出候、左候テ、年頭計ハ御掛物絵

様中央、香台又ハ置物見合相飾ノ事、

但、松ノ内七日迄、

一御書院

一御客間

右ニケ所、平日御床飾不及候事、

一御見舞掛ノ御客様等有之節トテモ平日ノ通、

中略、

一鍾馗ノ絵、是マテ正月十四日ヨリ同廿九日マテ掛来候

へトモ、其儀ニ不及、已来ハ外人物ノ絵同様ニ可相掛

事、

一御休息所並大奥向御床ノ儀ハ是迄仕来ノ通、

但、御立松ノ儀ハ御引取、

一芝御殿 御書院

右、年頭其外、立松・寿老人相飾来候へトモ、此節ヨ

リ都テ御取止被 仰出候、左候テ、年頭計御掛物目出

度絵様中央、香台又ハ置物相見合相飾ノ事候、左候テ、

此御掛物寿老人一幅ニ中央其外御用ニテモ宜候、又ハ

三幅二幅対ニテモ右同断ノ置物ニテ宜敷候、

但、松ノ内七日迄、平日ハ不及候、

一御座之間

右同断、

但、同断、

中略、

一御休息所・御内証向其外大奥御床ノ儀ハ是迄ノ御仕来

通、

但、御立松ノ儀ハ御引取、

一御国元 御対面所 御書院 御座之間

右三ヶ所、芝御殿御書院・御座之間御飾ノ通候事、右

外御床毎ニ年頭其外御床飾不及候、末略、

右ハ、此節格外ノ御取縮ニ付、已来右之通被仰付候条、

於江戸申渡有之候段申来候条、此旨可承向ヘ可申渡候、

辰十一月

(島津久泰)
将監

二四六五

年頭御規式

一御在国・御在府共、御次第書ヲ以被仰渡候、御用係ノ

御用人兩人ニテ候、都テ若御年寄衆御首尾ニテ候、

一御次第書ヲ本ニシテ時々ノ儀被為窺ニ、委細ハ御次第

書ニ委細有之、

一御一門ヨリ一所持^{①格}マテハ御在府ニハ江戸ヘ御太刀進

上有之、其外ノ諸地頭又ハ家ニ付テ進上ノ面々ハ、

御着城ノ節年頭ニ御礼被遊御受候節、納太刀有之、都

テノ儀奏者番受込、

一宝曆四年戌十二月首尾帳、来亥年頭納太刀ノ儀ニ付テ

ハ、先達テ 又三郎様御方ヘハ正月三日納太刀被仰付

候旨、首尾係ヘ被仰渡候処、亦々御取返ニテ、御着

城ノ節 太守様御方同前何分ニモ可被仰渡由、年頭納

太刀無之、隅州様御家督内 益之助様御部屋栖ノ節

ハ、右最初被仰渡候通首尾有之候由、享保十八年丑・

同二十年卯正月首尾帳委細有之、此節ハ 御家督様ヘ

御礼未相済内 御部屋栖様ヘ如何ノ儀ト御記録奉行為

被申出由、

一右進上物ニ付テハ、当正月又ハ 御着城脇ニテモ、其

身ニ付テハ納太刀被致候面々ノ内、継目等未被仰付人、

地頭職ノ御礼未相済人、先達テ被相窺、御沙汰ノ上何

分ニモ可申渡事、

一御在府ノ節、一所持格以上ノ人ノ内ヘ御番頭御役其外

寺社奉行ヨリ町奉行御役被仰付置候人、未継目又ハ御

礼ニテモ不相済候人、地頭職^②無之人、地頭職△ノ御

礼未相済候人、義岡・町田・川上・伊集院・新納・大

島・志岐・田尻・中西ナト家ニ付テノ人、継目等未被

仰付候カ又ハ幼稚ナトニテ候ハ、専氣ヲ付可致沙汰

候、尤、当人ヨリモ被申出答候事、

但、御役ニ付テハ不被申出事、御次第書ニ無之候テモ被罷出候儀ハ、年中記仰渡委曲有之、年頭御次第書ニハ一切無之、右之趣年頭御在国ニハ持参太刀、御在府又ハ、御下国脇ナトノ節ハ納太刀進上ノ窺無之候テ不叶事也、

一伊勢兵部殿被相果、繼目未被仰付候内ニ候ヘハ、伊勢巨殿儀、御番頭御役ニ付テハ、年中記仰渡之趣ヲハ專(守カ)進上又ハ納太刀等有之事ニ候、然ハ家ニ付テノ進上物ノ場ハ相欠筈ニ候、ケ様成時ハ時々氣ヲ付可相窺事、

一御着城ノ節、江戸詰ノ神社奉行以下町奉行御役マテノ諸御役人其外右ノ内諸地頭、江戸ニテ持参太刀ハ勿論也、

但、御部屋様御方ヘモ同断、

一一所持⑧杯ノ人、御家老・若御年寄・大御目附御役被相勤候人ノ子共、御番頭ナト被相勤候人ヘ、御在国ノ節年頭持参太刀ノ節ハ、家格ノ場ノ進上依願嫡子ヨリ被差上候、御在府ノ節ハ御座配無之故、右体ノ沙汰無之候、然トモタトヘハ、御部屋様ヘハ納太刀有之事共ニテ候ハ、家格ノ場ハ御親父江戸ヘノ御太刀

進上マテニテ爰許御番頭ナト御役ニ付テノ進上物ハ可有之事ニ候、無役ハ進上ノ沙汰ニ不⑨及答也、

但、御座配進上物不及候儀ニ付、寛延(空白)伊集院十藏殿御用係ノ首尾帳有之、

二四六六

享保九年辰七月

一年頭御礼着座ノ次第、向後客居・主居ヘ無差別、御對面所客居ノ方ヘ一統着座被仰付候、一統ニ相殘候人数ハ又一座二座ニモ人数次第可被仰付候、

一島津兵庫殿・島津玄蕃殿・島津左衛門・島津周防殿・

川上一学・島津図書・島津内膳殿・島津中務殿

右、図書殿・内膳殿・中務殿家同格ニテ、三年替家格之場着座仕来候ヘトモ、図書事乍同格無役ニテ、大御目付引次月次御礼御座ノ間ヘ罷出事候ニ付、当分ハ右名書之通、図書上座可罷出候、中務殿・内膳殿、御役ニ付テハ御書院着座被仰付候、家格ノ場ニテ子共罷出事候、先役ハ中務殿ニテ候ヘ共、内膳殿嫡子藤次郎寺社奉行御役相勤、中務殿嫡子島津又七事御番頭相勤候

付、当分ハ藤次郎次ニ又七可罷出候、到後年ハ部屋栖無役ノ者ハ親ノ御役次第罷出管ニ候、家督ニテ其身無役ノ者同格ノ家ハ年生次第上座可仕候、此儀ハ時々其節ノ御役又ハ年生ヲ以、前後ノ沙汰可致候、

一 島津左殿・島津將監殿・島津助之丞殿^{⑤ナシ}

右、將監殿・助之丞同格ニテ、隔年家格ノ場着座仕事候ヘトモ、將監殿御役内ニテ、養子島津小平太事モ御番頭相勤、助之丞事無役ニテ候故、当分ハ右之通着座被仰付候、尤、後年ノ儀モ都テ前条之通相調可申候、

一新納菊千代

右、四家ニテ候得共、先祖ノ勲功ヲ以、三年ニ一度島津左殿着座ノ場ニ罷出来候、此節一統ニ被仰付候付テモ三年ニ一度ハ此中ノ通、左殿家ノ場着座被仰付候、其外ハ此場着座ニ被仰付候、且又左殿家部屋栖有之、一所ニ着座仕候時ハ、左殿家ノ頭ニ三年ニ一度ツ、着座被仰付候、

一 樺山主計・島津筑後・桂太七郎・喜入主膳・町田郷九郎・伊集院藏人殿・島津帶刀・島津内記

右、帶刀・内記家同格、着座ノ次第前条同格ノ家同断

可相心得候、

一 北郷四郎・島津權太夫・大野七郎太夫・吉利左右衛門右、七郎太夫・左右衛門家同格、着座ノ次第前条同断、

一種子島彈正殿

右彈正殿家、四日着座仕来候ヘトモ、今度年頭御礼着座都テ一列被仰付候ニ付、三日ニ此連名ノ通被仰付候、一 島津仁十郎殿・顯娃長左衛門・禰寝内記・入来院主馬殿・比志島隼人殿・肝付典膳殿・菱刈孫兵衛・諏訪甚六・川田助右衛門

右之通、思召ヲ以、向後年頭ノ御礼着座被仰付候、

但、外書略ス、

一 与頭已上ノ二男三男、未格式不相究候間、初テ其外御目見被仰付候儀有之候節ハ、御礼席ノ儀、向後与頭同前ノ席ニテ候ハ、難被仰付候間、諸士御目見ノ席同前ニ一枚目ニテ御礼可申上候、

一月次ノ御礼ノ儀ハ、与頭ヨリ以上ノ二男三男、御用人ノ同席ニテ御用人ヨリ先ニ罷出、御礼可申上候、尤、御用人ニ相加儀ニテ無之候、

右之通、格式相心得候様被仰渡、

五十一年月廿八日

(島津久尙)
將監
(種子島時成後北条時守)

享保十八年丑八月

(島津久龍)
市太夫

織部
(北郷久嘉)

作左衛門

取次
島津八郎左衛門

二四六八

一御書院 御座ノ間 御対面所

右、御座々へ年頭ニ付、^(空白)重瓶子御飾等有之事候へト

モ、御儉約年限中御引取被仰付候条、可承向へ可申渡

候、

文化六巳二月

(鎌田政興)
典膳

御役内カ

二四六七

一新納次郎四郎・山田新助

右ハ、年頭 御在府ニテ、其年中被遊 御帰国、年頭

ノ御礼被遊御受候節、持参太刀被仰付候へトモ、向後

納太刀被仰付候、月次御礼又ハ諸節句ニモ罷出、御

目見仕事候故、右之通被仰付候、

一志岐藤右衛門・田尻八郎右衛門・中西文右衛門・大島

次郎太夫

右ハ、年頭 御在府ニ付テハ、其年中 御帰国被遊、

年頭ノ御礼被遊御受候節、持参太刀被仰付置候へトモ、

向後納太刀被仰付候、諸節句ニモ罷出、 御目見仕事

候故、右之通被仰付候、

右之通被仰渡、

二四六九

写

一只今マテ年頭御座配ト唱候へトモ、向後年頭御礼着座

ト唱、書付等ニモ其通可相記旨被仰付候間、此段致通

達候、以上、

享保八年卯七月廿三日

(島津久純)
大藏

八朔御規式

二四七〇

寛政二戌年ヨリ左之通被召定候、

一御在国 八月朔日

一御座之間へ 御出座、

一御一門方

右、進上ノ御太刀二之間上御敷居ヨリ下二畳目上ニ御

側御用人備之、同下ニテ御礼、直ニ御縁類へ着座、順々

同断ニテ御祝儀被申上之、御家老御取合、御意又御

取合有テ退座、

一奥向ノ面々

御目見、且席詰等ノ儀トモ有来通、

一御書院へ 御出座、 御先立御家老、

一御家老

右、一人ツ、御太刀持参、三之間御敷居内上五畳目備

之、四畳目ニテ御礼、退座、

但、御太刀一腰ツ、奏者番拾之、

一若年寄・大目附

右同断、四畳目備之、三畳目ニテ御礼、退座、

但書同断、

一島津藤馬(久徳)・島津相馬(久平)・島津多門(久備)・伊集院伊膳(久文)・島山数馬(正謀)・鎌田藏人(正謀)

右、一人ツ、御太刀持参、三之間御敷居内上ニ五畳目

ニ備之、同四畳目ニテ御礼、御右ノ方ニ着座、御家老

御取合、御意又御取合有テ退座、

但、御太刀五腰ツ、奏者番拾之、

一義岡宗次郎(久賢)

右、三之間御敷居内上へ三畳目ニテ御礼、退座、

但、進上中紙目録 御出座前以於敷舞台奏者番請取

之、

一席詰等ノ儀有来通、

一御対面所へ 御出座、 御先立御家老、

一島津左衛門(久徳)・島津美濃(久賢)・島津図書(久徳)・島津筑後(久般)、一所持

同格

右、一人ツ、御太刀持参、御中段御敷居内四畳目上ニ

相備之、同下ニテ御礼、御右ノ方へ十人ツ、着座、

御家老御取合、御意又御取合有テ退座、

但、御太刀五腰ツ、奏者番拾之、

一川上主鈴(久積)

右同断、四疊目下ニ置之、三疊目上ニテ御礼、退座、

但、御太刀奏者番拾之、

一新納次郎(久徳)四郎・新納五郎(久起)左衛門・町馬主馬(町田カ)・伊集院平治(本ノマ、久輔)、諸地頭

右、次郎四郎・平治御中段御敷居内上三疊目ニテ御礼、其外兩人ツ、同二疊目ニテ御礼、

但、進上ノ目錄御出座前以於敷舞台奏者番請取之、

一桂外記(久武)

右、進上之中紙目錄前条同断、御礼席ノ儀ハ是迄之通、

一大番頭以下諸御役人其外進上物等無之面々、御礼且席詰等ノ儀共都テ有来通、

一江戸詰ノ御家老於台子ノ間名代ヲ以奏者番へ相付御太刀納之、

一御当地へ不在合又ハ病氣ノ人、御太刀進上ノ分ハ夫々於席名代ヲ以納太刀、中紙進上ノ面々ハ於敷舞台名代ヲ以目錄納之、

一御在府ノ節、御一門方並御役家格ニ付御太刀進上之面々ハ、於江戸名代ヲ以進上被仰付候、尤、右ノ内江戸詰ノ面々モ都テ年頭ノ振合被仰付候条、其通可被相心得

候、

一右同断ノ節、川上主鈴於御当地御太刀進上納被仰付候、尤、以来江戸詰合ノ節ハ於江戸進上被仰付候、

一右同断、中紙進上ノ分ハ謁前於敷舞台目錄奏者番請取之、尤、江戸詰ノ面々於江戸進上被仰付候、

以上、

二四七

一八朔進上物被仰付候面々、是迄以使者差上来候へトモ、以来持參太刀等被仰付候儀共、別紙之通被仰付候条、

此旨向々へ相達、可承御役々へモ可申渡候、

寛政二戊五月

(島津久邦) 石見

二四七二

一八朔、中将様へ進上物ノ儀、是マテ御一門方並島津左衛門一列マテ進上被仰付置候へトモ、以来左之通、

一御一門方、島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後、御家老・若御年寄(カ)・大目附、一所持・同格

右面々、於江戸名代ヲ以御太刀進上被仰付候条、年頭

之通可被相心得候、尤、右ノ内江戸詰ノ面々モ都テ年頭ノ振合被仰付候、

一 右外、家格地頭職ニ付、八朔 太守様へ進上物被仰付候分ハ、都テ 中将様へモ御同様進上被仰付候条、仕向等ノ儀都テ御同様可被相心得候、

右之通被仰付候条、此旨向々へ相達、可承御役々へモ可申渡候、

寛政二戊五月

(島津久邦)
石見

二四七三

一 八朔ニ付、以来 御部屋栖様へ進上物 御隠居様御同様被仰付候旨被 仰出候条、此旨可承向へ可申渡候、

寛政二戊八月

石見

二四七四

寛政六年寅八朔ニ付

一 八朔御太刀・中紙進上仕来候人、当日御各目外差支ノ訳有之、進上無之候ハ、追テ進上、

一 御礼ノ節、御一門方・諸大身分家督嫡子、御側役以上、

諸地頭、着服白帷子・半袴、
一 寄合並、着服半袴、

二四七五

御留守年八朔之御次第 寛政六寅八朔

一 御一門方、於鶴之間謁御家老御祝儀被申上、

一 大目附以上、於梅之間御側役へ取合同断、

一 島津左衛門・島津筑後、於水仙之間同断、御家老謁、

一 御側御用人・両奥向御近習通、於梅之間奥奏者番取合

セ、

一 四家、於松之間謁御家老、

一 無役ノ一所持・同格・寄合・同並、右嫡子末子、敷舞

台へ大目附以上出席、一同謁同断、奏者番取合、

一 一番頭ヨリ当番頭迄詰衆、於松之間縁頼謁御家老、

一 御用人以下諸御役人、於竹ノ間同断、奏者番取合、

一 諸士・諸与与力敷舞台・菊之間・杉之間・山吹之間・

柳之間一同揃、大目附以上松之間・芍薬之間列座、月

番御家老跡達テ御中段へ出席、奏者番披露、

一 川上主鈴、敷舞台へ奏者番出席、家ニ付進上ノ御太刀

納之、

一中紙二束ツ、

義岡宗次郎・桂外記・新納五郎右衛門・町田主馬・伊集院平治、諸地頭、

右同断、進上ノ中紙目錄納之、

一練蕉布七反ツ、・焼酎一壺ツ、

羽地按司

右、於數舞台謁御家老御祝儀申上、奏者番取合、

一練蕉布五反ツ、・焼酎一壺ツ、

在番親方

右、於虎之間月番御用人へ取合、御祝儀申上之、

一羽地按司附役 琉球蔵役

羽地按司与力 琉球書役

羽地按司右筆 在番親方与力

羽地按司(儀者カ)儀差

右同断、御祝儀申上候、

一諸郷郷士年寄一人ツ、組頭一人ツ、於鷲之間御帳

ニ相付御祝儀申上之、

一中紙三束ツ、

但、三町相中ヨリ進上ノ儀、是迄之通、

三町惣年寄・同格・年寄・同格・年行司・同格

右同断、御祝儀申上之、

以上、

寛政六寅年

二四七六

寛政八年辰

一当八朔御規式被遊御受候段被仰出候条、此旨可承向へ

可申渡候、

二四七七

八朔御規式ノ次第

一御座ノ間へ 御出座、

一島津周防殿・島津兵庫殿・島津美作殿・島津又八郎殿・

島津玄蕃殿

右、御祝儀被申上之、奥掛御家老御取合、

一御家老・若年寄・大目附

右同断被申上之、

一中將様へ

島津周防殿・島津兵庫殿・島津美作殿・島津又八郎殿・

島津玄蕃殿

右、於鶴之間謁御家老御祝儀被申上之、

一御家老・若年寄・大目附

右、於梅之間御側役へ取合、御祝儀被申上之、

一太守様 中將様へ

島津左衛門・島津筑後

右、於水仙之間謁御家老同断被申上之、

一御側御用人以下奥向御近習通

右、於桜之間右同断奥奏者番取合、

一島津美濃・同図書・同和泉・同石見

右、於松之間謁御家老右同断、

一種子島佐渡

右、謁相濟、引次右同断、

一無役ノ一所持・同格・寄合・同並

右嫡子・末子

右、敷舞台へ大目附以上出席、一同ニ謁右同断、奏者

番取合、

一当番頭以上並詰衆

右、(於脱之)松之間縁頼謁御家老衆右同断、

一御用人以下諸役人

右、於竹之間謁御家老右同断、奏者番取合、

但、相濟兼候へ、竹之間格ニテ於敷舞台右同断、

一諸士・諸与与力

右、敷舞台・菊之間・山吹之間・柳之間ニ掛、一同揃、

御目附・寄大目附以上、松之間・芍薬之間へ列座、月

番御家老跡達テ御中段内へ出席、奏者番披露、

一太守様⑧へ

一御一門方

右、於台子之間以使者奏者番へ相付納太刀、

一御家老・若年寄・大目附

右、於台子之間奏者番へ相付御太刀納之、

一江戸詰ノ御家老・若年寄

右、(於脱之)台子之間名代ヲ以奏者番へ相付御太刀納之、

一島津左衛門・同美濃・同図書・同筑後

右、於芍薬之間縁頼右同断、

一一所持・一所持格ノ面々

右、於菊之間右同断納太刀、

一 太守様 中将様へ

一 川上主鈴

右、於敷舞台奏者番出席、家ニ付進上之御太刀納之、

一 中紙二束ツ、

義岡宗次郎・伊集院平治・新納五郎右衛門・町田主馬、

諸地頭

右同断、進上之中紙目錄納之、

一 練芭蕉布五端ツ、

一 焼酎一壺ツ、

在番親方

右、於虎之間月番御用人へ取合、御祝儀申上之、

一 琉球藏役

右同書役・在番親方与力

右同断申上之、

一 大河平休兵衛

右、御当地へ差越、月番御用人へ相付御祝儀申上候、

一 諸郷郷士年寄一人ツ、組頭一人ツ、

右、於鷲之間御帳ニ相付、御祝儀申上候、

一 中紙三束ツ、

但、三町相中ヨリ進上ノ儀是迄之通、

三町惣年寄・惣年寄格・年寄・年寄格・年行司・年行

司格

右、御祝儀申上候儀是迄之通、

以上、

二四七八

八朔御規式ノ御手当

一 御座之間 御出座ノ節、相詰候御役々先規之通、

一 御一門・大目附以上、着服白帷子・長袴、諸大身分家

督嫡子・御側役以上・諸地頭、着服白帷子・半袴、

但、御一門方・大目附以上、 中将様御祝儀謁者半

袴、

一 寄合並、着服半袴、

一 御一門方於江戸名代ヲ以 中将様へ御太刀進上、

一 島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後、面々於

江戸名代ヲ以 御同人様へ御太刀進上、

一 太守様 中将様へ御太刀進上ノ面々、御当地へ不在合

又ハ病氣ノ人ハ夫々於席名代ニテ納太刀、

一中紙進上ノ面々モ同斷、

一御太刀・中紙進上仕筈ノ人、当日差支ノ訳有之、進上無之候ハ、追テ進上、

一若殿様ヘノ進上物ハ八月廿八日夫々於席進上、

右外、別冊御次第書ノ通、

以上、

諸節句御規式御飾

二四七九

一年頭御規式ノ内、御齒堅メ八種ノ御膳・御力餅御頂キ、

坂元家ヨリ相調差上来候、此節ヨリ 御惣方様於大奥

御寄合ニテ差上候付、坂元家ヨリハ 御家督様迄差上、

其外ノ御方様ヘハ御広敷御膳所調ニテ可差上候、

一坂元家ヨリ差上候前条品、以来御広敷御膳所ヘ相付可

差上候、

但、御頂餅二通差上来候内、一通ハ御居リ御用、一

通ハ御備御用候間、御居迄御広敷御膳所ヘ差出シ、

御備御用ハ有来通御膳所ヘ可差出候、

一玄猪御飾

御在府・御在国共大奥御書院ヘ可相飾候、

但、御広敷御膳所調、

一正月朔日 御規式

一正月十一日 御饅餅

一御煤掃ノ節 御年重餅

一歳暮ニ付 式御三献

右御規式、御在府ノ節ハ於御休息所御蔭ニテ差上来

候ヘ共、此節ヨリ於大奥御蔭ニテ差上候ニ付、於御休

息所別段差上ニハ不及候、

但、正月朔日御規式、御在府ノ節ハ蓬萊式御三献

迄御蔭ニテ差上、其外ハ不差上候ヘトモ、於大奥

御惣方様御寄合ニ付御蔭差上候節ハ都テ御同様、坂

元家ヨリ相調候品モ御膳所調ニテ可差上候、

右ハ、此節ヨリ御規式於大奥 御惣方様御寄合被為在

候ニ付、前条之通被仰付候条、可承向々ヘ可申渡候、

天明七未八月

(市田教國)
勘解由

二四八〇

(二四七九号行間朱書)

▽^⑦朱書△

一五節句

正月七日 三月三日 五月五日 七月七日 九月九日

但、俗ニ七節句ト申候ヘトモ、是ハ無キ事候由、是^⑧之

非七節句^⑨ト申事候ハ、年頭ニ八朔ヲ加ヘ可申哉ノ

旨、林大学頭殿ヘ御尋ノ節被申越候、

二四八一(の1)

天明四年

一年頭御飾御手当

一御鏡餅六枚

赤白半方ツ、

但、一枚ニ付一斗五升取、差渡一尺二寸・高サ四寸

五部、

但、赤餅一升ニ付小豆三合ツ、

一菱餅三十六枚

赤白半分ツ、一枚ニ付二升四合取、長一尺二寸・厚

一寸、

但書同断、

一花平餅三十九枚

▽^⑩赤白丸形△赤白半分ツ、一枚ニ付二合一勺取、差

渡四寸・厚サ一寸、

但書同断、

右三行、三餅分^⑪御台所調、

一大伊勢エヒ五ツ、^⑫

右一行、御船奉行受込ニテ所寄物、

一葉付橙五ツ、^⑬

一葉付密柑五十^(蜜)

一柑子枝付五十

但、三ツ計ツ、相付枝、

一野老五十房

一大ユツリ葉拾把

但、尺廻リ、

一裏白六把

但、右同、

右六行、御代官受込ニテ所寄物、

- 一 生中栗五十
- 一 五島大スルメ六枚
- 一 中熨斗三十筋
- 一 細根大根三本
- 一 昆布三枚
- 一 根川松三本
- 一 アラレ菓子八十目
- 一 米六合
- 一 田ツクリ五十
- 一 柏実五十
- 一 勝栗六合
- 一 コマメ五十
- 一 水カラ結昆布五十
- 一 ヤブコフシ十本(ヤブコウジ)
- 一 盛物串百本
- 一 大奉書二十枚
- 一 白赤長水引十五把
- 一 右十八行、御台所調、
- 一 本タハラ十五把 五寸廻④く

但、升目ニシテ二升六合、

右一行、此節ハ大坂御買下ノ由、御広敷頭ヨリ承候、
 後年ニモ相掛筈ニ付、向後御買下ノ儀、当座ヨリ大坂
 御留主居へ申越候様被仰付度奉存候、

一 太守様 御在府・御在国共

一 明姫様・於千万様 御一方様へ一飾ツ、

右ハ、来辰年頭ヨリ大奥ノ御飾被仰付④候旨被仰渡、御
 飾入具ノ儀御広敷頭ヨリ問合承申候間、寄物ノ儀問合
 次第向々ヨリ当座へ相渡候様被仰渡、其外ノ品ハ御台
 所受込ニテ御蔵有物外ハ御買入被仰付度奉存候、此段
 申上候、以上、

御台所頭
 大川平源太左衛門

(二四八一の2)

此表、申出ノ通申付候条、如例可申渡也、

御勝手方印
 卯十二月朔日

取次(久尊)
 大野掃部

二四八二

享和元年酉十二月

一 五正立脇御中門

▽^④ 御鷹部屋脇御中門

御鷹部屋南御中門

御休息所御庭御中門

七正立御厩御中門

十正立御厩御中門

御花園上之口御中門

山下通御中門

右、不及御飾候、

一 御本丸御鷹部屋御門二ヶ所

右、同御鳥見詰所中門

御鳥方中門

二丸御成玄喚

右、同御中門

右五ヶ所、不及御飾候、

右之通被仰渡、

西十二月四日

(純以)
西恰之介

二四八三

一 七夕 御出座諸士並諸与与力へ 御目見被仰付候、

中将様^④ノ儀ハ相謁御祝儀可申上候、

此旨可申渡候、

寛政七年卯七月 左京

二四八四

一 於江戸御煤弘ニ付御規式左之通、

一 御座ノ間御煤竹御内証御年男、御近習番所其次年男

勤之、

一 東御殿ノ儀モ同断、

一 大御書院・表御書院・東御書院御包丁人勤之、於御国

元同断ニ付御規式左之通、

一 御規式被遊御受候節、御休息所御煤竹御内証御年男勤

之、御近習番所其次年男勤之、

一 御座之間表御年男勤之、御書院・御対面所御包丁人勤

之、

一 御在国ニテ御礼御受不被遊候節、御座之間御内証御年男可相勤候、表向ノ御座へハ有来通、

一御留守年ニハ御書院・御対面所迄御煤竹御包丁人可相
勤、且又豆蒔御掃初⑧ノ儀モ右両御座御包丁人相勤可申
候、

右之通、向後間違無之様可被仰付旨申来候条、可承向々
へ可申渡候、

天明九年酉二月十六日

(伊勢貞矩)
播磨

二四八五

御船手御規帳朱書

一年頭御祝方並諸神事其外何角ニ付、今迄ハ清酒相渡場
へハ、向後五月ヨリ八月迄ハ夏通諸白、九月中ハ古諸
白、十月ヨリ四月迄ハ地諸白渡申付候間、清酒渡来候
盃数右ノ品々ヲ以可相渡旨被仰渡由、享保廿年卯二月
四日物奉行方ヨリ諸座へ通達有之候、

島津家歴代制度卷之三拾七 享保 寛政

御礼席之事并諸御礼事 元服之場所可見合

二四八六

享保十一^〇年午^〇年頭御礼ヨリ

一元日

御書院

御家老 若年寄 大御目付

一三日

御座之間

御一門

一同日

御対面所

持参太刀拾人ツ、着座、以前ニハ御座配六番座定有之、

当分ハ御一門モ打込ニテ御礼被仰付候、

二四八七

延享五年辰年頭ヨリ元日ニ被仰付候、

一元日、於御座之間御一門御礼披露太刀一列着座、御

盃頂戴、畢テ島津図書殿持参太刀着座、御盃頂戴、

(以下、総目録より補)
御礼事

謁振

(この一行、本文より補)
御酒其外頂戴并進上之事

登殿口

御城内御飾

御座御飾

御城内御殿廻

諸所御門

下馬下乗

乘輿御免

江戸駕籠

杖御免

御免御用屋敷

三都御屋敷

二四八八

(二四八六号行間朱書)

一元日、於御書院持参太刀之節、御盃頂戴所

一 二之間末數居ヨリ上段五疊之目疊頭、島津備中殿

一 右同四枚ノ疊頭、御家老・若年寄・大目付

一 右同三枚目疊頭、御側詰

右之通、来年期ヨリ御盃頂戴之席被仰付候段、延享四

卯十二月被相改候条、此段可承御役々へ可申渡シ、
①頭 ②候

但、備中殿当分ハ於御座之間御盃頂戴有之、無用、
③候ニ付 ④候

寛延四未十一月
(島津久起) 将監

二四八九

(二四八七号行間朱書)

一 若御年寄・大御目付着座有之候家筋之面々ハ、元日於

御書院持参太刀ニテ着座被仰付、⑤其外家格之通、夫々之

席ニテ嫡子ヲ以進上仕候様被仰出置候趣、⑥も候間、御役

之場ニテ御太刀進上之人ハ不及着座、家格之場ニテ嫡

子御太刀進上無之人モ向後不及着座筋ニ被仰渡候、

右之通、延享四卯十二月被相定候条、此段可承御役々

へ可申渡候、

二四九〇

天明六年十二月左ノ通

一月次御礼之御次第

御座之間

御一門、島津左衛門、大目付迄、御側御用人御側役 奥向

御書院

独礼之面々、御番頭以上、以前大目付已上相勤候大身

分、以前御番頭以上相勤候大身分、無役之大身分、大

目付以上之嫡子嫡孫、無役大身分之嫡子嫡孫、御用人

以下寄合並同嫡子、大身分之二男以下諸御役人、

右之通被相定候条、向々へ可致通達候、

天明六年午十二月

(喜久福) 安房

二四九一

(二四九〇号行間朱書)

一 御一門於御座之間御目見之節、以来脇指被帶候様被仰

渡、

安永十丑四月

持歌
一 一所々格、着座二帖目之上、

一 着座無之、家々付テ罷出之者、二帖目之下、

一 大島休左衛門・義岡左平太、三帖目之上、

一 諸地頭、三帖目之下、

御盃被下所

一 上段江上リ着座之人数、

一 一帖之上着座無之、家筋ニ付テ罷出之人数、

一 一帖之下、大島休左衛門・義岡佐平太、

一 二帖目之上、諸地頭御流、

御謡初其外 御規式付筒構ヨリ後、御盃之御流被下候

節ハ、御家老之上座ハ可仕候人、御城代・御家老・若

年寄・大目付、月次ニモ独礼伴之人上段へ上リ、寺社

奉行・御勘定奉行・御番頭者一帖目之下、御用人ヨリ

二帖目之上、

〔行間本巻〕
御対面所御礼所次第

一 一所持ヨリ寄合之嫡子迄、敷舞台末ヨリ三枚目、

一 御用人・町奉行・御近習役・寄合並嫡子、二枚目、

一 一所持・同格・寄合並二男三男、右同、席次第不同、

一 右引次御役人同席、

一 御家老対面所之節ハ寄合並已上二男三男、
御書院

一 御城代・御家老・若年寄・大目付、年頭御太刀辱所、

二之間ヨリ二帖目之上、

一 若年寄・大目付着座無之者、三帖目之上、

一 御城代・御家老・若年寄・大目付、御盃、上之間下ヨ

リ二帖目之上、

一 若年寄・大目付、年頭御太刀一人ツ、表御年男拾可

申候、

一 御謡初之節、上段ニテ御流被下候人数者長袴着可致シ、

正徳元卯九月

二四九七

御在府中謁席

一 鶴之間、御家老謁、御一門

一 水仙之間、御家老謁、左衛門・筑後

一 松之間、御家老謁、家名方家督・部屋栖

一 梅之間、御側役取合、大目附以上

一 松之間縁類、御家老謁、大番頭ヨリ当番頭迄詰衆

一 敷舞台、大目付以上一同出席、調、奏者番取合、一所持・

同格・寄合・同並嫡子末子

一 梅之間、奧奏者番取合、御側御用人・両奥向御近習通

一 竹之間、御家老調、奏者番取合、但、相濟、兼候ハ、竹之間格ニテ於敷舞台、御用人以下諸御

役人

一 敷舞台・菊之間・杉之間・山吹之間・柳之間、一同、

大目付以上考案之間列座、月番御家老跡達テ御中段内へ出席、

奏者番披露、諸士諸役与力

一 鷲之間、御帳附、諸郷郷士年寄・組頭老人ツ、

右、寛政六寅八朔御次第書抄出、

二四九八

一 与中之諸士、御在府之節者年頭迄謁御家老御祝儀申上、

五節句之儀者御帳相付致退出候様被仰付来候得共、向

後五節句之儀モ、年頭同様謁御家老御祝儀申上候様被

仰渡、

天明五巳四月

(島津久庵)
仲

二四九九

一 島津(久庵)左衛門、此已前御家老ヲ以相勤、且家々柄(符カ)ニモ申

候間、思召ヲ以、向後御座之間へ御礼申上、年始八

朔之儀者是迄之通相心得候様被仰渡、

天明五年巳三月一日

(島津久庵)
近江

二五〇〇

一 種子島彈(久庵)正

右、月次御礼等之節、以来独礼之面々御礼相濟候間、

其身老人於御書院御敷居内一疊目御礼可申候、其節奏

者番(名)ハ前披露可仕候、

右、格別之思食ヲ以其身計被仰付候条、此旨表方へ致

通達、御勝手方へモ可相達候、

天明八申八月廿四日

二五〇一

(二五〇〇号行間朱書)

一 島津筑(久庵)後

右、格別之思召ヲ以、其身計登 城之節、水仙之間下

之休息所へ可罷在旨被仰付候段被仰渡、

天明八申四月十九日

(島津久邦)
和泉

二五〇二

一 御役亦ハ地頭職之御礼、御在府ノ節者扣置、御下国之節、御目見被仰付事候処、依御役柄ハ江戸其外交代等ニテ長々御礼不相濟、何歟差支之儀モ有之候ニ付、以来モ御下国之節者有来通、御目見被仰付候、安永五申四月御在府中ハ進上物相納、御礼相濟之筋被仰付旨被仰渡、

安永五申四月

二五〇三

一 御目通ヘ罷出候面々、本ノ下面部又ハ目立候場所ヘ膏葉附居候節、致御届可罷出之、
一 御目通ニテ御目障ニ相成候程之儀ハ是迄御断申上来ノ事候ハ、猶亦其通屹ト可相心得候旨被仰出候、

安永六酉七月九日

二五〇四

一家来之者衆中ヘ被仰付節ハ、主人大御目付以上ヘ御礼申上、且地頭所之者右ニ準候程之結構成儀被仰付節ハ、地頭右同断可有之旨被仰渡、

元文三年十二月

二五〇五

一 寄合並已上之面々、元服・家督繼目其外屹立之御礼事、且又門首之寺院入院・官成等之御礼付テ大御目付以上ヘ祝物、以前之通被仰付候間、玄蕃殿并御家老・若年寄・大御目付ヘ格式之通祝物可遣旨、去ル巳年被仰付置候、右体ノ節、江戸詰ノ御家老・若御年寄・大御目付ヘモ、向後御当地同前、祝物面々宅ヘ可被遣候、
一 屹立之儀ニ付テ御家老・若年寄・大御目付相招、料理振候儀有之節、(通脱カ)不参御家老ヘ此跡祝物遣来候面々ハ可遣シ候、其節江戸詰之御家老ヘハ祝物被遣ニ不及候、右之通被仰出候段申来候、

元文五申二月十九日

二五〇六

一 御一門方病氣在所等之節ハ、月次ヲ始、以使者御祝儀被申上、当番奏者番可謁候、尤、当朝留主居罷出、表坊主ヲ以其段御目付へ申達、御目付ヨリ月番御家老并当番奏者番へ可申達候、

一 大身分ヲ始、月次御礼ニ罷出候無役ノ面々病氣之節ハ、当朝月番若年寄宅へ以使者可相達候、且御城へモ家来差出、表坊主ヲ以当番御目付へ可相届候、

一 大番頭ヨリ御番頭迄之御役々同断之節ハ、都テ同役へ申越、同役ヨリ出仕書之内ニ病氣別勤可相記、御目付ヲ以月番若年寄へ可達候、

一 御側御用人已下御側役迄同断之節、用達書役ヲ以御目付迄可相届候、

一 留主居已下奥・表御役人之儀ハ、御目付迄可相届候、右之通、都テ出仕以前無滞遅可相届旨被仰渡、

天明五巳十一月廿七日

二五〇七(の1)

一 御在国之節、年始・五節句・八朔・月次等之御礼日モ、

御一門方は迄ハ唐子之間へ被通来候得共、向後ハ休息

所へ被在候、御座之間御出座ヲ以、後御小納戸ヨリ奏者番へ可相通、左候ハ、御目付ヨリ其段御達申被通候節、御目付水仙之間へニテ可相披候、奏者番鶴之間へ

相扣罷在、夫ヨリ椿之間迄御案内、象之間口ヨリ御小納戸御案内ニテ小鳥之間へ可被寄候、御礼相済退散之節モ同断、将亦御目付老人浪之間辺へ罷在、詰向可相届候、

相届候、

但、御礼事等ニテ無之、奥向へ間ニ被為召、登城中ノ上等ヨリ被為上候節杯ハ、有来通表御小姓刀取迄

モ可被罷出候、浪ノ間御廊下ヨリ象ノ間迄御供・御目付以先立、夫ヨリ御小納戸御案内ニテ唐子之間へ例ノ通可被通、其節ハタバコ盆、冬ハ火鉢迄モ可出候、

右ノ通被 仰出候条、向々へ可致通達候、

天明五巳十二月

(二五〇七の2)

右ニ張紙ヲ以、午五月廿五日島津矢柄御取次ニテ左ノ通被仰渡候、

一御一門方江御目付申通シ、其廊下ノ部屋ニ無屹シラセ

候節、島津左衛門見合、御一門方跡ヨリ可被通候、御

座ノ間御礼後退出ノ節ハ、波ノ間御廊下通ヨリ檜垣ノ

間ハ掛ケ可被掛⑧候、左衛門儀モ其通可有之候、

一御名代元服ノ節ハ、御一門方象ノ間ハ屏風構休息所被

拵、波ノ間ヨリ直ニ其所ハ被為通候、

但、御在国之節、右体自ラ唐子之間ハ可被為通候、

右之通被仰渡候条、向々ハ可致通達候、

天明六年五月

(島津久金)
伊賀

二五〇八

一無役之一所持以下寄合迄、登城之節山吹之間ハ御役席

之儀モ故、扣席菊之間ハ被仰付候条、虎之間縁類ヨリ

杉之間縁類罷通、菊之間ハ可被相扣候、尤、御礼席ハ

被罷出候節モ杉之間縁類(ママ)ヨリ可被罷⑧通候、此旨可致通

達候、

天明五巳十二月

二五〇九

(二五〇八身行間朱書)
一島津美濃并同格、登城候節台子之間扣所ニ候得共、松

之間ハ可被扣候、

一松之間縁類并竹之間謁事等、右格ニテ都テ敷舞台ニテ

可謁候、

一松之間縁類星合、檜垣之間、

右ハ、此節御儉約シラベ座被相立、御座差支ニ付、右

之通被仰付、

天明八申七月

二五一〇

一御兩殿様御出座被遊候節、日食有之、御定刻ニ相掛候

得ハ、依食遅速、其以後御出座可被遊候間、食之依程

合御刻限ノ儀前日可奉伺候、御沙汰有之候段申来候間

被仰渡、

天明五巳八月十九日

二五一一

一來正月一日、日食ニ付為御祝儀出仕ノ面々、五ツ時早

目登城有之候様被仰渡、

同年巳十二月

天明五巳八月

(島津久起)
近江

二五二

一月次其外諸御礼事等之節、出仕揃遅滞無之様ニトノ儀、

毎ニ申渡モ有之事候処、御目付ヨリ、催促ヲ受、相揃

候筋考違候向モ有之候テハ不可然候、四ツ打候ヘハ直

御届御目付ヨリ申出候筋為被究置事候、夫故芍葉間縁

頬星合ノ席迄モ於御側御用人座被仰付候、右様之儀ト

モ程過候ヘハ不存人モ有之様相成候条、以来無取違、

右刻限前以席々可被揃候、

右可致通達候、

天明八申三月廿一日

(伊勢貞矩)
伊豆

二五三

一大目付以上 御側御用人 御側役 御広敷番頭

奥御医師

右御役之外者於大奥 御目見被仰付候間敷、於江戸

被仰出候段被仰渡、

二五四

一向後江戸御国元共ニ 御座之間脇指帶之候様被仰付旨

申来候段被仰渡、

天明七未正月

(宮之原通直)
主膳

二五五

一是迄惣出仕申候ヘハ寺社家・山伏・琉球人モ罷出来

候ヘ共、向後右之外ハ可相除候、尤、右面々迄モ登

城可及節者、寺社家・山伏・琉球人モ登 城之段、其

節ニ至テ可申渡旨被仰渡、

天明七未八月

二五六

一夏之内、月次御礼罷出之節、足袋相用候儀勝手次第之

筋ニテ候得共、相用候人而已ニテ、間々不用向モ有之、

不並候間、以来都テ相用候様御家老衆御沙汰有之候間、

此段寄々致通達候、

寛政二戊七月

御目付

二五二七

一 檢校其外盲目、向⑨何七ニ付 御目見被仰付候節、御礼席へ御同朋附添罷出、奏者番之儀ハ別段罷出候様被仰付候、
安永四未閏十二月

二五二八

口達覚

一間ノ出仕

右、御在府・御在国共、御用人以下諸御役人四ツ打候ト御目付ヨリ揃付見届、出仕候首尾奏者番へ可申達候、
一年頭 五節句 月次

右、御在国ニテ諸御役人御目見被仰付候節ニモ、四ツ打直ニ御目付ヨリ揃方致、其首尾無遅滞奏者番へ可申達候、

一 右同断、御出座無之折ハ、四ツ打候ト御目付ヨリ揃方見届、御在府・御在国共、御目付ヨリ直ニ月番御家老衆へ首尾可申出候、尤、奏者番并大御目付衆へ前以

申達⑩候シ儀共ハ是迄仕向之通、

右之通、以来相心得居可致首尾候、左⑩候ニテ、四ツ打揃方相濟以後罷出候へハ、其日之御礼被仰付間敷候、其段ハ月次御礼罷出候面々へ御目付ヨリ可致通達旨被仰渡、

天明三卯十月六日

二五一九

一 表・御勝手方支配御役ニテ奥支配勤方被仰付置候人、御祝儀事等之節、於表夫々御役々ノ場ニテ御礼等被仰付来候得共、御目見之儀ハ表へ相廻候ニ付ハ御用モ差支候ニ付、月次・五節句等ハ於奥被仰付、年頭等之重立候御役格ニ相掛⑩候、節ハ自ラ夫々御役格之通可有之候、尤、謁之儀ハ是迄之通被仰付候、
右之通申来候条、可承向へ可申渡候、
寛政六年寅十一月 (伊勢貞矩) 播磨

二五二〇

一 御首途後ハ、月次御礼御請被遊候間敷候、且御用日御

用不被聞召管候[㊤]へとも、急△成儀者間々モ可被聞召

上候間、旁取調可奉伺旨被仰出候、

右之通被仰渡、

寛政八辰八月

(伊勢貞矩
播磨)

二五三三

一御目付江諸御役人月次御祝儀帳差出来候得共、御儉約

中ハ不及其儀、此已前之通星帳老冊調置、時々仕候付[㊤]

可差出、且年頭・五節句其外御祝儀事等之節ハ、諸士

並諸与与力之儀ハ名書ニ不及、人数書ヲ以可申出候、

右[㊤]御祝儀帳之儀ハ、是迄之通被仰付候条申渡、可承

向へモ可申渡候、

寛政八辰二月

(山田有義
伯耆)

一夏之内、月次其外御礼等之節、足袋相用候儀勝手次第
ト被仰渡置、都テ相用候筋仕来候へ共、已来ハ不並ニ
有之候テモ不苦[㊤]候間、弥勝手次第可致旨伯耆殿より
承知△致シ候間、致順達候、已上、

寛政九巳閏七月廿一日

御目付

二五二四

一種子島佐渡

右ハ、月次御礼等之節ハ以来其身老人於御書院御礼申

上候様被仰付置候、依之向後謁之儀ハ於松之間独礼[㊤]同

謁相濟[㊤]引次相謁、登城之節ハ杉之間へ可相扣候、

右之通被仰付候条、此旨可承向へ可申渡候、

寛政七卯八月

(市田教國
勘解由)

二五二二

一御一門方以下寄合並已上、元服・家督継目・養子成等

并初テ之御目見之節、且又御役・地頭職之御礼申上候

面々、已来若殿様へモ中将様御同様、御礼進上物被仰

付候条、此旨申渡、可承向々へモ可申渡候、

寛政八辰正月

(二階堂行誓
河内)

二五二五

一^(二五二四号行間にあり)中将様、此節高輪[㊤]殿江御引移ニ付、諸謁事等左ノ通、

一 諸御役人、月次并年頭・五節句其外御祝儀・御機嫌伺

等申上候ハ、当分之通、上御屋敷ヨリ可申上候、

一 御役・御役替・地頭職等被仰付、其外諸御役人其身之

御礼事、并着出立等付御機嫌伺ハ、高輪御殿江可罷申

上候、

右之通被仰付旨申来、此旨向々へ可申渡候、

寛政八辰五月

伯耆

二五二七

一 与力之儀、御小姓与ニ被入置候へドモ、此節夫々支配

被下、惣出仕御祝儀事之節御小姓与同様御帳ニ相付来

候へドモ、已来ハ夫々支配頭ヨリ被揃御目付へ差出

候様、和泉殿ヨリ被仰渡候間、向々へ申渡候様、市来

次郎左衛門御取次ヲ以被仰渡、

但、謁事等之節ハ是迄有来通御小姓与次ニ罷候様、

是可申渡候、

天明七未七月晦日

二五二六

一 中将様、二九江被成御座候節、諸謁事左之通、

一 諸御役人ハ御本丸ニ而於席可相謁候、

一 御一門方并諸大身分等月次御礼罷出候無役之面々ハ、

御本丸退出ヨリ二丸へ罷上リ、於席々可謁候、

一 御役・御役替・地頭職等、其外諸御役人其身之御礼事、

并着出立等ニ付伺 御機嫌者、二丸へ可罷上候、

右之通可相心得候、於江戸ハ東 御殿へ同断可罷上候

旨、被 仰出候 此旨可承向々へ可致通達候、

天明七未四月

(島津久邦) 豊前

以後屹ト相伺候様、(二階堂行具)主計殿ヨリ伊集院伊膳御取次口達

ヲ以被仰渡候、

右ニ付、勤方不及遠慮旨被仰渡候上ニテモ、御目通

勤方又ハ御礼席ニ罷出之儀、⑦候其節ハ前以可相伺候、此

旨(二階堂行具)部殿被仰候間、致通達候、

天明九酉二月

月番御目付

二五三〇

一御在府中、御家老ヨリ大御目付格迄、五節句并月次御

祝儀有之候儀、只今迄ハ無之候得共、以来於梅之間御

近習役へ相付御祝儀申上候方ニ申談候ハ、(携香)小松帶刀殿

ヨリ通達、

安永五申五月十四日

二五三一

一月次御礼之次第

一御座之間

御一門、島津左衛門、御家老ヨリ大目付迄、

御側御用人御側役
奥向

一御書院

独礼之面々、御番頭以上 以前大目付已上相動候大身

分 以前御番頭以上相動候同 無役ノ同 大目付以上

之嫡子嫡孫無役大身分之嫡子嫡孫 御用人以下寄合並

嫡子 大身分之二男以下諸御役人、

右之通被相定候条、向々ハ可致通達候、

天明六年十二月

(喜入久福)
安房

二五三二

一江戸大御書院并表御書院、毎年正月中御簾掛来候へ共、

正月ハ十五日迄ニテ御礼過被⑧取払、節句日又ハ屹立候節

ハ掛来候分ニテ有来通被 仰付旨被仰付、本ノマ爰元御対面

所御簾之儀モ正月ハ大御院之通相掛候様被仰付候、(書脱之)

天明三卯二月

二五三三

一虎壽丸様、先月一日始御座之間へ被遊御出座、御家老

ヲ始御礼罷出候面々御目見被仰付候、畢而大御書院江

御出座、月次御礼罷出候面々御目見被仰付段御到来候

条、御両殿様・御姫様方・御内証様へ御祝儀、今日^{②月}

御使便ヨリ被申上候様可相達候、
②式日

天明二年寅三月

二五三四

一大身分之面々、御対面所 御出座之節、御刻限前樋之間へ被扣居候様被仰渡、

安永四年未七月

二五三五

一右同断、御礼席へハ諸御役人出口ヨリ被罷出候様被仰渡、

安永四年未七月

二五三六

一初而之御目見之節、月番大御目付席詰中紙進上人数之節ハ相進事候へトモ、以来席相替ニ不及、②最前之席ニ相詰候様被仰出、

天明元丑閏五月

二五三七

一月次御礼又ハ何ソニ付御祝儀事有之、諸御役人 御目

見罷出、引取之節、奏者番出席之頭ヲ通候故、且何ソ

落物等致シ候歟、都テ有来通ニ致相違候儀有之候得者

御断可申出旨、(鎌山久智^②より)左京殿ニテ被仰渡旨、小松仙十郎ヨリ

致承知候間、此旨致通達候、以上、

明和五年^(一、二)丑十一月廿八日 御目付

二五三八

御船手壁書

一足之痛有之、御目通へ罷出、不敬之儀致到来候儀モ

難計、②候ニ付一往月次御礼罷出候儀御免被仰付度願出候処、

申出之通被仰付旨、相良此右衛門御取次ヲ以酉五月十

三日致承知候ニ付、②六御目通外ハ月次御礼等ニ罷出来

候処、拙者心得違ニ付、②七都テ罷出ニ不及旨仲殿ヨリ御

沙汰之由、御目付折田長兵衛ヨリ戊七月廿七日寺尾庄

兵衛致承知候、右ニ付テハ御祝儀事并 御機嫌同等之

儀モ同様之事ト存候テモ、②八為念御目付相良備右衛門へ

今日相尋候処、弥其通之由承届候間、為見合致張紙置

候、

享和二年戊七月晦日

岩下新大夫

二五四一

一御首途後、月次御礼被遊御受間敷、^{⑦候}

末略、

右之通被仰出、

寛政八年辰八月

(伊勢貞矩) 播磨

二五三九

一元服其外諸御礼之節、寄七置候席へ掛御役々之外入交、

出礼之障ニ相成不可然候、依之向後順々御礼相済之人々^{⑧候}

直ニ引退、御礼ニ不相掛面々ハ一切其席へ差通間敷候、

此旨奏者番・御目付屹ト相心得、席ニ猥ニ無之様可致

旨可申渡候、

寛政八年辰三月

(市田教國) 勘ケ由

二五四二

一中将様、二丸へ被成御座ノ節、御役人ノ儀ハ御祝儀事^{⑦候}

等御本丸席ニテ可相謁旨、去ル未年被仰付置候へ共、

猶又此節左之通被仰付候、

一表御役人之儀者 御発薦 御光着之砌者二丸へ罷上、

於席々相謁、御祝儀可申上候、

一奥向御役人之儀ハ年頭・五節句・月次^{⑧其外}御祝儀并暑寒

伺 御機嫌等二丸へ可罷上候、

右之通、向々へ可申渡候、

寛政四年子十月

(市田教國) 勘ケ由

二五四〇

一若殿様、未被遊 御出座御事故、是迄月次御祝儀不申

上候へ共、向後於席ニ相謁^{⑦ト}、御祝儀申上候様被仰付候、

尤、太守様被遊御出座ノ節ハ、御目見済目度被仰付^{⑧間断}

候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

寛政八年辰六月

(二階堂行智) 河内

二五四三

写

一向々ヨリ差上候諸御祝儀帳、同日ニ御祝儀有之候テモ

当分迄銘々別冊ニ被仕立差上來候へ共、殊之外及數拾冊御費候間、御祝儀何ヶ条有之⑨候テモ於向々一帳ツ、ニ相束、蓋紙銘書ヲ以、何々之御祝儀ト認分ヶ差上候様被仰付度御座候、

右之通致吟味申上候処、申出之通被仰付候、此以後御祝儀帳右之心得ニテ可被差出候、此段致通達候、以上、

天明八年申七月十日

御目付

二五四四

一先達テ已來被仰付候御役御礼之儀、御初入部迄ハ御間有之候ニ付、御取分ヲ以、此節納被仰付候、尤、此以後御役被仰付候分ハ都テ御初入部之節御礼可被仰付候、福昌寺々格結構被仰付候御礼之儀モ同断、此節納被仰付候条、此旨可申渡候、

天明七年未八月

(市田教團)
勘ヶ由

二五四五

一御留主中、元服并初而之御目見、別冊之通被仰付置候、右ニ付、御直元服以下初而之御目見被仰付候面々

之内、月次御礼罷出候分ハ其家格之席⑩ニテ人別ニ御目見、其外ハ一統之御目見被仰付旨被定置候、然処御初入部御祝儀ニテ一統家格通ニ御目見被仰付儀ニ候間、此節ハ別段御目見不被仰付、直ニ御初入部之御礼被仰付候条、此旨致通達、可承向々ヘモ可申渡候、

寛政元酉閏六月

(市田教團)
勘ヶ由

二五四六

一月次御祝儀謁之面々及遅刻候間、向後五ツ半時迄ニハ屹ト被罷出、奏者番出席次第順々無構一兩人ツ、ニテモ相謁可被申、此旨奏者番申談、御家老衆ヘモ申出、致通達候様(空白、マ)

天明七未八月十八日

御目付

二五四七

一島津玄蕃(黄巻)殿家来川上六⑪兵衛・町田助兵衛、継メ家督之節一度ツ、御目見被仰付候、依之此節御目見被仰付格ニテ御太刀進上仕、於御書院御礼申上候様被仰

付候、名々次第第六⑨郎兵衛・助兵衛ト被仰付候、尤、

後年至子孫引統家督繼目ノ節、老度ツ、御目見可被

仰付候、御礼席之儀者諸士御礼席ニテ、鬨斗メ・長上

下致着用、無刀ニテ御礼申上候様ト被仰付候段、玄蕃

殿へ申渡候間、於御礼席名唱之儀、島津玄蕃殿家来何

之何某⑦參ト可被唱之、右日限之儀ハ追テ可申渡旨被仰

渡、

元文二年巳四月十五日

二五四八

一 所持・一所持格・寄合・寄合並ノ嫡子、敷舞台末ヨ

リ三枚メ

一 御用人・町奉行・御近習役・寄合并寄合並之嫡子、同

式枚目

一 所持・一所持格・寄合・寄合並之二男三男、右同席

次第不同

一 右引次、御留主居以下諸御役人同席、

一 御家老致対面候節ハ、寄合並ヨリ寄合並已上之二男三

男者笛柱ヨリ後、絵図面押札之通可罷出候、

右之通、此節ヨリ相改、

元文元年辰十二月十九日

(島津久賢) 主殿

二五四九

一 寄合並之面々、御礼事等之節 御目見罷出⑨候之節ハ、御

用人・町奉行・御近習役・寄合並被罷出御礼可申上候、

尤、嫡子計者親同前ニ 御目見⑨可罷出候、二男以下ハ

年頭・諸節句又ハ屹立候御祝儀事ニハ、一所持・一所

持格・寄合ノ二男三男同席次第不同罷出候様、御祝儀

可申上候、不限 御城内於何方モ右次第可相心得候、

元文元年辰十月廿日

主殿

二五五〇

一 養子罷成⑨候者、無扱訊ニ付養子違変御免被仰付、本

家立婦之節、初而之御目見不相濟候者ハ組頭シラヘ之

上 御目見願申出候様、正徳三年巳八月御格被定置候

ハ共、本家并養父方ニテモ一度初而之御目見相濟⑨候之者

ハ、本家ニ立婦候已後又々初而之 御目見願申出ニ不

及候、此外之儀ハ先格相替儀無之候、

元文三年午十月二日

(顯桂久磨) 左京

二五五二

一初而之 御目見奉願^{①候}ノ者之内、極貧故 御目通罷出程之衣類等不致所持候ニ付、進上物迄ヲ相納、御目見仕候格ニ願申出、其通被仰付^{①候}ノ者モ有之^{②候へとも}、一世御目見不仕罷在候儀如何ノ事候条、右体之者ハ、親類又ハ心易者之内ニ衣類致借用相濟候、右者共ヨリ衣類等借^{③候て}、御目見為致候様可仕候、尤、初而之 御目見ニ而モ、繼メ被仰付候節之 御目見ニテモ、一度ハ御目見仕候様、可願出事候有儀候^{④之}ハ、御目見願出候様、組中へ寄々^(竹之)可通達可有之候旨被仰渡、

元文四年未二月

二五五二

一御小姓御役弓進上之者、初テ之 御目見奉願候者之内、弓以上ノ致進上物ノ家筋ノ者ハ於御書院御礼被仰付候、右、御役中紙致進上^{①候}者ハ、進上物相納御礼相濟候筋被仰付候、

一右之通候故、御側廻並表諸御役人家督繼目・養子成等ノ御礼申上候節モ、弓以上ハ於御書院御礼被仰付、中紙進上之者ハ、進上物相納御礼相濟候筋被仰付候旨被仰渡、

寬延四年未九月十九日

朱書

本行、其身依功御側醫師等被仰付、御城下一代士又ハ代々士被仰付候節ハ、其身代右通結構為被仰付事候間、御礼席々^①罷出候様被仰渡、以上、

二五五三

一独礼並与頭・御番頭之面々、病氣等之節出仕御断^{②書}、若御年寄衆御宅へ早朝無延引可申出旨被仰渡、

宝曆二申三月

二五五四(の1)

一諸所^{①移}地頭、無役之地頭、屋久島抑、出水・大口・高岡之地頭代、此間ハ節句日・月次之御礼^{②日}、御目見不罷出候、向後ハ御当地へ居合^{③候}ノ節ハ御目見可仕候、罷

出候次第ハ左之通、

物頭、此間移地頭、^{⑧ナシ}地頭、無役之地頭持、御使番、屋久島抑^{⑧ト}ノ物奉行同列、出水・大口・高岡ノ地頭代ハ諸奉行之並、

右之通可罷出候、以上、

十二月八日

(二五五四の?)

右之通被仰出候間、可得其意旨、大藏殿^{⑨御}差^{⑨御}図ニ而候、以上、

宝曆四年^{⑨歟} 亥十二月九日 伊集院用之助

二五五五

一倉岡在番小野甚五左衛門・水引押木村平右衛門・隈ノ城押尼^{⑩玉}国金左衛門、右三人江可申渡覚、

御下国脇又者年頭、御当地へ差越居候者ハ、月次御礼被遊 御請候節、一度ハ 御目見可被仰付候、罷出候

次第之儀ハ中取代官ノ次ニ可罷出候、尤、右通ノ席ニ

テ 御目見被仰付テモ、此節ヨリ品能被仰付訳ニテモ無之候、^{⑪ナシ}遠ノ方へ罷居候者共故、カコシマへ罷越候節

御目見被仰付迄ノ儀ニ候、品能被仰付候^{⑩ト}心得違不仕候

様可申渡置旨御意ニ候、已上、

宝曆六年^{⑩ト} 丑八月廿九日^{⑩ト} 川上八郎左衛門

当番御用人衆

但、右三人御当地へ参上之由^{⑩候}ニテ其首尾申出候者、

当番ヨリ將監殿へ其段申上候テ、右之趣被仰渡答也、

二五五六

一梶山並綾在番、表御同朋頭罷出答候、

宝永六丑八月廿七日

二五五七

一五節句^{⑩日}御慎之節、出仕被仰付有之帳銘書、御機嫌伺ト御月番ヨリ被仰渡候儀有之、時々御尋申上候事、

一御役人無調法之儀有之、御断申出置候人モ、月次等出仕ニハ不苦之由、

但、御馬方^{⑩高カ}御役之人ニテ相究有之、

一同断、御目通遠慮等之人モ不罷出筋ニテ可有之候由、但、高奉行ニテ相究、

十二月

取次
鎌田源左衛門

二五六〇

安永十丑閏五月

二五五八

写

一月次之御礼ニ罷出候面々、日①永ク候間、来十五日之
出仕ヨリ四ツ半時ニ相揃候様ニト被 仰出候間、奉承
知、無滞様ニ罷出候様可被申渡旨、藏人殿被仰上候、
(伊集院久矩) (マヤ)

正徳四年午四月九日

取次
土岐次右衛門

二五五九

写

一月次御礼申上候席、此中ハ頭之杉戸ヨリ出、間ヲ置罷
出候得共、向後者杉戸ノ立候敷居涯迄参廻管ニ候間、
左様ニ可被相心得候、以上、
右之通、義岡右京殿(久守)ヨリ承候故、此旨申達候、以上、

正徳六年申三月十八日

御目附

平田平六

諸奉行

安永十丑閏五月

一御目見席へ罷出候節ハ、鶴之間ニ枚目罷出、致御礼、

相下候節、壁付御疊相下候事候処、今日罷出候御役人

之内、間ニハ相下等之御疊ヲ罷出候人モ有之、不相苦②

候間、已来間違無之様可致旨、町田式部ヨリ致承知候、

此段致通達候、下、
①以上

丑閏五月十五日

御目付

二五六一

安永五年申二月

一御役又ハ地頭職之御礼、御在府之節者置置、御下

国ノ節 御目見被仰付事候処、依御役柄ハ江戸其外交

代ニ付、長々御礼為相濟候、何歟差支候儀モ有之候ニ

付、已来ハ 御在国之節ハ有来通 御目見被仰付、

御在府中ハ進上物相納御礼相濟候筋被仰付候、此旨可

承面々へ可申渡候、

二月

(新納久藤)
波門

二五六二

一 御役地頭職之御礼

一 初而之 御目見

一家督繼目^{⑨等之}御礼

右、御目見被仰付候節、去ル辰年ヨリ五ヶ年ハ熨斗目・

長上下不着用旨被仰渡置候へ共、以前之通被仰付候、

一元服人支度候儀^{⑨之}ハ有来通候得共、剃髪御家老支度長上

下ニ不及旨被仰渡置候、是又已前之通被仰付、元服人

親御礼支度之儀モ以前之通被仰付候、

一 右、奏者番之儀モ被仰渡置^{⑨候}趣候へ共、熨斗メ・半上

下着用被仰付候、

右ハ為差立御礼事ニ付、已前之通被仰付候、此旨致通

達、御側方・御勝手方へモ可致通達候、

寛延歟 七月

(鎌田政昌)
典膳

二五六三

一 御勝手方支配奉行・頭人、節句日・月次御礼日又ハ何

ソ付御祝儀事等之節、惣体罷出候テモ御座差支候ニ付、

当番老人相残り、出仕書ニハ跡詰迄相記差出候様被仰

渡、

安永二年巳四月

(川田國福)
伊織

委曲諸御役場ノ場ニ有之、可見合、

二五六四(の1)

一 私事、来年頭持参太刀仕筈御座候処、痛所有之罷出体

無御座候^{⑨間}、名代ヲ以納太刀被仰付被下度奉願候、此

旨被仰上可被下候儀奉願候、以上、

午十二月廿九日

三原善兵衛

(二五六四の2)

御付紙

願之通被仰付候、

十二月

相馬

右ハ、地頭職ニ付年頭之御礼、病氣ニ付難罷出節、

御在国年ニ者如此、御留主年ハ不及願候事、

二五六五

文化十一年戊

一 御隠居様^(兼直) 大御前様白銀御屋敷へ御引移之上者、左ノ

通被仰付候、

一年頭・節句日其外御祝儀・伺御機嫌、又ハ何卒ニ付御

礼申上候儀、且又御付人数着出立届振等之儀ハ、何篇

大御隠居様御方御同様之仕向、且 大御隠居様へ是迄

御広敷罷通御祝儀申上來候向々へ、右ニ相準申上候様

被仰付候、 末略ス、

戊六月

(川上久秀)
右近

調振之次第

二五六六

一年頭・五節句・八朔并惣出仕・月次御礼、且間之御祝

儀等之節、調振左ノ通、

一御番頭已上御役順ニ列座、御家老列席、奏者番、合、

月番ヨリ挨拶、御家老退座、無役寄合嫡子以上登城有

之候ハ、右一列之内夫々ヨリ、席へ可罷出候、

一御用人以下表御役人、御役順ニ列座、奏者番兩人出席

ノ上、上席ヨリ何々ト申述之節、奏者番退座、無役ノ

寄合並・同嫡子並一所持以下寄合並已上之二男三男登

城有之候ハ、夫々席へ可被罷出候、

右之通、向々へ可致通達候旨被仰渡、

天明五巳十一月

二五六七

一年頭・諸節句・月次其外何卒ニ付御家老謁ノ節ハ、月

番御家老上席ニテ罷在候様被仰付候、

天明五巳十一月

(島津久金)
伊賀

二五六八

一月次謁等ノ次第、御一門方鶴之間、其外水仙ノ間・梅

之間・敷舞台等、夫々御役等付テノ謁又ハ御目見ニ付

進上物、御内証元服ヲ始小番ノ御太刀進上、家督継目

等之御礼進上物之次第、奥向近習通御役人御役替・帰

着・出立等ニ付於梅ノ間御家老謁、暑寒・雪・雷鳴等

其外伺 御機嫌之儀、奏者番へ謁候節ノ次第、又ハ御

一門上ノ休息所へ被扣候儀、下之休息所へ島津左衛門、

台子ノ間へハ島津筑後、出雲罷在候様、夫々登 城

ノ節扣所等被仰渡、

天明五巳十一月

二五六九

一南泉院・福昌寺・大乘院・淨光明寺・大勝寺

右、暑寒中一度ツ、登城、於敷舞台謁御家老、可

奉伺御機嫌候、

天明五巳十一月

(行間朱書)
一南泉院・福昌寺ハ老人ツ、罷出謁、大乘院・淨光明

寺ハ三人ツ、一列ニ罷出可謁候、

二五七〇

一御参府中、御家老・若御年寄・大御目付・同格、五節

句并月次御祝儀申上候儀、只今迄ハ無之候へ共、以来

於梅之間御近習役へ相附御祝儀申上候方ニ申談候間、

其通可相心得候旨被仰渡、

安永五申五月十四日

二五七一

一奥向御近習通御役々、御役替・御役入・出立等之節伺

御機嫌等、是迄^①御家老座ニテ御家老謁来候へトモ、

^②向後於梅之間可謁候、

但、取合御側御用人、

一御番頭以上同断之節、敷舞台月次御礼席ニテ可謁候、

一表諸御用人同断之節、敷舞台月次御礼席ニテ可謁候、

但、御用人取合、

右之通被相定候、

但、直触以上之御家老可致挨拶候、

右之通被仰渡候、

天明巳十一月

(島津久金)
伊賀

二五七二

一年頭・五節句・八朔並惣出仕之節、御目付寄ニテ奏者

番取合、可謁御家老候、可達 貴聞旨、月番御家老ヨ

リ挨拶是迄之通、

一月次出仕之節ハ、御番頭以上並無役之寄合嫡子以上、

敷舞台当分之席ニテ可謁御家老、御目付寄セ奏者番取

合前条之通、

一 御用人以下表諸御役人並寄合並・同嫡子、一所持以下寄合並以上之二男三男、敷舞台当分ノ席、御目付引進ニテ奏者番ニ可謁候、其節取合無之謁ノ面々ヨリ、上席ヨリ⑨何々申述之、奏者番退座有之可致退去候、尤、奏者番ヨリ挨拶ニ不及候、準之候謁事ハ都テ右之通可有之候、

右之通、以来謁事被相定、

天明五巳十一月

二五七三

一月次ヲ始、奏者番謁候分ハ、其段若年寄へ書付ヲ以可申達候、

一 奏者番・御目付共ニ使者謁ノ分ハ、都テ御使番へ相達、御使番ヨリ日挙ニテ可申出候、

一 島津美濃・島津図書等ヲ初、月次御礼罷出候分ハ、表向屹立候拝領等之御礼ハ奏者番ニ可謁候、此等之不時御礼ハ都テ当番之奏者番老人可相謁候、将又何ソニ付、以上使拝領等之節ハ、登城ニテ御礼可申上候間、其

心得ニテ罷在候様、当番・奏者番へ御家老ヨリ可相達置候、

但、当番・奏者番モ七ツ時相成候ハ、退出可致候、

右御礼登城ノ面々七ツ時過候ハ、不及登城、為御礼可致廻勤候、

一 登城之上ニテ拝領物等之節ハ、当人ヨリ御目付ニ引合、奏者番へ申通、其席⑨々々ニテ可相謁候、大目付已上奥向御近習通ノ儀モ有来通可相心得候、

一 右式不時御礼ノ儀ハ、奏者番謁ノ分ハ奏者番ヨリ口達ニテ御側役へ可申達候、

右之通被仰渡候、

天明五巳十一月

(島津人金) 伊賀

二五七四

一月次謁等之次第、御一門方鶴之間、其外水仙之間・梅之間・敷舞台等、夫々御役等付テノ謁又ハ御目見ニ付進上物、御内証元服ヲ始小番之御太刀進上、家督繼目等之御礼進上物之次第、奥向御近習通御役人御役替・帰着・出立ニ付於梅之間御家老謁、暑寒・雪・雷鳴等

其外伺 御機嫌ノ儀者奏者番之謁ノ節之次第、又者御

元文元年辰三月十九日

(島津久良) 主殿

一門方上之休息所へ被扣候儀、下之休息所へ島津左衛

門、台子之間へ島津筑後・島津出雲罷在候様、夫々

二五七六

登 城之節扣所等被仰渡、

安永九子

天明五巳十一月

(二五六八号文書に同じ)

一御城 御対面所廻リヨリ虎ノ間並大番小番詰所・御番

頭詰所迄御修補被仰付、近々取付ノ旨、御普請奉行申

出候付、御役座等直シ方ノ儀御目付ヨリ吟味申出候事、

二五七五

子二月

御礼席之部ニ入筈、誤テ此場ニ入、

右ニ付、諸座仮詰所ハ御殿廻ノ場ニ記ス候、

元文元年辰

御礼席左ノ通、

一 一所持格・寄合・寄合之嫡子、敷舞台末ヨリ三枚目、

一月次御礼并諸御祝儀事等ニ付、当分之敷舞台へ相準候、

一 御用人・町奉行・御近習役・寄合並・寄合並之嫡子、

御礼之儀ハ御書院二ノ間并敷込、椿之間并鶴之間迄相

⑨同
式枚メ、

掛リ出席、尤、敷舞台ニテ被仰渡御用之儀ハ台子之間、

一 一所持・一所持格・寄合・寄合並之二男三男、右同席

一大身分月次御礼并諸御祝儀事等之節ハ台子之間、

次第不同、

二五七七

一 右引次、御留主居以下諸御役人同席、

一 節句日又者何ソニ付惣出仕ニテ御祝儀申上候節左ノ通、

一 御家老致対面之節ハ、寄合並ヨリ寄合並以上之二男三

一 組中之諸士、上下与頭兩所之於宅御帳相付可致退出之、

男者笛柱ヨリ後、絵図面押札之通可被出候、

但、謁御家老御祝儀申上候節ハ御目付可相詰候、御

右之通、此節被相改ノ旨被仰渡、

帳相付致退出之、御祝儀事之節ハ小組頭可相詰候、

一 諸寺院着座有之候面々者、寺社奉行所於門首座寺社奉行対面、御祝儀可被申上候、其外御当地②之ハ寺社家ハ有

来通寺社奉行於宅御祝儀可被申上候、

一 在番之琉球①人、御勝手方御家老於宅御用人へ相付御祝儀可申上候、

一 諸外城噯・与頭、当年之通於鷲之間御帳相付御祝儀可申上候、

安永九年子三月一日

御酒其外頂戴并進上之事

二五七八

一 被召上候御土器ニテ段々幾人モ御流頂戴仕候儀ハ、御盃之御流、

一 被召上候御土器之御酒ヲ御提子ニ相移、土器ハ不被召上、土器ニテ御流被下候儀ハ、御流ト可相心得候旨、

正徳元年九月仰渡、(被脱之)

右向様唱分候様ニト被 仰出候ニ付、被下様之儀御家老中被仰談候、以上、

二五七九

一 御盃之御流者、初ニ被下候人ニ御盃之儀ニ候故、御盃頂戴之通ニ可仕候、二番目ヨリハ御土器ヲ戴②ノ迄ニテ、ロニ付①申ニ不及、末々迄頂戴可仕候、

一 御流ハ被召上候御酒之御流ニ候へハ、最前ニ土器ヲ頂

ニ不及候、尤、ロニモ付不申、御酒ヲ受候テヨリ頂申被下可申①候、

右之通、主殿②殿ヨリ大目付要人殿(マダ)ヨリ御達有之事、

二五八〇

一 御盃事

右ハ、是迄御次第書ニ御取替ト認来候得共、向後右之通唱、書付等ニモ相認候様被仰付段、申来候段被仰渡、

天明寅十一月廿九日 (二年カ) 主計 (増奉行且)

二五八一

一年頭又ハ何ソニ付諸御役人并諸士へ御酒被下候節、御看被下候へ共、以来御酒計被下、且是迄諸御役人・諸士江御酒被下候節、塗杯等ニテ被下候、共、以来土器ニテ被下候旨、被 仰出候段被仰渡、
天明五巳正月

二五八二

一 重豪公御家督初就御下国、御膳進上并御料理被下候儀
左之通、

一 来月四日、御一門ヨリ納殿役人迄^(一カ)二汁三菜、御普請奉行以下諸御役人一汁二菜之御料理可被下候、

一 御能可被仰付候、

一 同六日、諸士へ一汁二菜ノ御料理被下候、

一 九日、諸士ヨリ二汁三菜ノ御膳進上被仰付候、

一 御能可備御覽候、

一 同十三日、御当地へ罷在 御目見被仰付候寺院并山伏、

於護摩所一汁三菜之御料理可被下旨被仰渡、

宝曆十一巳十月廿五日

二五八三

一 御鑑御祝ニ付、近年餅之汁迄被下候へ共、当年ヨリ左ノ通、

一 餅之汁、向^⑧ニ^⑨テ^⑩突

一 御酒

一 魚之吸物・御酒

右之通、御家老座・大御目付座・御用人座ニテ御祝頂戴ノ人数へ被下候、

一 餅之御汁、御ユテ突

一 御酒一篇

右、驚之間ニテ御祝頂戴之人数へ被下旨被仰渡、

宝曆十二年正月七日

二五八四

一 御初入部ニ付御料理被下候節、又ハ何ソニ付吃御料理被下候節、左ノ通、

一 江戸中ノ間 御国許椿之間

御一門方、給仕表御小姓

一 江戸中之間 御国元椿之間

島津左衛門、右同

天明七未正月

一 江戸角之間 御元水仙之間

美濃・図書・筑後、給仕御小姓与

一 奥

御家老・若年寄・大目付

一 芍薬之間

一所持以下寄合並以上、給仕御小姓与

一 奥

御側御用人以下奥向并御近習通ノ面々

一 梅ノ間

直触已上之表御役人、給仕御小姓与

一 芍薬之間縁類

直触以下表諸御役人・御一門方附之諸御役人格、給仕

同

一 敷舞台

小番・新番・御小姓与・書役・小役人、^(給)宮仕同

一 山吹之間縁類

諸与力、^(給)宮仕部屋栖

右之通、以来被相定候条被仰出之段^(候)被仰渡、

二五八五

一 正月十一日御鎧餅之汁頂戴之席、以来左之通被仰付候、

一 梅之間

大目付以上

一 芍薬之間縁類

大番頭ヨリ諸衆迄

一 竹之間

御側御用人ヨリ御右筆頭迄

右外、御役人之儀当分之通、雉子之間詰合之諸士ハ於

驚之間頂戴被仰付候、

一 溜之間

大目付已上

一 同次之間

大番頭ヨリ御番頭迄

一 伺公之間上

御側御用人ヨリ御右筆迄

一 同次之間

諸御役人

一大溜之間

御殿詰合之諸士

右之通、於江戸頂戴被仰付候、

右之通申来候旨被仰渡、

天明六年十二月六日

(喜入久備)
安房

二五八六

一正月十一日御鎧御祝ニ付、餅之汁於大目付座大目付・

御番頭以上へ被下来候得共、格別之御役席候間、已来

左之通被仰付候、

一於大目付座大目付へ餅之汁被下^{②候}、宮仕表坊主、

一於大御番頭座大番頭ヨリ詰衆迄同断被下候、

右之通被仰渡候、

天明六年正月

二五八七

一寛延四未九月、琉球小録王子ヨリ於御書院二汁六菜御

膳進上有之、右ニ付、寺社奉行ヨリ御側御用人・御近

習役・御納戸奉行迄於御用人座二汁三菜、御小納戸ヨ

リ御側医師迄ハ御使番座ニテ一汁三菜、親雲上以下之

琉人虎之間ニテ一汁三菜、御城内へ相詰難迦諸役人・

筆者・小役人雉子之間ニテ一汁三菜、一身^(者之)ハ其外手伝・

宮仕等触役所ニテ一汁二菜、御物^{②御取}替^②被下候事、

寛延四未九月

二五八八

一琉球人、親方以上ハ三位以上之位階ニテ之故、御料理

被下之節、三方ニテ被下候筈ニ被仰渡、

正徳四年八月二日

二五八九

一今度初テ御下国ニ付、御膳進上並御料理被下候儀、左

之通被仰付候、

一寛延四未九月廿三日、御一門ヨリ納殿役人迄一汁三菜、

御普請奉行以下へ一汁二菜御料理被下候、

一御能可被仰付候、

一同廿五日、諸士へ一汁二菜御料理被下候、

一同廿七日、諸士ヨリ二汁三菜之御膳進上被仰付候、

一御能可備 御覽候、

一同廿九日、御当地へ罷在御目見被仰付候寺院・山伏、

於護摩所一汁三菜之御料理可被下候、

右之通被仰渡候、

子共

一中之口

御城代 御家老 若年寄 大御目付

一内玄喚

御用人 諸役人

右之通被相定候旨被仰渡、

辰十二月廿四日 正徳②殿

登殿入口之次第

二五九〇

正徳二年辰十二月廿四日

一虎之間入口

島津兵庫殿 島津周防殿 大乘院 福昌寺 一乘院

淨光明寺 南泉院

一大番所前ヨリ南之方入口

島津内匠 末之御子方 島津左衛門 島津又八郎 島

津筑後 南泉院々代 諸寺院 山伏

一小番所前入口

御番頭 与頭同列 右之子共 小番人 大番人 右之

二五九一

一福ヶ迫諏訪神主井上左膳 花尾神主井上右内

右ハ、先達テ神主職叙爵之家ニ被仰付、此節京都吉田

家ヨリ神主号裁許有之候ニ付、以来年頭其外屹致登

城之節ハ、諏訪神主本田彈正同様、虎之間東脇雁木ヨ

リ罷上リ、虎之間へ相扣、門首席ニテ御礼可申上候、

進上物之儀モ同様被仰付旨被仰渡候、

寛政元西六月

(島津久連)
登

二五九二

(二五九三号行間朱書)
一御勝手方之儀、是迄直触以下御役人之内并吟味役・書

役等御用ニ付罷出候節、本間ヨリ無差別罷出来候得共、

表方御家老座へ縁之間ヨリ罷出来候御役々并吟味役・

書役等表方同前、縁ノ間ヨリ罷出候筋ニ、此節表方ニ^⑧ハ

モ申談相改候条、以来其通相心得候様向々へ可申渡旨、

^(名膳廳)右膳殿ヨリ被仰渡、

寛政四子八月廿一日

二五九三

一書役・小役人其外諸士、御内玄喚ヨリ致出入来候処、

無僕之人ハキモノ等ミタリニフミチラシ置、且又四ツ

ハツ共ニ御玄喚先込合之儀^⑧候、已来書役・小

役人等無僕ノ人ハ御内玄喚脇触役詰所前末ノ口二ノ間

掛リノ間ヨリ出入仕、ハキモノミタリニフミチラサス、

勿論供召列候節ハ御内玄喚ヨリ勝手次第出入被仰付候

旨、奉行・頭人ヨリ可申渡置候旨、伊賀殿ヨリ御沙汰

之段被仰渡、
天明六年五月

二五九四

天明七未

一御家老平日出勤之節、立番ヨリ高声ニ何某様御上リト

呼、玄喚ヨリ先立之直坊主呼、^(表坊主カ)頭御座迄通り候様可仕

候、尤、玄喚迄書役老兩人出迎、跡へ相付可参候、退

出候節モ同断、若年寄之儀モ同様相心得、大目付之儀

ハ右体右振合ニ可準候、

右之通、江戸御国元共被相定候旨申来候条、可承向々

へ可申渡候、

天明七未正月

^(宮之原通直)主膳

二五九五

落穂集

一昔者、寄合以上出仕候節、虎之間正面之雁木ヨリ大小

乍指被為入候処ニ、正面之雁木ヨリハ御一門ト唱候御

方計御上リニテ、大身分又ハ独礼ノ面々ハ虎之間末^⑧東

ノ雁木ヨリ出仕、其外ハ御番頭座前ヨリ被為入事ニ被

仰渡、今以其通、

年頭五節句其外御城内御飾

二五九六

一年頭・五節句・月次並琉人登 城、其外屹立候御祝儀
事等之節、御本門内唐御門下御飾等、且虎之間詰被仰
渡、

安永七戌十二月廿八日

二五九七

一年始・五節句・八朔、唐御門ヨリ虎之間高欄涯迄別紙
繪図面之通、稻卷敷付可申候、

一虎之間高欄階ヨリ登 城之面々、稻卷之上者草履相改
可申候、

但、格別雨天ニテ候ハ、稻卷可取除候、尤、稻卷上
裏付草履迄者相用可申候、且供之儀ニ付、侍之分者
草履ヲ抜候得者稻卷之上ヲ致供罷通可申候、土足ニ
テ候ハ、稻卷脇可罷通候、中間・小者体之者ハ一切
不罷成候、其外往来ノ者其土足ニテ踏通間敷候、
一年頭其外御飾道具等出ノ節、其組之同心ハ稻卷敷付出

張居候得共、以来者縁取^{②敷付}可申候、
右之通被仰付候段被仰渡、

天明五巳十一月

二五九八

一公義ヨリ罷立候御役柄之人何ソニ付被差越、又者琉球
太子杯登 城者、至テ稀成事ニテ為屹立事候間、左様
成節者、以来唐御門涯ヨリ虎之間高欄口迄稻卷敷付、
其外年頭・五節句日等者是迄之通相心得候様被仰渡、

安永八亥七月

二五九九

一虎之間御役々、小番・大番・横目等モ別紙繪図面之通
被仰付之、左候テ、詰之儀者年始・五節句・月次并右
体之不時御礼事・琉球人登 城・他国使者等之節モ相
詰候様、可承面々江可申渡候、

天明五巳十一月

二六〇〇(の1)

一年頭・五節句・月次並琉人登城、其外屹立候御祝儀事之節、御本門内唐御門下御飾等、且虎之間詰之次第、別紙絵図面三通之通被仰付候、

但、月次且間ニ琉人登城之節者都テ支度平服、

一虎之間詰与頭・番頭之内相詰候人、御一門方登城之節者致会釈候様被仰付候、左候テ、御目附・小番・大番・横目、何レモ絵図面詰人数、不残席々ニテ致会釈候様被仰付候、

一御一門方ヨリハ、与頭・御番頭江者是迄御仕来之通御会釈振可有之候、御目附へハ御役柄ニモ候間、是迄御仕来モ可有之候へ共、御役ニ応、御会釈可有之候、小番・大番・横目江者是又御仕来モ可有之候へ共、御目付ヨリハ軽目御会釈可有之候、

一大身分寸モ絵図面詰人数不及会釈候、尤、大身分ヨリ虎之間詰人数へ曾テ会釈無之様可被相心得之、自然会釈有之候テモ詰人数会釈ヲ受候ニ不及候旨被仰付候間、大身分右之通被相心得候様申達置候様被仰付候、大身分以下者、猶又会釈之沙汰ニ不及候、

一物頭張番所・御兵具所付士上下、足輕羽織袴、其外之儀者是迄之通被仰付候、

一年頭・五節句、重立之御祝儀事、且屹立之節、御門番上下着用、御飾等ニ相付候足輕又者立番御進物才領等羽織袴、

一小番・大番、平日有来候詰所前、大身分其外逆モ通路有之候節者、定テ是迄互ニ会釈為有之筈候間、此儀者勝手次第可有之候、虎之間之儀ハ急度押出シ詰之事、固メ之趣候間、前文之通被仰付候、毎日相詰ノ席トハ訳モ相替候、常式詰所ニテハ会釈互之礼儀ニテ候間、勝手次第被仰付候、

以下略、

右之通被仰付候条、来年頭ヨリ絵図面之通御飾等有之候様、向々へ可申渡候、

安永七戌十二月廿八日

(二六〇〇の2)

本文以来月次之儀者、御飾並物頭張番且与頭其外虎之間詰ニ不及候、

安永八亥四月

二六〇一

一何^①ニ付月次御礼罷出候面々迄御祝儀等申上候節者、唐御門内外御飾・虎之間詰ニ不及候、屹^②立之御祝儀事等之節者、御飾之儀先達テ申渡置^③ノ通可相心得候、

安永八亥六月

二六〇二

一平日物頭へ張番被仰付置候得共、此節御儉約ニ付テ無用被仰付候間、平日者鎖置候様可申渡候、左候テ、年頭・節句且又他国御使者・琉人登城ノ節者、有来通張番被仰付旨被仰渡、

享保十二年八月廿九日

御殿廻御床飾

二六〇三

文化五年辰十一月御儉約ニ付

一高輪御殿 御書院

右、年頭其外立松・寿老人相飾来候へ共、此節ヨリ都テ御取止被仰出^④ニ、左候テ、年頭計者御掛物絵様中央、香台又者置物見合相飾之候事、

但、松之内七日迄、

一御書院

一御客間

右ニケ所、平日御床飾ニ不及候事、

一御見舞掛之御客様等有之節迄モ平日之通、

一被仰入候テ、依御向柄重立候御客様又者格別之御祝事等之節ハ、其節之趣ニ応シ、御書院御床飾可有之候、又者依事御客間迄モ御飾之事、

一鐘馗之絵、是迄正月十四日ヨリ同廿九日迄掛来候得共、其儀ニ不及、已来者外人物之絵同様ニ可相掛事、一御休息所並大奥向御床之儀者は迄御仕来之通、

但、御立松之儀者御引取、

一芝御殿 御書院

右、年頭其外立松・寿老人^⑤相飾来候へ共、此節ヨリ都テ御取止被仰出候、左候テ、年頭計御掛物目出度絵様中央、香台又者置物等見合相飾之候事、左候テ、此

掛物寿老人之幅ニ中央其外御用候テモ宜敷候、又者三幅二幅對ニテモ右同断之置物ニテ宜候、

但、松之内七日迄、平日者不及候、

一御座之間

右同断、

但書同断、

一平日、外々御床向御飾ニ不及事候、

一御見舞掛之御客様等有之節^①迎モ平日之通、

但、表向御見舞掛候^②テモ実ハ被仰入候テ之御客様之

節ハ、御書院平日之通ニテ御座之間ヨリ御内証向御

床飾可有之事、

一御向柄又者被仰入格別屹立候御客様有之節者、御書院

並御座之間御床飾可有之事、

但、格別之御祝事等之節者御書院御座之間ニ不限、

其節之御座柄ニ応シ、見計可有之事、

一近日御縁与之御使者有之節者、彼御方御家老着座之御

座江者、格段之御祝事故、其座ニハ御掛物御床飾等可

有之、勿論活花ニテモ置物ニテモ吟味次第可相飾候、

但、彼御方御使者、御家老並御留守居等之人御使者

ニテ候ハ、二座ニ可相掛候、左候ハ二座共同断之御飾ニテ宜候、尤、已来共右様之節者右ニ可準備、

一御休息所御内証向其外大奥御床之儀ハ是迄ノ御仕来通、

但、御立松之儀者御引取、

一上使並御招請等之節ハ是迄之通、

一御国元 御対面所 御書院 御座之間

右三ヶ所、芝御殿御書院・御座之間御飾之通候事、

一右外、御床毎ニ年頭其外御床飾ニ不及候、平日者猶以

同断之事、

一例年之 御参府又者 御着城之節、御床飾年頭之御振

合、

一御初入部其外何ソ屹ト立候節ハ、御座々是迄之振合ヲ

以可相飾候、

一御休息所大奥之儀ハ江戸表同断、

一琉球人登 城之節モ通例之登 城ニテ候ハ、御床飾^③

不及候、若又王子渡来ニテ登 城之節者格段之事故、

是迄之振合ヲ以見合可相飾事候、

一他国使者等有之、 御直答之節者被遊御逢候、御座並

使者扣所へ御床飾可有之事、其外者不及候、是以 御

直答無之御使者ニテ候ハ、御飾ニ不及候、

二六〇六

一立花・活花之儀者被仰合、格段之御客様有之節ハ時々

一御下屋敷角辻番所 御厩角辻番所

吟味次第、是迄之振合ヲ以見合可相飾事、

右兩所、向後高役番所ト唱可申旨被仰渡、

右者、此節格別之御取縮ニ付、已来右之通被仰付候条、

享保十巳十月廿三日

於江戸申渡有之候段申来候条、此旨可承向々へ可申渡

候、

二六〇七

辰十一月

(島津久泰)
将監

一御里御門ト此内唱候ヲ、御花園御門ト唱候様被仰渡、

宝永七未^(マ)四月七日

御城内御殿内

二六〇八

二六〇四

一御式台脇、此跡中之間口ト唱来候場所、御末口、
一表御書院、此跡三間有之、此節ハ間敷相重、上之間、

一孝行之間後之縁類ヲ御台子ノ間ト唱候様被仰渡、

二之間・三之間・末之間、

正徳二辰八月五日

一台子之間上座、秦吉了^{オウゴン}之間、此跡新座ト唱来候座、

但、秦吉了之絵様額掛ル、

二六〇五

(行間朱書)
一秦吉了之間之事、台子之間、

一御本丸溜之間之儀、驚之間ト被相改候、

右之通、唱被相替候旨被仰渡、

享保十巳二月十七日

天明五巳正月^{⑨九日}

但、鳩之間、絵様額掛ル、

(行間朱書)
一鳩之間之事、伺公之間、

右之通、唱被相替候旨被仰渡、

天明五巳二月

一御家老座ヨリ御取付之間へ通候角、鳶之間、

但、鳶之絵様額掛ル、

一諸人通融之御玄喚、中ノ口、同上之間ハ溜之間、

一内御玄喚上之座ヲ内御玄喚上之間ト相唱、下之座ヲ御

纏掛之間、

一此跡鶴之間ト唱候御座、蘭之間、

右之通、御座唱被 仰出候、

宝曆十二年十月廿五日

二六〇九

一芝御屋敷御広庭之儀、向後外御庭ト相唱、爰元御広庭

モ其通可相唱候旨被仰渡、

明和元申七月廿八日

二六一〇

一表御書院本四之間所、表御書院三之間

一当分御取付之間、溜之間

一御取付之間、脇新御座御取付之間

一当分溜之間、大溜

右、此節江戸御座御栖居敷又ハ新御座出来ニ付、右之

通相唱候様被仰渡、

安永十五十月

二六一一

一此節新御作事御殿之事、東御殿

一東御門之事、御広敷御門

一南御門之事、銅御門

一東御切手御門之事、東御門

右之通、相唱候様被 仰出候段申来候旨被仰渡、

天明二寅十二月

(島津久應)
仲

二六一二

一大奥

虎壽丸様御休息所之儀、以来御中奥ト相唱候様被仰渡、

天明三卯九月

二六一三

一表境鳴子口之事、奥口

一御草履取部屋口之事、御近習口

右之通被相替候旨被仰渡、

天明三卯十月廿日

二六一四

(二六一三号行間朱書)

一兩御殿口御鈴之口之事、奥口ト被唱候様被仰渡、

天明六年正月

二六一五

(二六一三号行間朱書)

一奥口之事、鳴子之口ト相唱候様被仰渡、

天明六年六月九日

二六一六

一公辺へ、御嫡子様又ハ、御隠居様御居宅ト被仰出置候

御屋地之所、以來御内輪ニテハ二之丸ト相唱候様被仰

付候、

(雜書別室、於嘉久)

一妙心院様御存生内被成御座候地面ヲ山下御屋敷ト申來

候得共、山下之名目被相除、右地面ハ二ノ丸一囲ニ被

仰付候、左候而、当分山下御鷹部屋被建年辺迄ヲ山下

ト相唱候様被仰付候、

一二丸御門ノ事、矢來御門

一南口御門之事、御台所御門

一御下屋敷御門之事、二丸御門

一右同裏御門之事、南御門

一御勘定所門ノ事、御役所御門

一随神門脇御中門之事、花園御門

右之通、相唱候様被仰付候、尤、公辺御書出等有之節

ハ前之絵図面之通被仰付旨被仰出候、

天明五巳二月十六日

二六一七

(二六一六号行間朱書)

一御台所後へ於嘉久様御家作被仰渡、山下御用屋敷ト相

唱候様被仰渡置候処、御作事成就、延享四卯四月二日

御移徙候事、

二六一八

一御本殿之事、御内輪ニテハ一御殿ト以来相唱候様被仰出候段被仰渡、

天明四辰十一月三日

(島津久健)
仲

^{①(方)}方之字相用可申、其外諸向右ニ準旨被仰渡、
^(可脱カ)

天明五巳八月十九日

二六二二

一内玄喚之事、御内玄喚ト唱被相替、右同日、

二六一九

一御書院ノ御勝手之方ノ間、此節御出来御小座敷之事、

中ノ間、

右之通、相唱候様被仰出候、

天明五巳四月

二六二三

一樋之間之事、竹之間ト被相改、

天明六年四月

二六二四

一御家老与所之事、大身分触役所

一六組所之事、六組触役所

下略、

右之通被相改候旨被仰渡、

天明六年七月廿五日

二六二一

一御納戸・御兵具所・御記録所・御厩

右御役所札、御之字相除候様、去申年申渡有之候得共、

向後右之通可相改候、^{②(其様)}御役所ハ御納戸方・御兵具所

二六二五

一御茶道部屋ノ儀、二間有之所ハ上之間ハ御台子、次之

間ハ御茶道部屋ト相唱可申候、尤、何方ニ②モ一問之所者自御台子ニテ候、

天明六年閏十月

但、二間ニテモ次之間御茶道部屋ト難相唱場所モ可有之、左様之所者可応其向事、

二六二六

一御位牌殿後御用御門之事、②御長屋御門

右、此節ヨリ諸人通融被仰付、右之通唱被相替候段申来候旨被仰渡、

寛政三亥四月

(伊勢貞矩) 播磨

二六二七

一花鳥御門之事、西口御門

右之通、唱被相替、

寛政四子十一月十八日

二六二八

一江戸御路地口之事、御庭御中門

一江戸御国元御路地見廻詰所之事、御庭方下略、

右之通、唱被相替、

明和八卯三月十五日

二六二九

一上之間十五帖・二之間十五帖數ノ御座

御書院

一右次十四帖之御座

御小書院

一右之次十帖數ノ御座

御勝手之間

一右次六帖數ノ御座

表御客間

一右次十五帖數ノ御座

御客間溜

一右向七帖半之御座

御鈴ノ間

一御使者間向上之間十帖・二ノ間十帖數之御座

御取付之間

右之通、東御殿御座廻可相唱候旨被仰渡、

天明三卯正月

二六三〇(の1)

文化三年寅

一上御屋敷

御殿廻リ御出来ニ付、御座向別紙之通、御移徒当日ヨ

リ諸事御先規之通可相心得旨、申渡有之候段申来候、

此旨向々へ可致通達候、

寅十二月

(島津久泰)
将監

(二六三〇(の2))

別紙

一御式台御使者ノ間上下

右、此已前之通、御使者ノ間上下通、

一御内玄喚御使者之間

右、此已前之御玄喚御使者之間通、

一表御書院

右、此以前之通、御書院通り、

一中之間

右、此已前ノ御書院之間之通、

一御勝手之間

右、此已前之御勝手之間之通、

一御取付ノ間上

右、此已前之御取付之間并溜之間上之通、

一同二之間

右、此已前ノ溜之間二之間之通、

一同三之間

右、此已前之伺公之間之通、

一台子之間之末

右、此已前之台子之間之通、

一奥御客之間

右、此以前之奥御客間之通、

一大御書院

右、追テ御出来迄之間者 御出座其外御客様等、都テ

御書院ニテ兼帯之事ニ候、

以上、

安永九子

一 御城御対面所廻リヨリ虎之間并大番小番詰所・御番頭

詰所迄御修補被仰付、近々取付ノ旨御普請奉行申出候

間、御役座等直シ^{⑨方}之儀、御目付ヨリ吟味申出候事、

子二月

右ニ付、

一 御番頭詰所ハ芍薬之間縁類、

一 小番大番詰所者雉子之間へ屏風構、

一 御一門并大御目付以上大身分、御上リ・御退出之節ハ、

中之ロヨリ御使番役所茶之場所間廊下通り、桃之間ヨ

リ芍薬ノ間縁類通り、夫ヨリ当分ノ通、

一 寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭之儀ハ内玄喚ヨ

リ通融、

一 横目ハ御徒目付詰所、

一 御徒目付ハ 御在国之節之詰所、

一 星シラベ方ハ二組共ニ、座横目詰所ハ郡方下板敷之所

へ畳敷付板囲、

一月次御礼並諸御祝儀事等ニ付、当分ノ敷舞台へ相準候

御座之儀ハ、御書院二ノ間并敷込、椿ノ間並鶴ノ間迄

相掛リ出席、尤、敷舞台ニテ被仰渡御用之儀ハ台子ノ

間、

一大身分、月次御礼并諸御祝儀事等候節ハ台子ノ間、

右之通被相直候事、

御礼席之場所見合、尤、其已後御修補相濟、五月廿四

日ヨリ本々之通、

諸所御門并辻番所下座并開閉之次第

二六三二

一 御楼門

一 北御門

一 御台所御門

右三御門、昼夜無差別可致下座候、

一 枳形御門

一 新橋御門

右両御門、明ケ六ツ相開、夜四ツ時相鎖、面番引可申

候、明六ツヨリ暮六ツ時迄之間、兼テ致下座候向へハ

可致下座候、夜中不及下座候、上番・下番共、本下座・

半下座可致一同候、

一 吉野橋御門

一 平之口御門

右式ヶ所、明ヶ六ツ相開、暮六相締、其内下座有来通、

夜ニ掛出仕等有之節ハ下馬辺堅メ可差出シ、尤、立番

時宜等者有来通可仕候、

一 御寺方夜下馬ノ節モ右同断、

一 高役番所三ヶ所

明ヶ六ツ時相開、夜四ツ時相締、暮六ツ時面番引可

申候、夜中不及下座候、尤、夜下馬有之節ハ可致下座

候、

但、御門番所并番所、是迄下座不同ニ致来所ハ可

相準候、

右之通相究候旨被仰渡、

天明六年十月廿四日

二六三三

一 高役番所之脇、諸人通用ノ戸前、朝六ツ時相開、暮六

ツ時戸立置、夜四ツ時可鎖候、鎖鑰ノ儀ハ大番所へ致

格護、代合ノ節堅固可次渡候、尤、出入ノ儀随分気ヲ

付候様被仰渡、

安永四未二月

二六三四

一 吉野橋御門

一 西田橋御門

一 韃鞨冬御門

右ハ、此節御門并番所被相建、足輕番被仰付、勤方之

儀ハ御城下辻番所同前、昼夜不明様可相勤、日限ノ儀

ハ追テ可申渡候旨被仰渡、

同年未三月

二六三五

一 枅形御門

一 新橋御門

一 吉野橋御門

一 西田橋御門

韃毘冬ノ橋御門

右者、此節御門并番所被召建候付、向後右通相唱候様

被仰渡、

同年未三月

二六三六

一新橋口并枅形御番所成就ニ付、新橋ハ島津左衛門、枅

形ハ島津筑後ヘ勤番当年^中請持被仰付候旨被仰渡、

安永四未正月

但、本文御普請成就ニ付、来月朔日ヨリ右番所受取

可相勤旨被仰渡、

未三月

一 平日羽織袴ニテ家来上番召人・下番足輕式人ツ、可致勤番候、

一年頭・諸節句又ハ屹立^候ノ節、上番兩人上下着、下番モ

右ニ可準候、

一番所、平日定紋付幕構ニテ致屏風構、鉄炮五丁・鞆弓

台五肩相飾、鍔五本可飾置候、

一 平日為火用心、水溜桶并手桶可飾置候、

一 上番上下致着用程之節ハ、三ツ与手桶二ヶ所可飾置候、

一 柵門并番所廻リ不荒様払除可致候、

一 御連枝方通行之節ハ可致下座候、

一 御一門・大身分・御家老・若年寄・大御目付・大御目

付横目格ヘハ可致本下座候、

右之通被仰付候条、聊大形無之様可申付候、

正月

左中

帶刀

仲

二六三七

番人心得ノ覚

一番所、昼夜無油断可相勤候、

一夜入候ハ、番所前常灯一ヶ所可出置候、

二六三八(の1)

定

一御門、朝六ツ時ヨリ開候テ、夜者四ツ時可鎖^⑨候事、

但、大門締候以後ハ小門通融、

一夜中三度ツ、近辺致廻方、就中夜更往還ノ者可入念候、

自然別テ胡乱成体ノ者於致徘徊テハ聞届、申分怪敷候

ハ、留置、当番御目付へ可得差^⑩候、万一及異儀候ハ、

時宜次第可相擲事、

一喧嘩口論并異変等ノ節ハ早速駈付可制候、人ヲ打果候

者又者手負セ被退去候者、拔身ヲ持通り候モノ、疵付

罷通候者、何方迄追掛留置、当番御目付へ申出、差^⑩候

次第可取計事、

一怪敷人又ハ病人或酒酔ノ者罷通候節ハ、番所へ引入置、

致介抱可差通候、依様子ハ宿所承届迎呼遣、当番御目

付へ可差^⑩候事、

一御番所近辺へイ居候者ハ罷通候様可申聞候事、

右条々、堅固可相守者也、

正月

左中

帯刀

仲

右ニ付、

一喧嘩口論并胡乱成者其外異変ノ節、制ノ^⑩砌及異儀候節

ハ、時宜次第相捕、御目付へ得差^⑩候様被仰渡置候、

依時宜者十手又ハ棒ニテモ不依貴賤当可申哉、自然手

込難致節ハ如何仕候様可申付哉、

右之通、筑後・左衛門ヨリ被相伺候処、都テ申出通被

仰渡候、

同年正月

二六三九

一寺社奉行・御勘定奉行・組頭・御番頭・御側御用人・

御側御用人格・御用人・町奉行・御近習役・御近習役

並

右御役々へハ御門番人并辻番人勤場人数半ニテ下座可

致旨被仰渡、

安永二巳六月九日

二六四〇

一南泉院・福昌寺・浄光明寺・寿国寺・良英寺

(二六三八の2)

右御寺、御法事ノ節、諸大身分ノ内へ勤番被仰付旨、

家来并其以下、人見合差出置管候条、別紙記絵図面之

通、右場所へ張番所之振合ヲ以、広狭者其所ニ応シ、

御作事方受込、勤番所相調、勤番手先番所之儀モ同断

可相調候、尤、飾等ハ勤番之向ヨリ可差出候、

一 右ニ付、物頭張番所并手先番所、其所ニ応シ、是又絵

図面之場所へ可仕調候、南泉院之儀ハ中小姓并同心番

所右同断調方申付候、

右之通、可承向々へ可申渡候、

天明七未八月

(市田教國)
勘ケ由

二六四一

一 御内証之御方オトセトノ御門通融之節、大戸相開、本

下座ニ被仰付候間、途中、諸人參合候砌モ右ニ可応旨

被仰渡、

安永四未六月

二六四二

表御門番所条目

一 御門番四人、昼夜堅固ニ可相勤候、五節句・御礼日張
番其外、被定置ノ通得其意、物頭可任差図、

附、御門廻掃除、不荒様可念入事、

一 御門、朝六ツ時開之、暮六ツ時閉之、御在国之節ハ

夜四ツ時鎖オロシ、御在府之節ハ夜五ツ時鎖之、鑰

ハ御小姓組御番所江可納置之、御門開鎖并出入之改、

御小姓組御番人可致差引候間、可任差図候、且又御門

出入之儀、入念相改、下々之者ハ何方之者何用ニ付テ

罷通候由問届、於無別条ハ可差通之、不審成者又ハ言

葉為相替者留置、御小姓組御番人へ申断、可任差図候、

胡乱成者紛入儀モ可有之候間、心ノ及氣ヲ付可申事、

一 夜中出入之儀、猶以入念相改、名前承届可通候、御門

鎖候節ハ御小姓組御番人罷出見届鎖之、直ニ御門番所

へ兩人完可致上番候間、御門鎖候以後御用付テ罷通人

於有之ハ様子承届、上番へ申断、差図次第可差通候、

依時宜御小姓与御番人難計儀於有之ハ、当番頭并御目

附江可得差図事、

一 御城近辺火事騒動之儀有之候ハ、御小姓与御番所へ

早速可申出候、右体之節ハ加番四人申渡置候間、御門

左右ニ棒ヲ突、出入堅固可相改之、尤、物頭相詰可致
差引之条、可得其意事、

一 諸物之儀、北御門ヨリ可差通候条、可得其意事、

右条々可相守之、若緩之儀於有之ハ可及沙汰者也、

天明八年六月日

(島津久邦)
和泉

(喜入久福)
安房

(菱刈東祐)
大炊

(二階堂行且)
主計

二六四三

一 福昌寺・大乘院・淨光明寺・一乘院・弥勒院・大龍寺

右、登城之節、御門番之足輕半下座可仕候、南泉院之

儀者本下座仕候様被仰渡、

享保九年辰八月五日

二六四四

一 島津若狭殿・島津又八郎殿・島津玄蕃殿

右、本下座、

一 島津左衛門殿・島津美濃殿・島津図書殿・島津筑後殿・

御家老衆・若年寄衆・大目附衆・島津和泉殿・島津又
五郎殿・島津石見殿

右、半下座、

右、張番所ヨリ写置候、

一 正月十一日、大盤(殿)若経被差上候間、御門相開、番人下

座、

一 十二月廿四日、右同断ニ付、御門相開キ、番人下座、

一 大盤(殿)若経、間ニ被差上候節ハ御門相開ニ不及候、

一 六月朔日、愛染明王御通ニ付、御門相開、番人下座、

右ノ通、毎年規ヲ以御門相開(候)之様可申渡置旨、今日赤

松新之丞殿御取次ヲ以被仰渡候間、御番代合之節堅固

次渡可被相勤候、以上、

未正月八日

肝煎

表御門番人中

二六四五

一 御出并南泉院ヨリ御札被差上候節、御請被仰渡、改(方)

之儀ハ、御出有之節、其御門ヨリ直ニ御兵具所へ申出

シ、其節引取方可申渡、且又御札之儀ハ被差上候節、

才領人江無殘被差上候哉之旨相尋、無殘被差上候旨承
候モ、直ニ御兵具所江可申出候、其節引取方可申渡候

間、右之趣代り合之節、無間違次渡可被置候、

此段申渡候、以上、

天明八年申五月十七日

肝煎

表御門番人中

二六四六

一御城内并下馬供懸、

一御一門方挾箱ハ御城内へ被為持之、物頭張番所右脇腰

掛へ可差置候、蓑箱之儀ハ雨天之節計同断可有之候、

一島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後

挾箱ツツ、唐御門石壇下迄為持、其所へ可差置候、入

用之儀候ハ、供ヲ離レ、別段可相通候、

但、北御門ヨリ登城之節ハ挾箱北之御門手前御厩之

方江可差置候、

一諸大身分ヲ初無役之面々、挾箱ハ下乗江可残置候、尤、

入用之節供ヲ離レ、別段可差通候、

一御役人ハ勝手次第為持、其役所辺へ可差置候、尤、御

番頭以上ハ挾箱ツツ共ニ御城内江為持可申、其已下ハ
式ツ為持候共ツハ下乗へ可残置候、

一寺社之儀、諸事は迄之通可致候、

但、下乗之所ハ南泉院儀モ同様、御門橋手前ニテ下

乗、

一御城内泊り番之御役ニ手鐘差通來候分ハ是迄之通、其

節之供相離レ可差通候、

右之通被仰渡候間、此段申渡候、以上、

申正月六日

肝煎

表御門番人中

二六四七

一御城下辻番所、夜廻不致不締ニ候間、毎夜四ツ時ヨリ

六ツ時迄、一時ニ一度、番人ウ人ツ、夜廻申付候、

廻様左之通、

一西辻番所番人廻初ツ節ハ、新辻番所迄相廻可次渡候、

夫ヨリ新辻番所番人高役番所迄右廻番人へ可相断候、

高役番所番人ヨリ御本門押番へ可申出候、

一高役番所番人廻初候節者、新辻番所迄相廻可次渡候、

夫ヨリ新辻番所番人西辻番所迄廻廻、番人へ可相断候、

其首尾西辻番人ヨリ御下屋敷御門押番へ可申出候、

右之通申渡、御番頭へ両所押番時々之首尾承届②候様被

仰渡候、

宝曆八年寅三月

二六四八

一御納戸・御兵具所・御書院方・進物藏・御能藏

右五ヶ所ヨリ御道具其外品々御城外へ差出候節ハ、御

兵具所・御書院方ハ物頭、御書院方預リ・御能藏之儀

ハ御能方御目付ヨリ、夫々証印之御門通書付②にて差通、

御納戸・進物藏之儀ハ御徒目付又ハ座横目ヨリ同断致

首尾、締方嚴重有之候様可相心得候、御門番之儀モ専

氣ヲ付、証印書付品員数等引合差通、万一紛數品モ候

ハ、留置、当番之御目付へ首尾可申出旨、向々へ可申

渡候、

安永七戌十月

二六四九

一御台所御門之儀、足輕番迄ニテ御囲内居住之御台所書

役致見締来候へ共、此節書役引払ニ付テハ、以来御兵

具方与力老人泊リ致上番候様ニ被仰付候、左候テ、右

御門之儀ハ昼夜出入多、不締相見へ候付、堅固相改、

六ツ時ヨリ出入差留、御用者勿論、無拗向者検通帳調

置、名前相記差通、翌朝致封印、御側御用人座へ可差

出、御用人見届之上、紛數儀モ候ハ、応其向可致取計

候、

一御城近火等之節ハ、猶又入念出入可相改候、

一御台所御門外へ向々ヨリ差出候諸品引付、紛數向モ有

之由、已来御納戸・御広敷・御台所・御数寄屋取払向

ヨリ之引付ヲ不依何品、定詰目付役ヨリ見届致証印、

其外取払向ニ不相懸御役場者名印之肩ニ何方勤之名目

相記、御用物・自物之訳相分候様可有之、疑敷引付者

一切差通間敷候、御台所之儀者定詰蔵方目付退出後ハ

御広敷横目見届可致証印候、尤、御門へ差屯候引付、

御台所詰蔵方目付見届之儀共ハ是迄之通可相心得候、

但、北御門・南御門ヨリ差通候引付証印又者認振等

之儀右同断ニテ、其外仕向之儀者は迄之通可有之候、

一 右御門之儀、是迄何方差引者究リ無之候間、以来御側

御用人支配ニテ物頭ヨリモ致差引候様被仰付候、

右之通、奥掛・表方へ写ヲ以相達、可承向々へ可申渡

候、

享和三年亥五月五日

(川田佐實)
伊織

相良兔毛

二六五〇

一 北之御門ヨリ女中通融之儀、此跡 御代参ナト之節ハ

女中通融仕事候へ共、向後者北御門ヨリ女中通融被差

留候、於加久殿御事、平日北之御門通融ハ無之筈候へ

共、南御門道筋差支候時分ハ北之御門モ御通融之儀モ

可有之候条、左様可相心得候、

元文二己十二月

二六五一

江戸上御屋敷御門下座

一 四品以上

一 拾万石以上

一 御一門様方

右之御方々様御見舞之節、押番本下座、

一 拾万石已下

一 御旗元衆

一 御医師衆

一 島津但馬殿

一 島津式部殿

其外殿文字付御旗本衆迄

右之御方々同断之節、御門開、押番半下座、

右之通被仰渡候間、此旨西東南御門押番へ可申渡旨、

如例申渡、表御番所へモ可申渡候、

安永三年午四月

(喜入久福)
主馬

二六五二

一新橋御門并番所勉番 島津兵庫殿

枳形右同 島津左衛門

右出火騒動之節ハ、就中元^①付、疑敷見受候者ハ留

置之、当番之御目付へ可得指図候、

右通故、御役々其外駈付之節不及下座候、引取候砌下座之儀ハ平日之通相心得候様可被申付候、代合之節右之趣次渡可有之候、

安永八亥三月

安永二巳五月

二六五五

一御樓門橋涯

右、島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後・琉球王子・南泉院・福昌寺

一下乘

右、御家老・若年寄・大目附

但、乘輿之格式無之人、駕籠等相用候節者、下馬ニテ下乘、

一二之丸下へ此節下乘札下馬札被相建候旨被仰渡、

天明八申拾月

御城下下馬下乗之次第 附寺社

二六五四

一安永二巳四月十九日、御城下犬垣取除、下乗札下馬札被相建候、

一御樓門地幅

右、御一門・琉球太子

一御城下金藏通、下馬不及、

一諸座長屋南泉院下通、下乗下馬ニ不及段被仰渡、

二六五六

一御城下江下馬下乗札被相建候付、下馬ニテ下乗被致モ有之由候得共、不及其儀ニ候間、下乗ニテ駕籠可被相建候、

一燃ニ付、灰フリ、諸人迷惑ニ茂相成咎候間、難凌節者

御城内并御城下其外存同前、手笠勝手次第相用候様、

(島津久親)
求馬殿ヨリ無屹ト寄々致通達候様致承知候間、此段申置候、

以上、

寛政六年六月十七日

御目附

二六五七

一 右同断、諸人下馬ヨリ着笠拔候人モ有之候へ共、不及其儀、供廻迄茂下乗ニテ拔候様可相心得旨、寄々致通達候様被仰渡、

安永二巳五月

二六五八

一 享保十三年、島津将監殿(久当)步行不自由ニテ乘輿御免左之通、

一 島津将監殿

右者、步行不自由有之候付テ、先年乘輿御免為被仰付事ニ候、然共其節下乗之場所御沙汰無之候付テ、此節左之通被仰付候、

一 御城下之儀者、本御門橋雁木之涯、北御門ハ高役番所

被乘通、橋涯ニテ下乗、御下屋敷江参上之節ハ御屋

敷御門涯ニテ下乗、磯江参上之節ハ天神下高札之前ニ

テ下乗有之事候得共、留木戸被乘通、御門前ニテ下乗、

且又神社・寺院江参詣之節モ下馬下乗無構、神社者鳥

居涯、御寺ハ門涯迄乘輿御免被成候、

一 御城堀涯被罷通候節モ不及下乗、直ニ可被乘通旨被

仰付候、

右之通、寺社奉行・物頭へ申渡、御役人限可致通達候、

申四月 享保十三年

(島津久實)
中務

二六五九

一 種子島彈正殿(久基)、同断ニ付、前文之通、

享保十三年申四月 仰渡 (島津久純) 大藏

二六六〇

一 御城下立番、平日無之候得共、向後ハ月並御礼日・御祝儀等之節之通、毎日可相勉候、

但、北之御門前辺立番者人毎日可相勉候、

一 御一門・大身分・大御目附格以上登城之節、内外立番

一 涯稠敷可致下知候、

渡、

一 御城下又者下知、御一門并大御目付格以上登城之節ハ、

安永二巳五月

一 涯御門番へ相通候程可致下知候、御門番ヨリハ御城

内立番共方江相通候程是又致下知、脇ヨリ承候テモ只

二六六一

今右人数登城有之候ト心付候程可致下知候、

一 諸御役人江立番之足輕ヨリ致式礼候節、慰勲ニ礼受候

但、北御門前辺立番之儀モ同断、

人モ有之候付、左様無之、相応ニ礼相受罷通候様、寄々

中略、

可致通達旨被仰渡、

一 御一門方屹立候節者先私家来者人行列先ニ相立、何某

同年巳五月廿八日

殿被罷通候段、行逢之人々江知セ可申達候、左候ハ、

被究置候通式礼可致候、

二六六三

但、下人体之者ハ扣候様、先私ヨリ可致下知候、

一 唐御門、諸人通融不苦旨被 仰出候段被仰渡、

右、明十五日登城之節ヨリ右之通被仰付候旨被仰渡、

天明五巳五月廿六日

安永二巳五月十四日

(島津久金) 伊賀
(喜入久福) 安房

二六六一

二六六四

一 御一門登 城之節、御門涯ニテ下乗被致管候処、仕来

一 諸向御城内并下馬供定、左之通、

ニテ橋涯ニテ下乗有之候得共、向後御門涯ニテ可被致

一 御一門方挟箱者御城内へ被為持之、物頭張番所右脇腰

下乗候、北御門同前之管候得共、下乗之場所都合不宜

掛へ可差置候、襄箱者雨天之節計同断、

候故、御門涯之筋ニテ下乗可有之旨被 仰出候段被仰

一 唐御門致通融候儀、為被差留置仰渡モ無之候間、末々

之者共迄モ罷通候儀不苦旨被仰渡、

寛保元酉三月

二六六五

一 島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後

挾箱一ツ、唐御門外石壇下迄為持、其所へ可差置候、

入用之儀候ハ、供ヲ相離シ、別段可差通候、

但、北之御門登城之節者挾箱北之御門手前御廐之方

江可差置候、

一 諸大身分ヲ初、無役之面々、挾箱者下乗江可差置候、

尤、入用之節者供ヲ離シ、別段可差通候、

一 御役人之儀者勝手次第為持、其御役所辺ニ可差置候、

尤、御番頭以上者挾箱式ツ共ニ御城内江為持可申、其

以下ハ二ツ為持候共菅ツハ下乗ニ可差置候、

一 寺社之儀者諸事は迄之通可致候、

但、下乗所ハ南泉院儀モ福昌寺同様、御門橋手前ニ

テ可有下乗候、

一 琉球人為持道具之儀者都テ下馬へ相迎、駕籠者下乗橋

外脇掛内江可差置候、

一 御城内并下馬先供屋辺、小用所之外へ猥ニ小用致シ候

者有之候付、右体之儀無之様主人ヨリ屹ト可被申付候、

尤、支配下有之面々江屹ト可被申渡候、

此段致通達候、

天明七未四月廿五日

御目付

二六六六

一 同心其外一身者之儀、御城内齒付下駄相用候儀、一

切差留候条、無間違様可申渡候旨、向々支配頭へ可申

渡候、

天明七未五月三日

(島津久邦)
和泉

二六六七

一 御城下下乗涯西辻番所ヨリ内垂水屋敷迄ノ間、土以上

ハ着笠拔キ、家来其外末々ハ下馬ニテ笠ヌキ可申旨被

仰渡、

天明八申四月

二六六八

一南泉院之方ハ、西辻番所前下馬下乗ニテ候間、向後ハ右場所ヨリ北之方下乗、供廻迄ニテ、為持道具等ハ枡形目付番所前可相廻候、

一北之御門ヨリ登城之面々、是迄之通可相心得候、為持道具等ハ島津備前殿屋敷裏門之方ニ掛可差置候、

一御城内泊番之御役者手鍔差通来候分ハ是迄之通ニテ、其節ニ供ヲ相離シ可差通候、

一御一門方先供之儀ハ下乗橋手前ニテ可相廻候、南之方ヨリ登城之節ハ南御門前、北之方ヨリ登城之節ハ北之御門手前ニテ可相廻候、

一御家老ヲ初、御役人并無役之諸家先供之儀ハ、下馬ニテ可相廻候、

一御一門方ヲ初、諸向手鍔并為持道具等ハ、都テ下馬限ニ可残置候、合羽籠之儀者其末ヨリ通筋ニ掛、御木屋之場屏付ニ可差置候、北・南下馬モ同断可相心得候、

但、御一門方乗物之儀者御門地幅外ニ可差置候、

一今度御城下へ下乗札下馬札被相立候付、登城之面々惣供廻ハ其所へ差置、夫ヨリ手廻計ニテ登城、以後手鍔

其外供屋へ入置、退出之節モ手鍔以下相下置、下馬ヨリ可被相列候、

但、備前殿裏門通外繫場前下乗下馬ニテ右同断可被相心得候、

一諸座角ニテ下馬下乗致シ、登城之面々手鍔其外角之御藏下通ヨリ相下、供屋へ入置、退出之節右場所ヨリ可被相列候、

一角之御藏下ヨリ御厩角迄ノ間、手鍔為持罷①通候へ者肩ヲ廻シ可被為持候、

右之通、向後被相定候、此旨表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写ヲ以可相達候、

安永二己五月
(島津久金) 左中

二六六九

一御城内供家来左之通、

一御家老、侍四五人小者老人

一若年寄ヨリ大目付迄、侍四人小者老人

一大番頭ヨリ当番頭迄、侍三人小者老人

一御側御用人ヨリ御側役迄、侍式人小者老人

一御留主居以下、土老人小者老人

右之通相心得、無役之面々モ右振合ヲ以可召列、其外
ハ下馬下乘ニ可差置候、

右者御城内供廻并下馬下乘殘置候供等之儀、是迄不同
有之候間、向後右人数ヨリ不相過様可致旨被仰付候、
尤、此節供相重候様ニトノ儀ニテ無之候、召列候節ハ
及多人数^{④候}ニ付、其節右人数ヨリ不過様可相心得トノ御
事候条、此旨向々へ可致通達候、

天明八申四月

(島津久邦)

和泉

(夢川東祐)

大炊

二六七〇

一下馬下乗与力同心堅メ、左之通、

一年頭・五節句・惣出仕并疏人登城之節ハ本堅、

但、他国御使者登城之節モ同断、

一月次御礼日者半堅、

但、堅之次第、別紙絵図面三枚之通、

右之通、物頭へ申渡、可承向々へモ可申渡候、

同年同日

二六七一

一寺院ニテ下乗之儀者自ラ何レモ可有下乗事候、且登城
并寺院へ参詣之節乘輿御免無之、駕籠ニテ登城又ハ参
詣之面々ハ、下馬迄可相用事候、

右之通、向々へ寄々可致通達候、

天明八申四月

大炊

二六七二

一御一門方登城之節、手鐮・率馬・合羽籠等者下馬所へ
殘置、長柄之儀者天氣次第 御城内江被為持候様可有
之候旨被仰渡、

天明七未七月

二六七三

一御城下下乗下馬堅、先達テ申渡置候儀者其通被立置、

此節御儉約ニ付、別紙絵図面三通張紙之通、一往引取
申付候旨被仰渡、

天明八申六月

二六七四

一御城内立番与力四人之内式人相減、耆人者御内玄喚前、
老人^{⑧は}ツ、下馬辺江罷在候様申渡置候処、下馬先堅メニ
付テハ別段申渡候間、都テ三人相減、御内玄喚前耆人
受持ニテ行廻致下知候様可申渡候、

天明八申四月廿九日

大炊

二六七五

一御下屋敷前通、只今迄日笠指^⑨ノ儀無之候へ共、御下屋
鋪御本門前迄ヲ致遠慮、右外二ノ丸辺迄ハ不苦候旨被
仰渡、

明和四亥十一月三日

朱書

本文ニ付、此^(高橋權壽)面殿ヨリ口達ヲ以、以後御下屋敷江殿様
方被成御座候へ、其節ハ又候何分可被仰渡旨被仰渡、

二六七六

一玄蕃殿・壯之介殿・兵庫殿^(忠紀)

右御三人、登城之節不及下乘、御門涯ニテ下乘、其外

諸御屋敷共ニ同前、磯御方之儀、下馬札ヨリ龍洞院迄

之間不及下乘、御屋敷涯ニテ下乘可有之候、

此段屹通達被成事ニテハ無之、木脇賀左衛門ヨリ口達

ヲ以被仰渡、

元文四年未五月

二六七七

一赤松造酒殿事、御城内并諸御屋敷・御寺方、杖御免
被仰付候、

安永三年三月

二六七八

一福昌寺黒門開ノ儀者、屹立候節又者御法事、何ソニ付
群集之節立番申付置、凡下体之別テ賤敷モノハ脇小門
ヨリ罷通候様、立番足輕ヨリ可致下知候、右外御寺々、
右ニ準候様被仰付候、

安永二巳六月

二六七九

一同心其外一身者之儀、都テ御城内齒付下駄相用候儀、一切差留候条、無取違様可申渡旨、向々支配頭へ可申渡候、

天明七年未五月四日

(島津久那) 和泉

(二六六六号文書に同じ、日付違)

二六八〇

一御下屋敷西御門前仮橋迄御城下同前、乗物并駕籠・馬上ニテ罷通間敷候、尤、右之道筋鐘立サセ間敷候、且又不宜品持通候儀無用被仰渡、

享保九年辰正月

二六八一

一七歳未滿之子共女中同前之事ニ候故、寄合并以上之子共駕籠ニテ罷通候節、御城下并諸御屋敷下下乗仕ニ不^①及事候条、此段御門番へ可申渡候、

元文四年未五月廿九日

二六八二

一寛二郎殿御儀、島津若狭殿養子被^(齊宣男、忠公)仰出候付、明後九日九ツ時御引越之節ハ、其節北御門外ニテ御乘輿行列供廻等若狭殿方ヨリ可差越候、此旨内用頼御用人へ申渡、可承向へモ可申渡候、

文化七年午四月

(島津久備) 安房

乘輿御免 御国元 江戸

二六八三

一御当地ニテ者万石以上乗物御免被成候、^(日記雜學追録「一審殿・壯之助殿・兵庫殿家格」とあり)助殿家格ハ部屋栖迄モ御免被成、^(旧記雜學追録「一審殿・壯之助殿・兵庫殿家格」とあり)其外ハ家督計年生之無構御免被成候、万石已下大身分・大御目付以上者五拾才ニ相成候ハ、乗物被成御免候、大御目付以下之御役相勉居候者モ万石以上ハ年生ニ無構御免被成候、^①是又大御目付以下ニテモ五十才以上罷成、於江戸乗物御願被下候程ノ者ハ御当地ニテモ願出次第御免可被成候、尤、於江戸被成御免置候者ハ御当地ニテ猶以被成御免

候、

元文三年午十二月廿六日

(島津久純)
大藏

二六八四

享保十三年申四月

一 島津將監殿(久当)

右者、步行不自由有之候付テ、先年乘輿御免為被仰付事ニ候、然共其節下乗之場所御沙汰無之候付テ、此節左ノ通被仰付候、

一 御城下之儀ハ、本御門橋雁木之涯、北御門ハ高役番所被乗通、橋涯ニテ下乗、御下屋敷へ参上之節ハ御屋敷御門涯ニテ下乗、磯へ参上之節ハ天神下高札之前ニテ下乗有之事候得共、留木戸被乗通、御門前ニテ下乗、且又神社・寺院江参詣之節モ下馬下乗無構、神社ハ鳥居涯、御寺ハ門涯迄乘輿被成御免候、

一 御城堀涯被罷通候節モ不及下乗、直ニ可被乗通候旨被仰付候、

右之通、寺社奉行・物頭へ申渡、御役人限可致通達候、

申四月

(島津久實)
中務

(二六五八号文書に同じ)

二六八五

(令条記卷三十 三九六号)

令条記卷第三十

覚

一 小普請役相務面々、五十歳ヨリ内ニテ乗物断、向後御不相成御免、免不被成候事、

一 当病ニテ御奉公不相勉、養生之内乗物断ハ、向後以誓詞可為御免事、

一 乍勤乗物断ハ、以月限誓詞可為御免事、

一 雖為御直参、輕御奉公人乗物可為無用、無抛子細在之ハ、支配方受差指図、或乗物或駕籠、以誓詞可為御免事、

一 町人乗物之事、只今迄支配方断ニテ雖御免候、向後ハ惣様可為駕籠、乍然無抛子細在之ハ、老中并若年寄、松平因幡備前守・石川美濃守へ申達、可任差指図事、

一 猿染ハ縦五十以上タリ上共可為駕籠事、

一 御三家方・甲府殿家来乗物断、左中江申達候上、以誓詞可為御免事、

一 諸家中五拾歳以上之者乗物断、主人ヨリ状ヲ取、其身

ニ誓詞ヲ致サセ可為御免事、

一諸家中五拾歳ヨリ内之モノ、就病氣病氣付乗物断者申上間敷

候、乍然務手動ナカラノ断候ナシハ、老中迄申達、可請差図受指、

於相調候ハ主人ヨリ状ヲ取、其身ニ誓詞致サセ可為御免事、

右之外、乗物之儀ナシハ不及申、駕籠タリトモ御目付衆

ヘ申達、無抛子細有在之者、吟味上之指可有差図者也、

延宝九年五月廿五日

駕籠御免 江戸

二六八六

貞享三年寅二月、平山勘兵衛日帳之内

一二月十一日、今晚加賀守様へ参上、從 中将様之御口

上、私家来相良仁右衛門ト申者、留主居申付召仕候、

当年五拾一歳ニ罷成候、筋氣ニ御座候テ馬上難成候間、

駕籠願申候、御免被下候様ニ願存候願、御返事何レモ御

相談被成候テ御返事可被成由被仰候、御取次堀江三太

夫、此旨高輪へ申上候、同十二日日暮、加賀守様御用

人角田敷馬ヨリ手紙到来、被仰聞儀候間、加賀守様御

宅へ可致参上旨、加賀守様被仰候由被申越、則罷出候

処ニ、相良仁右衛門駕籠願之儀、何レモ被仰談、能勢

惣十郎殿へ申渡候間、惣十郎殿宅へ二右衛門罷出可得

差図之旨可被仰付候由被仰候、此旨高輪并仁右衛門へ

則申越候、加賀守様御宅へ右之御礼達方候間、御使者御

無用ニ可被成旨、加賀守様被仰候由敷馬被申候、

二六八七

右同貞享元年子二月、日帳之内

一島津図書殿、先比乗物願被仰上、御裁免ニ付テ、御目

付衆九ヶ所へ致御案内、図書殿太刀持参、及晩罷帰申

候、

杖御免

二六八八

文化七年午

一私事七拾歳罷成、歩行不自由ニ御座候(御間)、近比恐多奉

存候得共、御城内并御寺内御屋敷方杖御免被仰付被下

度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

午二月一日

三原善兵衛

御付紙

願之通被成御免候、

二月

(島津久備)
安房

取次

二階堂左門

宝曆六子四月

二六九〇

一武御屋敷御作事共、此節嶺松院様(總書開室)へ被進候段被仰渡、

宝曆十一巳九月

二六九一

一武村之内、此節嶺松院様へ被進候御屋敷之儀、五本松

御屋敷ト唱候様被仰渡、

安永九子十一月

諸所御茶屋御用屋敷

二六八九

一信證院様被成御座候武御屋敷、先年(宗信) 慈徳院様へ被進

置候、且又田上川原御屋敷之儀モ 信證院様御卒去付

テハ御物御計ニ相成候、右両御屋敷御家作共、此節

太守様ヨリ(重豪) 隅州様へ被進候旨被仰渡、

二六九二

一西田御屋敷、此内ハ 信證院様御屋敷ト唱候得共、向

後於菟様御屋敷ト唱候様被仰渡、

享保十二年七月三日

二六九三

一御普請方被建置候築地者築地ト唱、上者上築地、下者

下築地ト唱候様被仰渡、

元文四未五月

寛政元酉五月

二六九四

一初平

右之通、今度吉野村之内、御用地ニ相成候一畝之内、

唱被相改候旨被仰渡、

寛保三亥十月廿二日

二六九五

一上築地ト当分唱候得共、此以後鶴江崎築地ト唱可申候、

右築地之内ニハ神明社地・島津周防殿下屋敷・磯御用

屋敷有之候、鶴江崎周防殿下屋敷・神明社地ト唱可申

候、

延享元子六月九日

二六九六

一築地御屋敷、此節御引払、以後者御用地ニ相成、同所

御茶屋地一畝ニ被仰付候、五本松御茶屋之儀モ御用地

ニ被仰付候旨被仰渡、

右ニ付、向後築地御茶屋ト相唱、五本松御屋敷ハ中
將様江被進候付、以来御隠居御方五本松御下屋敷ト可

相唱旨被仰渡、

酉五月

二六九七

一宗門掛御用屋敷之事、宗門方吟味所、

右之通、唱被相改候旨被仰渡、

寛政二戌九月

(島津久親)
求馬

二六九八

一御屋敷老ヶ所

鹿兒島中村老万三千九百六拾八坪、御家作有、

右、今般御取立ニテ、以来御用相成、中村御茶屋ト相

唱、尾畔・磯御茶屋同様之振合被仰付候条、此旨可致

通達候、

寛政七卯六月

(名越巨磨)
右膳

二六九九

一 御船手御囲屋敷數七十二ヶ所

内、沓ヶ所観音屋敷、七十一ヶ所船頭水手屋敷、

一 屋敷八反三畦拾八步

内、四畦十八步観音屋敷、七反九畦船頭水手屋敷、

元文五年申三月改、

宝八年御春屋内へ評定所預被召置、其後田尻火事之節
焼失、其後今之通御造立有之、

二七〇一

一 享保七年寅四月十一日、(吉慶開室)於須磨様御下屋敷へ御移徙、

二七〇三

一 同年寅六月廿八日、(吉慶)総州様御下屋敷へ御移徙、

二七〇〇

一 向御船手船頭水手屋敷九十七ヶ所

享保十年書出、

二七〇四

一 徳姫様、申閏七月十三日御移徙、築地御屋敷卜唱候、

御屋敷廻り小路下馬下乗可仕旨被仰渡、

一同三拾ヶ所

元文五年申

右、向御船手、

右、安永二巳年向御船手御竿入、改之書出、

二七〇五

一 於須磨様、轟木之御屋敷、鼓川御屋敷卜唱可申旨被仰

渡、

二七〇一

一 御春屋

享保元申十二月六日

元和年間被召建、万治年間今之四方屋敷ニ相成候、延

二七〇六

一 御台所後へ於嘉久様御家作被仰付候間、山下御屋敷ト

可相唱旨被仰渡、

延享三寅十二月

事、

安永二巳五月

二七〇七

一 磯・尾畔・武御屋敷・五本松御屋敷・御仮屋等之儀、

御茶屋ト可相唱旨被仰出候段申来候旨被仰渡、

天明四辰三月廿八日

(島津久起)
大進

右者、御船手囲ヨリ東之方、此度御茶屋地ニ相成候、

依之御屋敷之名、右之通唱可申候旨、御下屋敷横目有

馬八藏ヨリ矢野権右衛門致承知候付、支配中江申渡候

事、

享保十八年丑二月八日 肝要帳

二七〇八

一 田之浦本肝付典膳下屋敷、浜崎御屋敷

右者、御内証様御貰受相成候付、右之通相唱、諸書付

等ニモ可致旨、可承向々へ可申渡候、

享和四子二月

(兼刈実祐)
下総

三都御屋敷

二七一

一 桜田御屋敷

慶長十五年戌九月 家久公御拝領、公義へハ上屋敷之

名目ニテ、寛永七年四月十八日 家光公御成、同

廿一日 秀忠公御成、

二七〇九

一 御城下空地へ御記録所被引直、余地モ有之候ニ付、寺

社奉行所・町奉行所之儀被引直、御役所屋敷被仰付候

二七二

一 芝御屋敷

慶長十二年未九月 家久公御拝領、則鎌田加賀政在へ

掛被仰付、御家作御造営有之候、家久公当年初テ江戸

へ御出府、真福寺へ御旅館ニテ候処、右御拝領故、則

御家作被仰付、当御屋敷公辺へ御居屋敷ト申名目之

由、

二七三

一 高輪御屋敷

寛文九年 光久公御拝領、則御家作有之、同十年正月

御移徙有之、

二七四

一 京都御屋敷

一 大坂御屋敷

一 芝御屋敷 上御屋敷

一 桜田御屋敷 桜田御屋敷

一 高輪御屋敷 高輪御下屋敷

一 田町御屋敷 田町御下屋敷

一 御取添御屋敷 南向御屋敷

一 西向御屋敷

但、上御屋敷隣片桐石見守様御屋敷御相對替相添、
(真光)

此御方御屋敷相成候付、右之通唱候様被仰付候旨被

仰渡、

安永二巳四月十九日

二七五

一 芝并桜田御屋敷之儀、公辺向ニテハ桜田御屋敷ヲ上

御屋敷、芝御屋敷ヲ御居屋敷ト相唱、御内輪ニテハ都

テ去ル巳年被仰渡置候通、唱候様被仰渡、

安永三年五月

二七六

一 御守殿御拝借地、直ニ 太守様へ拝領被 仰付候旨御

到来之段被仰渡、

安永二巳閏三月

二七二七

一今里村之内、御部屋敷老ヶ所

但、惣地面式千五百四拾貳坪、

右、京極寺岐守様御抱地ニテ候処、此節御買入ニ相成、市田勘(教團)ヶ由殿名前ニテ被差置候段申来候、此旨可承向

へ可申渡候、

寛政十一年未十二月

(伊勢貞矩)
播磨

二七二八

一高輪町并御屋敷、是迄町人名前ニテ被差置候処、已来

直御名前ニ御書替之書付、御留守居附役名前ニテ屋敷

御役江被差出候処、先月六日其通相济候、左候テ、町

家者不残置候テハ都テ武家之家作御免難被成旨、御達

有之候ニ付、家守店八軒程残置、其外武家之家作・土

藏等造立之筈候得共、未暁ト治定不致趣之御答申出有

之候、

二七二九

一先年御取入ニ相成候大崎屋敷統之地面、是迄中目黒村

百姓甚兵衛名前ニ而候処、此節 中将様御讓受、御抱

添地之御願、屋敷御改御役所へ御留守居付役名前之書

付被差出候処、六月ヨリ御願通被仰渡候、

右之通申来候条、可承御役々へ可申渡候、

寛政八辰八月

(川上久致)
久馬

二七二〇

一大井村御部屋敷

右、此節雅姫様へ被進候段申達候条、可承向々へ可申

渡候、

寛政八辰十二月

(伊勢貞矩)
播磨

二七二一

一当分高輪御殿之地面

右、蓬山ヨシキヤマ

一右同、御本門ヨリ南方稻荷坂下迄

右、鶴渡ツルワタリ

一右同、向御屋敷

右、環江タマキ

右之通相唱候様被 仰出候段申来候条、可承向々へ可申渡候、

寛政九巳四月

(伊勢貞矩) 播磨

二七二一

一 高輪御茶屋之儀、高輪御殿ト相唱候様、且同所御屋敷西御門諸人通融被仰付候旨申来候条、可承向々へ可申渡候、

寛政八年辰正月

(山田有徳) 伯耆

二七二三

一 高輪御屋敷裏御門前御屋敷之事、高輪向御屋敷右之通相唱候様被仰出候段申来候、此旨可承向へ可申渡候、

寛政八年辰五月

伯耆

二七二四

一 白銀今里村百姓地面之内一冊相堅メ、御隠居様御名前ニテ御抱屋敷御免有之候付、白銀御屋敷ト相唱、諸

書付等モ其通可仕候、左候テ、御殿向其外御出来之上、当六月頃 御隠居様 大御前様被遊御移御内定ニ付、御移之上ハ万端高輪御屋敷御仕向ニ被準答候条、向々其心得ニテ致取扱、每物御手細之方ニ取シラベ可仕候、右之通被仰付候段申来候条、可承向々へ可致通達候、

文化十一年戌三月

(川上久芳) 右近

取次 相良此右衛門

島津家歴代制度卷之卅八

安永
文化

御関狩
御馬追 由来

(以下一行、総目録より補)
御直参御代参

稻荷流籙馬

(本文より補)

御家督初テ御下国ニ付五社参詣之御次第

(以下四行、総目録より補)
諏訪社頭殿

福昌寺茅負

吉野御関狩

吉野御馬追

太守様其外様諸所御参詣之御規

二七二五

年始正月朔日

一五社御長袴
御直垂

一大雄山御宮并南泉院
御長袴

一福昌寺・浄光明寺
御熨斗目・御半袴

一惠灯院

但、福昌寺御序ニ候へハ、御服之儘被遊御参詣候儀
モ可有之事、

御熨斗目・御半袴
一護摩所・稻荷・八幡・天神・不動

一神明宮

一福ヶ迫諏訪

一^⑧靈符堂△

一表御看経所

右、正月十五日ヨリ内一度 御参詣、

御家督初テ御下国脇

一五社御束帯御懐

一大雄山御宮並南泉院

但、御宮御年回之節御直垂、毎年四月十七日御直垂、

一花尾山並一之宮

但、御家督初テノ年始御直垂、二度目ヨリ 御在国

中一度御参詣御長袴、御年回之節御直垂、

御長袴
一 福昌寺・浄光明寺

一 護摩所

一 神明宮

一 福ヶ迫諏訪

一 靈符堂

一 表御看経所

御熨斗目・御半袴
一 惠灯院

但、福昌寺御序ニ候ヘハ御服之儘御参詣被遊儀モ可

有之候、

二度目ヨリ御着城脇

御長袴
一 大雄山御宮並南泉院

御服紗小袖・御半袴
一 五社

一 護摩所

一 靈符堂

一 表御看経所

一 福昌寺・浄光明寺

一 惠灯院

但、福昌寺内(繼豐繼室)浄岸院様御靈前ヘハ御長袴、

御長袴
一 清揚院様

但、御家督ニ一度並御年回・御官位御昇進之節御参

詣、

一 聖堂

御初入部 御直垂、二度目ヨリ御熨斗目・御半袴、釈

菜之節 御参詣被遊候ハ、御長袴、

一 神農堂

イツニテモ御熨斗目・御長袴、

但、聖堂御序候ヘハ御服之儘被遊 御参詣儀モ可有

之事、

右、先達テ被仰渡置候得共、尚又御取調有之候処、

御初入部ニ付五社ヘ 御参詣之節 御束帯、大雄山御

宮ヘハ年始 御束帯之御先例ニ候得共、 御下国脇

御束帯ニテ 御参詣之方御厚候、且又花尾山・一之宮

儀ハ格別 御崇敬之御事候間、已来右之通被定置候間、

後年無間違様被 仰出候条、可承向ヘ可申渡候、

寛政元年酉三月十日

二七二六

(二七二五号行間)
朱書

一中將様 思召ヲ以、大雄山並不断光院又ハ、淨岸院様

御靈前へ 御參詣被遊候節已來御長袴、右外諸所御參

詣ノ節ハ御半袴被 召候旨被仰出候、

此旨可承向々へ可申渡候、

寛政五酉正月

左京

式之所へハ差越候郷土ヨリ人足両三人召列差越候様被
仰渡置度旨、寺社奉行ヨリ被申出趣有之、申出之通申

付候旨被仰渡、

天明七未七月

(鳥津久邦)
和泉

二七二八

一加志久利 一新田宮 一來迎院

御本地

右、当御下国ヨリ以來 御參勤 御下国之節御小納戸

ヨリ 御代參被仰付、差支候節者御小納戸頭取ヨリ差

寄可相勤旨被仰渡、

天明三卯八月

二七二九

一福昌寺御造立相濟、大門ヲモ被相建候処、此已前ヨリ

御仏詣 御入等之節大門 御通不被遊候得共、右ニ付

何ノ訳モ無之事候ユへ、向後ハ大門 御通路被遊候旨

被仰渡、

明和六丑十二月

二七二七

伊集院 志布志 一加世田

一妙円寺 一即心院 一日新寺

一皇徳寺 一龍雲寺 鹿兒島郡吉田

一長年寺 一來迎院 一津友寺

一神徳院 郡山 一花尾権現 限之城

一霧島権現 一加志久利 一野間権現 一称名寺

一住吉大明神 一加久藤 一開聞社 一野間権現

一白鳥権現 末吉 一櫛大明神 一金峯山

右諸所 御代參之節、横目屯人着服・麻袴ニテ差越致

見締、御寺方ハ大門之内外、社頭ハ鳥井之辺、不差障

場所へ罷出致平伏居、外ニ郷土屯人差越、掃除方等諸

事致下知、右寺社之内少人数之場所モ可有之候間、右

二七三〇

一 明姫様(重孝女) 嶺松院様(繼豐御室) 於千萬様寺社へ御参詣之節、住持・

住僧・神職・宮守等罷出候儀、太守様御参詣之節之

通罷出候様被仰付置候得共、御三方様御参詣之節、

是迄御目通ニ罷出所ハ罷出不及候、御目通ニテ無

之、夫々之詰所へ相詰居候儀ハ、太守様御参詣之節之

通可相詰候、

一 御三方様屹御出之節、御道筋締方等之儀ハ、太守様御

参詣振合ヲ以、御婦人様之御事、猶以可致遠慮儀ニ

候条、締方嚴重可申渡候、

一 依所締方届兼候所モ可有之候間、右様之所ハ御側御用

人へ可得差戻候、

一 右同断ニ付御使番御供之節ハ、大奥御玄喚ヨリ御供可

相勤候、

右之通被仰渡、

天明五巳五月

二七三一

一向後 御家督後 御初入部之節ハ、御願之上鎌倉へ被

遊 御参詣候様被 仰出候段、申来候旨被仰渡、

天明七未正月

(宮之原通直)
主膳

二七三二

一加世田日新寺之儀格別故、御一代ニ一度ハ可被遊

御参詣候、尤、四本御道具・御手廻可被召列候、

但、最寄之郷へ 御光越之節 御参詣之儀ハ、尚又

可奉伺候、

右之通被 仰出候旨申来候段被仰渡、

天明七未正月

二七三三

一 築地神明宮之儀、江戸芝神明御移御勸請ニテ、太守

様御産神之儀故、正御誕生日並毎年九月十六日月次御

神楽被仰付、御在府・御在国共ニ、年頭其外御直参又

ハ 御代参、御進納物等之儀ハ、都テ 中将様福ヶ迫

諏訪へ被仰付来候通、御同様被仰付候、左候テ、十六

日之儀ハ御日柄之御事故、御代参并御前へ上リ物等

ハ十五日ニ取計、御祭礼者是迄之通十六日ニ有之候様

被仰付候、

二七三六

一 鷄百羽、追テ可被遊御進納候、

一 南泉院 御代参之儀、去ル午年ヨリ大身分差支候節ハ

右之通、寺社奉行へ申渡、御側御用人・御使番其外可

本殿並御家老中御用之間有之人ヨリ被相勤候様被仰付

承向々へモ可申渡候、

置候得共、元朝大雄山 御宮且御法事等ニ付屹立候節

天明七未八月

(島津久邦)
和泉

迄御一門・大身分・其身独礼之人ヨリ被相勤、歳暮・

年頭又ハ毎月之御代参、向後本殿並御家老中被相勤、

二七三四

右差支候節若御年寄・大御目附ヨリモ相勤候様被仰

一 享保十五年戊四月廿一日 (雜登) 太守様江戸御発駕、同廿六

付候旨被仰渡、

日日光 御宮并御仏殿御拝礼、同廿九日 御帰館、

明和二年酉八月

(小松清香)
式部

二七三五

二七三七

一 鎌倉 白旗大明神 鶴ヶ岡八幡宮 頼朝公御廟

一 正月九日、護摩所へ 御名代被仰付来候得共、已来

忠久公御廟

御名代勤不被仰付、同月十一日御祈禱之儀ハ有来通被

右へ御家督ニ付一度御参詣、毎年頭・御年忌・御官位

仰付候、

御昇進等ニ付御代参御家老、

安永四年未十二月

右之通、向後被相定候旨被 仰出候条、此旨可承面々

へ可申渡置候、

二七三八

天明五巳五月

(喜入久福)
安房

一 御支度御熨斗目・長御上下ニテ御参詣又者御仏詣之節、

御供之小番已上御側廻リ支度熨斗目・麻上下着用仕来

候得トモ、七ヶ年内ハ御納戸奉行已上并御配膳之御小

姓迄熨斗目・麻上下、其外ハ不及熨斗目・麻上下、

明和六年酉十二月廿四日

二七三九

一御一門

右、(雜費雜室)淨岸院様御位牌所へ参詣之節ハ、拜殿縁類敷居上

畳三枚目ニテ拝礼、

一大身分 大御目付格已上

右同断之節、拜殿縁類敷居涯畳一枚目ニテ拝礼、

一寺社奉行ヨリ納殿役人迄

右同断之節、拜殿縁類ニテ拝礼、

右之通被仰付候条、御一門方参詣之節ハ、先達テ留守

居差越其段相達、伴僧老人唐御門内迄罷出案内可致候、

安永四年未七月

二七四〇

一御下国ニ付、上稻荷并護摩所・稻荷・同所不動へ、已

来屹ト可被遊 御参詣旨被 仰出、

右ニ付御次第略ス、

御供廻リ其外都テ福ケ迫諏訪へ屹ト 御参詣之節之通

被仰付候、

天明元丑五月

二七四一

一大雄山 御宮へ 御代参支度、年頭並四月十七日熨斗

目・長袴、月次ハ熨斗目・半袴ニテ候得共、月次共ニ

都テノシメ・長袴着用被^仰付候、

一南泉院 御位牌殿へ 御代参支度、年頭並月次共ニ熨

斗目・半袴ニテ候得共、年頭並御正忌日ハノシメ・長

袴、月次御忌日ハ是迄之通被仰付候、

一淨岸院様御靈屋へ 御代参支度、年頭並御正忌日ノシ

メ・半袴、月次ハ不洗物・半袴ニテ候得共、年頭並御

正忌^日ハノシメ・長袴、月次御忌日ハ熨斗目・半袴被

仰付候、

一花尾権現並郡山一之宮へ 御代参支度、熨斗目・半袴

ニテ候得共、花尾権現へハノシメ・長袴、一之宮へハ

是迄之通被仰付候、

天明元丑閏五月

一御茶

一神前へ 御参詣、

但、御束帯御懐、

二七四二

一来ル十七日九ツ時、大雄山 御宮へ御支度御狩衣ニテ

被遊 御参詣候間、服忌穢之人前日七ツ時ヨリ 御出

無之内 御城内へ不能出候様被仰渡、

享保十六亥四月十四日

一大乗院御内陳ヨリ金幣ヲ捧、 御前へ差上、

一御盃御三方
御土器

寺中之僧老人御幣殿ヨリ持下リ、奥御小姓請取之、

御前へ差上、長柄之御銚子右同断持下リ、相請取、御

神酒差上 御頂戴、 御土器御拝、疊之上被差上置之、

奥御小姓別之請台持参、御土器ヲ請持下ル、

一御内陳へ大乗院御案内ニテ御入、此節坊舎之僧兩人差

寄、御簾ヲ揚、兩僧ハ階下へツクハヒ居、被遊 御出

候節同断御簾ヲ揚、

一丹後御局・永金阿舍梨 御廟所へ御参詣、

右同日、郡山東侯村之内 一之宮大明神へ 御参詣、

一白銀一枚

右、一之宮へ 御進納、

一御盛塩

一寛政元年酉九月十五日、 齊宣公御家督初テ御下国ニ

付、花尾山へ御参詣、七本御道具、

一御太刀一腰

一御馬代銀式枚

右、御宮へ御進納、

一金子百疋

右、愛染明王へ御進納、

花尾山 御参詣之御次第、

一平等王院へ 御入、

一御前菓子

但、御小姓差上、

一御幣

但、諏訪神主差上、

一御神酒

但、奥御小姓差上、

同年十一月三日 御初入部初テ稻荷神事ニ付 御参詣、

直ニ(流鏑馬)鎗流馬 御覽、宝持院へ 御入、

一神前へ 御参詣、御長袴

一御盛塩

但、奥御小姓差上、

一御幣

但、別当寺差上、

一御神酒

但、奥御小姓差上、

二七四四

天明元年丑

一花尾権現へ

御在国中一度 御参詣之節、白銀壹枚御献納有之候得

共、已来御太刀一腰・御馬代銀一枚御献納、

但、年限内、御太刀一腰・御馬代銀六匁、

一正月十三日

御在府・御在国共、花尾権現へ御代参之節、青銅百疋

御献納有之候得共、已来御太刀一腰・御馬代銀一枚御

献納、

但書同断、

一郡山一之宮へ

御参詣之節、青銅百疋御進納有之候得共、已来白銀三

両御進納、御代参之節モ同断、

但、年限内銀一両、

右之通、御献納有之筈候条、御規模帳ニ記置、調方並

宰領等之手当致置候様御使番へ申渡、可承面々へモ可

申渡候、

天明元丑閏五月

二七四五

享保二酉

一大猷院様 (家光) ○正月 ○四月 五月

一敵有院様 (家總) ○正月 ○五月 九月

右之通、此間被遊 御參候、向後ハ星有之月計 御參之筈候、 御帰国之節、益 御発駕前ハ已前之通、被遊 御參候、

右之通被 仰出候、 御參無之月ハ御代參例之通被仰付候、

此段可致通達旨、將監殿御差図ニテ候、以上、

西八月十九日 谷山角太夫

稻荷社祭礼並流鏑馬

二七四六

川上十郎左衛門書出

一鹿兒島稻荷神前流鏑馬、朝鮮入前年 御帰朝之御立願ニテ (義弘) 惟新様朝鮮ヨリ 御帰朝之翌年ヨリ稻荷神前ニテ有之候由、右射手拾六騎、名書不相知候、

二七四七

旧伝集之内

一市木湯田之稻荷大明神ハ丹後之局之御造立之由候、鹿兒島之稻荷ハ市来之稻荷ヲ勸請被成候テ被召置候由、然者本稻荷ハ市来稻荷ニテ可有之候、彼稻荷ハ兩唐猫有之候、片唐猫ハ鹿兒島稻荷ニ有之候、阿(空白、牛カ)ニテ、(空白、牛カ)猫鹿兒島ニ有之由候、右兩猫ハ五色ニ色トリ有之、カノ稻荷由緒書ハ稻荷之社人之塚田某焼失イタシ、今ハ由緒書無之候、串良・樋脇之内、其外市木ニモ稻荷社領有之由候、然共今ハ市木ニ少計社領地有之候、

二七四八

一去年十一月稻荷祭礼之節、 御服中故当神楽迄ヲ奏候様ニ被仰付、流鏑馬ハ被召延置、 御服明候節可被仰付旨、先達テ申渡置候ニ付、当九月三日流鏑馬 御名代被仰付筈候、

此旨寺社奉行並可承役々へ可申渡候、

宝曆六子四月十二日 式部

御家督初テ御下国ニ付
五社御参詣之御次第

二七四九

諏訪社

大宮司

別当寺

右、二之鳥居外へ罷出、大宮司御案内、神前へ御拝、

一御盛塩

但、奥御小姓差上、

一御幣

但、別当寺差上、

一御神酒

但、奥御小姓、

稻荷

祇園

若宮

春日

諏訪社大宮司

別当寺

右、鳥井外へ罷出、諏訪社大宮司御案内、神前へ御
拝、

一御上リ物等諏訪社御同前、

但、若宮ニテハ御幣威光院差上、

一五社へ御進納物有之、

以上、

二七五〇

五社御参詣御行列

先陣

川上彦十郎

道奉行

一番私

横目

先陣

本田七左衛門

後陣

川上庄八郎

二番私

御鞍置
御馬

後陣

本田与三左衛門

御目付
付足輕

杏籠

御供使

足輕老人

御請笠

着服麻袴

御堅笠
着服麻袴
御油篋持
御兵具方
足輕式人
着服麻袴
陰御太刀持
御兵具方
足輕式人
着服麻袴

御張弓鞞腰ニ付持
御兵具方
足輕式人
着服麻袴
陽御太刀持
右同
足輕式人
着服麻袴
御扶箱
着服白丁
御扶箱
着服白丁

御参内傘
御箱持
御小人頭
白熊
御鎗
着服麻袴
白熊
御鎗
着服麻袴

定御供
御先供
同
同
定御供
御先供
同
同
定御供
御先供
同
同
着服麻袴
御長刀
着服麻袴
同
同

御先供
定御供
総人数五拾人
御供目付
着服素袍
御数寄屋頭・表御同朋之間
着服麻袴

御先供
同
定御供
御供目付
着服素袍

御納戸奉行
着服布衣差貫
御側御用人
着服布衣差貫
御轅
陸尺式拾人
着服長絹
御小納戸
着服布衣差貫
御側役
着服布衣差貫

御小姓与番頭
着服ノシメ半袴
御用人
着服熨斗目半袴

大番頭
着服熨斗目半袴
当番頭
着服ノシメ半袴

物頭
着服ノシメ半袴
御供目付
着服素袍
御茶道
奥御小姓
着服素袍
但、奥御小姓同人
小番
着服麻袴

諏訪社祭礼並頭殿

二七五一(の1)

一 鹿兒島諏訪社之儀者 (貞久) 道鑑様信濃国大田荘地頭職ニ被

補、御下国之節、下諏訪神体ヲ守下シ、山門院ニ御

勸請ニテ、総社ニ御崇被成候由、其節御鷹モ一所ニ御

下シ被成、御鷹之鳥風切之羽ヲ御手向有之候ト有、其

後 氏久公鹿兒島へ被召置候、(直力) 氏久公御代正平年間

鹿兒島諏訪大明神へ田地壹所・小笠懸百番・神馬一疋

御寄進之事文書相見候、其後正一位神号被相贈、御

代々様御崇敬、他ニ殊ニ候、五社之第一ニテ候、頭殿

之儀へ 忠国公御代ヨリ初り、鹿兒島近在神事勤之儀

モ 忠昌公御代ヨリ專為有之筋相見へ候、

旧伝集ニ左之通、

(二七五一の2)

鹿兒島諏訪大明神祭礼法様之事

陸奥守貴久御代ニ頭殿屋、居頭ト云事始也、此根元ハ

日本国之祭心也、頭殿ハ勅使、居頭者上使也、七月一

月之間頭屋之儀式勅使会积之儀也、号頭殿事ハ公卿蔵

人頭殿勅使之心也、号居殿ハ上使ナレハ諸衆之上ニ居

心也、頭屋之寄頭也、本ノマ、然者祭之日天下之為御祈禱頭殿

御幣、次為国之祈念居頭御幣、次ニ三ヶ国為祈念 貴

久御幣、如是心也、末代迄此旨ヲ存知、島津家ヲ扱者

能々可致奔走者也、為子孫矣失書付置所也、本ノマ、

永享十年戊午五月七日

朱書 諏訪神職本田出羽守先祖 本田信濃守氏親在判

右書付、先年今井松賀書写置候由ニテ差出御記録所へ

写有之_{⑧候} 処、元禄九年子四月廿三日之夜、御記録所焼

失之節、右写正文焼失候、右正文ハ何方へ可有之哉不

相知之由、

二七五二

(二七五一号行間にあり)
朱書 寛兼日史

一 陸月十六日出仕如常、当年当所御頭殿之儀、左忠棟之

二男、右村田雅楽助息タルヘキ由、定候也、寛兼日

記、

二七五三

安養院文書

一鹿兒島諏訪御佐山之御祭之次第

寛正六年自乙酉始之、

乙酉年

中村 郡元 田毛

丙戌年

川上 下伊敷 谷山之中村

丁亥年

坂本 谷山之福元

戊子年

田上 永吉 谷山之和田

乙丑年

花棚 西田 谷山之五ヶ別府

庚寅年

東之別府 谷山之山田

一六番

沢牟田 西之別府 原良 塚原

乙野 小野

辛卯年

上伊敷 犬迫

一七番

以上七廻、右具在前、

一同五月之御祭之次第

自同年始之、

乙酉年

山田図書助 原良之平之門

一一番

大徳寺 田上 小牧 永吉

丙戌年

丁亥年

梶原源次郎 東別府

一三番

戊子年

大寺文徳丸 沢牟田

一四番

乙丑年

有馬 皆房之村

一五番

以上五回具在前、

礼奠之作法別紙注之、云神慮云天役、不可有怠慢者也、

本田治部少輔宗親在判

右両通、御佐山祭並頭殿神事踊等之濫觴ト相考候、

二七五四

一頭屋神事能ニ付、例年御名代被仰付、若年寄川上嫡家

御役々相詰来候得共、当年ヨリ已来御名代不被仰付、

御用人老人相詰、^⑨法事致差引、御目付・横目之儀モ有

来通可相詰候、其外之御役々都テ被相減、足輕之儀モ

被相減候条、減方致吟味可申出旨被仰渡、

安永五申四月廿二日

二七五五

(二七五四号行間にあり)

朱書

一御納戸奉行ヨリ頭屋神事能ニ付 御名代不被仰付候旨、

御役々被相減候間、致吟味申出趣有之、

吟味之通詰人数被相減、御賄方御料理役者人、是迄之

通相勤候様申付候、

安永五年申四月

(新納久盛)
波門
取次
菱刈係兵衛

二七五六

一御神事ニ付上下町踊之節、已前ヨリ仕来ニテ年寄役並
年行司ハ上下致着来由候得共、自今町役之者共ハ都テ

致麻袴着用候様可申渡候、

天明八申七月

二七五七

一右同断在踊之節、已前ヨリノ仕来ニテ庄屋並在役共次
上下又ハ揃上下致着候儀モ有之由ニ付、自今庄屋ハ麻
袴、在役ハ袴計可致着用、其外ハ袴致着候儀無用可申

渡候、

天明八申七月

(二階堂行智)
蒞

二七五八

宝永六年御証文

一御名代者人

一御家老者人

一御相伴者人

一御用人者人

右、来月中於頭屋神事能有之候ニ付、

但、日限追テ可相究、

一青銅百疋

右、来月廿八日諏訪御祭礼御膝着^⑧シテ御神納候間、如
例可被申渡候、

一御名代者人

一御家老者人

一御相伴者人

一御用人者人

右、来月廿八日諏訪御祭礼ニ付被相勤候、

宝永六年丑六月廿六日

二七五九

文化五年辰三月、御記録奉行吟味被申出候書付之写

一諏訪・稻荷御神事ニ付、一往神前迄供物等相備、頭殿

並在町踊又ハ流鏑馬等都テ御引取被仰付差支有之間敷

哉、致吟味可申上旨被仰渡、左之通御座候、

一 諏訪社之儀、御元祖忠久公御八歳之御時、文治二年、

薩隅日三州之地頭職御補任、同年正月八日、頼朝公以

御下文信濃国塩田庄地頭職被遊御補任、將軍、頼經公

御代、承久三年七月十八日同国太田庄地頭職御給、御

五代、貞久公ニ至リ塩田・太田両庄ヲ併セ被遊御伝領

候、夫故、貞久公御当国御下国之節、信州之本社諏訪

大明神ヲ山門院へ御勸請、総社ニ被遊御崇候段、御家

譜之内歴然被載置、山田聖栄日記ニモ、貞久公御在

国之時者、信濃ニ御下、本社諏訪ヲ懐キ御申、山門ニ

崇メ祝^御申候、同神馬・鷹御スエ御下向、去ニ依テ諏

訪ヲ、道鑑ヨリ已来鷹ノ事ハ御奔走今ニ於テモ在リト

記置申候、

一 六代氏久公之御時、鹿兒島東福寺城へ被遊御移、諏訪

社之儀モ当分之地へ御遷宮、宗廟ニ被遊御崇候、氏

久公御家譜之内、老父道鑑行鹿兒島、於氏久故去山門

院而入部鹿兒島、于時遷宮山門之諏訪大明神鹿兒島、

以宗廟ト被記置候、聖栄日記ニモ、氏久之御時ハ東

福寺之御城屋地セハキニ依テ、先脇ニ御座在リテ、ツ

キ山ニ築キ、主殿作有ヘク候之処、御他界ニヨツテ其

儘被閑候、^(氏久)齡岳之始山門ヨリ鹿兒島御入部、御祈願

ニ山門之御諏訪ヲ移御申、重々茂御信心被成ニヨツテ

正八幡之三御輿ヲ移御申、若宮八幡如此之御神力ヲ

以郷司屋紙ヲ御退治在テ末代御味所^(在カ)ニ成、御子孫御繁

昌被成候也ト記置申候、左候テ、氏久公ヨリ神領余

多被遊御寄進、天下泰平・我門繁昌、殊為遂弓箭素懷

所願如件ト有之、正平十一年十二月十八日御正判之御

寄進状其外、御同人様並、元久公、久豊公、^{宣久公}宣久公

△ 義弘公御判之御寄進状・御合戦御勝利之御願文等

数通、且、^(義弘)龍伯様御代神領御寄附、御家老中ヨリノ御

書付、是又数通相見へ申候、

一 九代 忠国公御代、頭殿・居頭之御神事被相始、頭殿

ハ勅使、居頭ハ上使之心ニテ、七月卷ケ月頭屋之規式

ハ、勅使会釈之儀ヲ相学候、本田信濃守氏親記置候書

付ニモ、祭之日天下之為祈禱頭殿御幣、次為国之祈禱

居頭御幣、次ニ三ヶ国為御祈念、貴久之御幣如此也、

末代迄此旨ヲ存知、島津家ヲ扱者能々可致奔走也、為

子孫書付置所也、永享十年戊午五月七日之旧記ニモ相

見得申候、左候テ、十代、立久公御代、^{朱書、諏訪御佐山祭}寛正六年乙酉

之始、五月祭モ同年ヨリ始ル、一歳ヨリ信州之本社御佐山祭之式ヲ被相始、鹿兒島近在

ヨリ番操ヲ以礼奠之作法有之、此儀当分之頭掛ト相見
ヘ申候、七月廿七日之御祭礼ニチャウ屋神供屋ト申

候テ茅薄ヲ以社地ニ仮屋ヲ作、数多之神供ヲ備、重々
之神秘有之候儀、都テ御佐山祭之規式ニテ御座候、

一 光久公ヨリ佐藤大和ヘ拜領被仰付置候諏訪祭御書物ニ
モ、五月祭・七月御佐山之祭ハ御狩祭ニテ、軍陳尙向

之儀式也、猶更七月ハ揚馬相立、服飾鞍馬之美麗、五
月会ニ超過セリト被記置、格別重御神事ニ御座候、尤、

先年 公義御目付衆ヘ被差上候地志要略諏訪社之条ニ、
例年自七月朔日至同月廿八日祭儀アリト被書出置候者
則此御祭礼之事ニ御座候、

一 稱荷社之儀、御元祖様於住吉御誕生之御時、神明之
擁護有之候儀、御系図御記録者勿論、御領國中普云称

仕、御代々様取分被遊御崇敬来、例年十一月三日流
流馬御神事之儀ハ、惟新様朝鮮御渡海之前年、御無難

ニ御帰陳之御立願被遊置、御帰朝翌年ヨリ於神前流
馬御張行有之候、其節ハ射手人数拾六騎ト御犬追者御

伝受書之内相見ヘ申候、綱大玄院様御代、元禄年間、

公義ヘ被差出候御譜略ニモ、忠久公於住吉御誕生之

御時、末社稻荷大明神冥助之旨趣有之、御当国御下向
御国政之初、先ツ稻荷社被遊御創立、御氏神ニ御崇、

毎年十一月三日流流馬御興行、是又 御当家御吉事之
節ハ白狐相現、朝鮮新塞之御勝利三狐出現之儀共具ニ

被書載置、公辺ヘ茂屹ト相知為申御神事御座候、左
候テ、上馬射手兩人ニ相成候儀ハ中古已来ト相見ヘ申

候得共、何年間ヨリノ儀委相知不申候、
一 在踊之儀、何年ヨリ相勤候儀究テ相知不申候ヘ共、頭

殿神事ニ相付候踊御座候、元和元年六月、惟新様ヨ
リ、家中納言様ヘ被進候御書付之内、来月諏訪御祭礼ニ

テ早晚衆中之踊有之事候得共、当年ハ貴所御留守之儀
候間、衆中踊ハ先被相留、得老中衆ヘ談合申候、乍去

御存分共候ハ、追テ可被仰付候、如其可申付候、百姓
之踊ハ旧例迄ニ小路ニテ踊申候テ可然候半ト申事候迄

之趣、御記録之内相見得申候、右通、元和年間之御書
ニ百姓之踊旧例迄ニ有之候付テハ、其時分最早諏訪御

神事之旧式御座候、先年郡奉行相糺申候処、諏訪御神
事在踊之儀、惟新様朝鮮御帰朝之節五島ニテ稽古被

仰付、於加治木始テ踊被仰付、其後頭屋並御城下御寺々へ踊方被仰付、已前ニハ五島踊ト相唱爲申由、加治木又ハ近在古老之者共申伝有之候、此儀実否ハ相知不申候得共、古昔ヨリ旧式ハ別条無御座候、

一 上下町踊之儀、是又何年間相初候哉、当座へ相知不申、町奉行所ヨリ町役共へ相札申候処、是又発起委細之訳相知不申候得共、六月・七月神事ニテ上町踊之歌並手引面之儀、(光久)寛陽院様御作ニテ今以年々用來、至テ大切仕候段申出候、尤、已前ニハ上下町共頭殿 御城迄相踊候処、其已後当分通御寺々へ被踊来候段、是又申出候、

右之通御座候、諏訪社之儀、御元祖忠久公塩田・太田両庄被遊御領地、右之御由緒ヲ以 道鑑様御代御当国へ御勸請、其已来 御代々様御尊敬被成、就中 氏久公御代鹿兒島(標)総廟ニ御崇メ、忠国公 立久公御代猶又御家御繁栄・御國中御安全之為御祈願、頭殿并御佐山祭之御神事等追々御発起被成置、御当代様迄御十八代、大教及三百七十余ヶ年ニ候御神事、此節御引取被仰付候儀不容易御吟味ト奉存候、鎗流馬之儀、是

以前文通格別之御訳合ニテ、朝鮮御渡海之御時勢旧記等ヲ以抑計候ニ、天正十五年太閤御下向、御家之御危難此時御座候、龍伯様御深慮一筋ヲ以首尾能御和談相調候得共、其後迎モ群疑区々ニテ御領國中安堵之思無之、大軍騒乱、上下疲入候折柄、纔六ヶ年目之早春朝鮮御渡海之事起リ、太分之御国役、貴賤共千辛万苦之御時節漸々御出陳、惟新様御父子栗野城御首途之砌者、異域之御渡海、再御帰朝之期モ不相知、御供之面々老母妻子傍輩之別レ、面々涙ニ沈ミ難儀之形様、旧記之内ニモ相見得、偏ニ神明之擁護等ヲ被遊御頼之外御術計無之、御元祖様御已来之御神へ上下無難ニ御帰朝之御立願、乍恐其時之御実意二百余年之今ニ至リ誠以奉感服候、多年之御在陣中、就中慶長三年十月朔日泗川表之御勝利、異国本朝ニ被拳御名誉、殊更御合戦之半、白狐赤狐之出現、御軍配旁希世之御武功且ハ神助之著明、七ヶ年之御在陣首尾能御帰朝、蘆隅之兩國此時ヨリ全御領地、其已来当時迄無退転鎗流馬之御神事第一、大玄院様御代御家之美目ニ公辺へモ屹ト被 仰出置候付テハ、是以御引取之儀不輕御事ト奉

存候、當時御難決之御時節御座候得共、前条委曲申上候通、上代之格別之御詔合ヲ以無闕如被成来候儀、乍

一 往茂此節御引取有之候テハ、乍恐古来ヨリ御祭式御座之意味相成、被对 御先代様御繼志之程モ薄方ニ相

見へ、次ニハ御国中之人氣モ難計、旁以難被黙止御詔合⑧と奉存候間、何トソ是迄之通、御旧式通被仰付置度

儀ト遮テ吟味仕候、右ニ付テハ在踊之儀、専神事へ相付候儀ニテ、是以 惟新様御代已前ヨリノ御旧式御座

候ニ付、弥当分之通被仰付置、上下町踊之儀モ由緒ハ不分明候へ共、輕キ事ナカラ 寛陽院様御手ヲ被附置

候一筋モ有之、町家・在方等ハ右体之儀却テ競ニモ相成、両踊之儀ハ格別御物雜費迎モ無之事候間、都テ当

分之通被仰付置度儀ト是又吟味仕、此段申上候、以上、

文化五年辰三月五日 御記録奉行

同添役

二七六〇

一 諏訪・稻荷御神事、且五月祭之儀、格別成御神事ニ候

ユへ、已前之通被仰付置、供物等其外之儀ハ不差支様成丈作略減少筋之儀吟味被仰付候条、取シラへ可申出

旨寺社奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

文化六巳三月

(頭娃久翁) 信濃

福昌寺茅負

二七六一

一 福昌寺先年御焼失已後御仮殿ニテ被召置候処、明和五年巳十一月御造立被仰渡候付、左之通、

一来ル十三日・十四日・十五日之間、天氣次第福昌寺大庫理(禮)葺茅、吉野之内帶迫ヨリ 御名代御持下リノ次第、

一 御名代御出立刻限五ツ半時、支度羽織袴、

一 持セ道具、兼テ御名代被相勸候節之通、

一 付役老人、

一 帶迫へ 御名代被為入候場所見合、布屋可相調候、

一 於帶迫被為持候茅一把、吉野庄屋ヨリ御近習役へ相捧、

御近習役ヨリ 御名代へ差上、徒歩ニテ福昌寺迄被為

負、住持並福昌寺總大工耆人当分仮御下乘辺へ罷出、

右茅受取、侍衣寮床之上相備、左候テ、半上下ニ御支

度替、書院へ御着座、福昌寺ヨリ御膳差上、御家老御

相伴、御近習役可相詰候、支度半上下、

但、御配膳表御小姓、

一御家老其外之御役々、帶迫へ差越、茅可負下候、支度

羽織袴、

一福昌寺住持衆僧召列、帶迫へ被差越、茅負下シ、御

名代ヨリ先達テ被罷帰、

一六組之土式百人、御名代御出前以帶迫へ差越居、茅

負候テ御跡ヨリ福昌寺へ可差越候、

一御家老其外諸土迄負下候茅、庄屋ヨリ可相渡候、

一諸士負下シ候茅ハ於福昌寺御普請方筆者着到相付、鎮

守之檀ニ相収、侍衣寮ニテ福昌寺ヨリ赤飯被差出答候、

以上、

明和六丑五月四日

二七六一

一福昌寺御造替之節、先規ヲ以茅被遊御持事候得共、思

召有之、此已後 御前ニハ勿論、御名代・諸士迄モ
無用被仰付候、末略、

安永四未十二月

御関狩御旧式之事

二七六三

一御関狩之儀、已前ハ川辺・谷山・伊集院・吉野・比志

島等諸所ニテ為有之由、当時吉野迄被仰付候、濫觸不

詳候、實久伯圍様御代、実久之与党桑波田何某南郷之城

ニ籠居候節、討手逆瀬川奉膳兵衛ニ被仰付候処、奉膳

兵衛智略ヲ以、正月初狩之姿ニ取捨、偽計ニテ城無口

能落候由、此等御旧式之基共可申哉、

貞享七年生類御憐ニ付仰渡之内ニ、

一毎年正月初被仰付候御関狩之儀ハ、御家御代々有来候

御作法ニ付テ、從 公義不苦旨被仰付候間、御関狩并

於外城正月初土中相催候初狩之儀ハ関狩同前之儀候間、

一度ツ、前々ヨリ有来候御作法ニテ候故御免候間、

旧式不致退転様心掛、行儀專可仕候、取候宍之儀ハ横

目見届、土中ニ埋之、山奉行所へ以書付可申出之云々、

文上下略、

按スルニ、関狩ハ多人數相催候狩ヲ可申哉、関ハ関所
之意ニテ、物ノ往来通行ヲ関留ル儀ニテ、多人數引廻
シ猪鹿ノ往来ヲ関留候ユヘ関狩ト申候哉ト相考候、井
手溝杯ヲセクト申候モ流水ヲセキ留ルヲ申候ヘハ、関
狩モ右之意ニテ可有之候、扱狩之儀ハ第一鳥獸ノ耕作
ノ害ヲ除キ、兼テ武ヲ講シ士卒ヲ鍛鍊スルノ作法ユヘ、
古ヨリ異朝ニテモ天子・諸侯共兎狝之礼ヲ被建置候、
於日本モ 頼朝公富士野ノ狩有之、公義ニハ野州小金
原之御狩有之、 御家ニテハ 道鑑公 齡岳公杯於所々
御狩之儀旧史ニ相見ヘ候、 龍伯様川辺御関狩之節、
大野駿河守依遲參御成敗被仰付候儀モ有之候ヘハ、旁
御軍令之御作法ト相見ヘ候ヘハ、御旧式無御間斷御張
行可有之儀ト相見得候、夫ユヘ 綱久公ニハ毎年何様
之雨天ニテモ無御懈怠御登被遊候ト承伝候、 御初入
部涯御一度ハ御直登リ有之、其余ハ 御名代被仰付候、
尤、年々之惣立モ御時節柄ニ付、近年掛役々ニテ御旧

式迄被仰付候、

二七六四

享保十三年申正月仰出

- 一 御関狩、已前ハ谷山・春山隔年ニ被仰付置候処、其後
吉野壱ヶ所ニ被相立候得共、当年ヨリ又々於谷山・春
山隔年被仰付、鹿兒島六組之儀モ二組ツ、三年ニ一度
罷登候様被仰付、組分并外城掛、左之通、
- 一 三番・四番組、鹿兒島名・谷山・知覽・山川・川辺・
加世田・田布施・伊作・久志・秋目・鹿籠・指宿、
- 右組合、当申年登前、
- 一 二番・六番組、伊集院・喜入・坊・泊・川辺郡山田・
日置吉利・川内山田・樋脇・隈ノ城・郡山・永吉、
- 右組合、来酉年登前、
- 一 一番・五番組、帖佐・蒲生・入来・薩州吉田・隅州山
田・阿多・百次・串木野・桜島・加治木・穎娃・市来、
- 右組合、来々戌年登前、
- 一 右之内、久志・秋目・坊・泊・川内山田・樋脇・隈ノ
城・入来・百次・桜島・加治木之儀、已前谷山・春山

へ不罷登候得共、当年ヨリ三年ニ一度ツ、狩立ニテ惣人数致減少候故、右諸所新規狩立申付候、

一 鹿兒島名之儀ハ狩立被差免置候得トモ、三年ニ一度之

事ユへ、已来狩立申付候、乍然花野村・塩屋村・西田

村・小野村・下田村・吉野村之儀ハ跡々ヨリ御関狩不

罷登由候条、向後共ニ被差免候、

一 已前谷山・春山ニテ御関狩被仰付候節、御名代其外勤

ニ付差越候御役々、御扶持米・送人馬等為被下事候得

トモ、御関狩ハ格別之儀ニテ、組中諸外城共、人役ニ

罷登事候条、御名代ヲ始、御役人・小役人都テ御扶持

米・送人馬等不被下候、

右之通、此節ヨリ被仰付候段被仰渡、

申正月 享保十三年

二七六五

一 関狩之儀、当家古来ヨリ之旧例ニテ、毎年正月相催、

薩摩守不被罷登候節ハ名代被罷登事ニ御座候、城下士

其外諸所へ召置候士等大勢相集、山野相囲弓鉄炮ヲ相

放、其作法有之事ニテ、獵師共仕候狩ニハ相替候、依

之 御先代生類憐被仰渡、殺生之儀領内稠敷被申付候節モ、右関狩之儀ハ格別ニテ候故、猪鹿類ハ打不申、旧例之儀無断絶被申付候、

上使御答書 宝永七年

二七六六

二七六六

一 御関狩ハ、十六代之 太守義久公御代、天正四年近衛

前久公御当国へ御滞在之節御馳走事ト相見得、段々ケ

条書有之候、右之内春山之御関狩ト書記有之候、其節

前久公御一覽之儀ハ究テ相知不申候得共、右通御譜中

被召載置候得ハ、其砌ニモ御関狩有之候ト相見へ候、

一 古老之者共申伝候者、御関狩之旧例ハ、頼朝卿御代

富士牧狩有之候付、御家之儀モ 頼朝卿御子孫之儀御

座候故、御関狩之儀ハ御家ニ相殘候、尤、武備之ナラ

シニテ有之由候、且又 惟新様 中納言様朝鮮御帰陣

之節、寺沢志摩守様・宇久後称五島大和守様鹿兒島へ御見

舞之節、被召列候人数踊有之候付、右之為御返礼 御

家御旧式之御関狩於桜島御張行有之、右御兩人江御馳

走被成候由申伝候、右通古老之者口碑相伝候迄ニテ、

御関狩起候基之儀ハ相知不申候得共、惟新様 中納言様朝鮮御帰陳之時分モ右之通御旧式之御関狩為有之筋ニ御座候へハ、古来ヨリ之御旧式ト相見へ候由、先役共書記置候、

一 右御関狩場所之儀ハ最前吉野ニテ有之、其後伊集院春山又ハ谷山野ニテ有之タル由ニ御座候、尤、寛陽院(綱心)様 泰清院様 大玄院様御三殿様共ニ数度被成 御登、琉球王子被召列見物被仰付候儀モ有之タル由、古老之者共申伝候ト、是又先役共書記置候、

一一 一説ニ古老共申伝候ハ、御関狩・御馬追之儀ハ軍中之習セニテ、御関狩ハ御出陳之御作法、御馬追ハ御帰陳之御作法ト申伝候得共、古書付等ニテハ見当不申候付、此節段々相糺候へ共、右之訳相知不申、依之御包丁人頭方へモ右御規式之次第承合候処、御関狩ニハ御盛塩御引渡有之、御馬追ニハ御盛塩・式御三献之差別有之、右御規式之所ヲ以ハ、御出陳・御帰陳御三献共相見得不申、尤、右通之申伝モ無之由承届候、然共従前々右通申伝儀候へハ、如何様由来有之事ニテ其通申伝候哉ト相考申事候、外ニ老行吉野御牧并御馬追之事有之、

御馬追之場ニ出之、

右、御記録奉行書出之由、年間可糺、

二七六七

一 御旧例之御関狩、御儉約七ケ年内旧式迄被仰付置候得共、程過候へハ旧式之次第取違モ可有之候間、三四ケ年目、年之豊凶次第、有来惣人数立被仰付、御棧數等其外諸事輕ク可被仰付旨、去ル子年申渡置候、依之来辰年有来通之惣人数立被仰付候、

明和八卯

二七七八

一 当年ヨリ七ケ年之内旧式迄御関狩、此已前之通、御用人山奉行付役召列差越候様被仰付候、程過候テハ旧式之次第取違モ可有之事候故、七ケ年之内三四ケ年目、年之豊凶次第、有来通之惣人数立被仰付、御棧數等其外輕被仰付候、

明和五年子九月

但、御用人老人、山奉行老人、山奉行所筆者老人、

山見廻老人、

二七六九

一御関狩之儀、御儉約内ハ旧式迄被仰付、三四ヶ年月目、年之豊凶次第、有来通之人數立被仰付事候間、已来惣人數立之節、御棧敷等鹿相ニ取拵相立候様、且人數モ致減少候様、其外御費無之様被仰付候事、

安永五申三月

御馬追

二七七〇

一御馬追ハ、諸所御牧年々生立候駒取方トシテ御張行之事候処、正徳・享保之頃迄ハ、諸所御馬追惣奉行・申目下知・横目等被遣候筋相見へ候、就中吉野御牧之儀ハ、已前 御名代等被召立候儀御由緒不詳由候得共、鹿兒島并諸郷申目立モ有之、多人數駈引之儀御関狩前之式ニテ、殊馬者武具第一之品ニ候へハ御先代御趣

意有之、御旧式ニ被建置、御覽之式モ為有之事候哉、

当時ハ御儉約ニ付、御名代其外諸御役人御引取ニテ掛役々迄ヲ以被差越候、吉野御牧ハ古来川上家之牧ニ

テ候処、上野久隅代御物江被差上候、于今川上嫡家焼印当初等之式有之候者右之由緒ト相見得候、御名代

被為立候儀ハ由緒不相知由候、或説ニ御国之古、足輕・

中間之格式不相分、惣テ御家中ニテ朝鮮御帰朝之時分ヨリカ、足輕・中間之名目被相立候処、御馬追之節御

家老衆為有之由候得共、御家中之面々ユへ不随下知候付、御名代ト申候へハ各随下知候付、御名代被差

立候由、御国之儀、古来右様之風俗ニ候へハ、左モ有之候哉、然ハ御中間之名目ハ天正年間御陳賦之内ニモ

相見へ候へハ、強テ難信用候、

二七七一

御記録奉行書出之内

一吉野御牧

右、川上家仕立召置候牧ニテ候処、慶長年中、当川上久馬先祖川上上野久隅代、右之牧 家久公へ被差上、

家久公吉野御馬追被遊 御登、久隅モ参上為仕由ニ付、且又慶長九年辰閏八月十九日吉野御牧毛附書寄通、伊勢兵部所持之文書相見へ申候、右ヲ以ハ、慶長年中ヨリ吉野御馬追相初候筋ニ相見得申候、吉野御馬追、中古ニ者 御名代無之、御家老老人・惣奉行老人・川上嫡家御目付式人羽織袴ニテ罷登、御規式無之候得共如旧例可被仰付旨、宝永三年被 仰出置候、左候テ、御家老勤方有之候得トモ若御年寄勤被仰付候旨、享保廿年卯八月相究申候、然者古来 御名代并役々被差越、御規式為有之ト相見へ申候得トモ、何年間ヨリ相初候儀相知不申候、以上、

年間可糺、

二七二

一吉野御馬追之儀、御旧式ニテ 御名代并川上嫡家其外御役々ヲモ被差越事候処、至テ御不如意之砌、万端被加御作略御時節候、中古者 御名代迎モ無之、御由緒之訳モ慥ニ不相知候付、当年ヨリ 御名代不被仰付、若年寄・御用人・御目付・御厩方役々等は迄之通被差

越、其外之御役々等ハ都テ被差越ニ不及候、川上家之儀、御相伴并焼印当初等致来候得共、是又被相止、焼印当方ノ儀、当初迄モ小番ヨリ可勤候、御右筆不被遣候付、毛附目錄御用人座筆者相調、串目下知之儀モ不被差越候間、串目立之諸外城頭役ヨリ不致混乱様致下知、中直手引之者ヨリモ可致差引候、綱面并焼印取次之大番勤方有来通、其外別紙之通被仰付候、

- 一若御年寄 一御用人老人 一御馬方老人
 - 一御目付老人 一金指初小番老人 一御家老座筆者老人
 - 一横目五人 一御用人座筆者老人
 - 一御馬乘三人 一馬医四人 一表坊主老人
 - 一御厩筆者老人 一肝煎式人 一牧司三人
 - 一中直手引廿人 一足輕七人 一御中間六拾人
 - 一惣博勞老人 一人足廿人 一惣鍛冶老人
 - 一平鍛冶老人
- 右之通被仰付候旨被仰渡、
- 安永五申三月廿三日

二七七三

朱書、正徳二年諸所御馬追ニ付、

一出水瀬崎野

種子島平馬

東郷笠山野

北郷宗次郎

伊作野

島津内蔵

右同所串目下知

松崎蔵右衛門・中村早太

鹿屋野

二階堂新五左衛門^①

末吉野

新納舎人

曾於郡春山野

桂太七郎

顯娃野并同所唐船野

伊集院十蔵

加世田野間野

島津又七

市木野

町田郷九郎

出水瀬崎野横目

岩崎金左衛門・内山勘左衛門

右者、来ル廿一日・廿二日天キ次第諸所御馬追被仰付

候^①付、奉行并串目下知・横目役右之人数被差越候間、

往来送人馬・船飯米等諸事如例可被申渡旨御差図ニテ

候、以上、

正徳二(ママ)巳五月

取次
義岡左平太

二七七四

享保三戌十月福山御馬追ニ付

一惣奉行

島津筑後

一高山串目奉行

市成表江差越、当日勤之場所へ差越管候、

伊集院源助

一国分串目奉行

福山之渡リ、当日勤之場所へ差越管候、

島津藤次郎

一末吉串目奉行

恒吉之内坂元村へ差越、右同断、

島津小平太

一市成右同

市成福之山、

島津主水

一踊串目下知

福山江差越、右同断、

比志島兵次郎

一鹿屋右同

牛根之内境村へ差越、右同断、

後醍院半左衛門

一清水右同

福山へ差越、右同断、

黒葛原源左衛門

一都ノ城右同

恒吉之内坂元村江差越、右同断、

若松次右衛門

一大崎右同

市成之内仏山へ差越、右同断、

平田清右衛門

一串良右同

市成之内仏山へ差越、右同断、

肝付五右衛門

一日当山右同

福山江差越、右同断、

松崎善助

一數根右同

福山へ差越、右同断、

高橋喜右衛門

一財部右同

福山之内加例川へ差越、右同断、

左近允与太夫

一垂水右同

牛根之内境村へ差越、右同断、

松崎蔵右衛門

一新城右同

牛根之内境村へ差越、右同断、

中神七右衛門

一恒吉右同

恒吉之内川路山へ差越、右同断、

本田新右衛門

- 一 松山右同 恒吉之内川路山、
へ差越、右同断、
- 一 百引右同 市成仏山へ差越、
右同断
- 一 桜島右同 牛根境村へ差越、
右同断
- 一 高隈右同 市成仏山へ差越、
右同断
- 一 曾於郡右同 福山へ差越、
右同断
- 一 薄辺右同 福山へ差越、
右同断
- 一 福山地頭
- 一 御用人
- 一 御目付
- 一 横目
- 一 御用人座筆者
- 一 惣奉行附役
- 一 御徒目付
- 一 福山地頭附役
- 一 御用人与力
- 一 御包丁人
- 一 御料理役
- 一 毛附役

萩原平右衛門 石原与左衛門 田中孫兵衛
 大山孫市 児玉清蔵 川上十左衛

安藤伊左衛門 桑原八右衛門

前田市左衛門

永井安右衛門

児玉利助

押川喜右衛門

弟子丸半右衛門

伊地知越兵衛

藤井与左衛門

日高権左衛門

高橋七郎右衛門

種子島十左衛門

伊集院七右衛門

相良権太夫

上村茂兵衛

猿渡嘉左衛門

荒武与一左衛門

黒葛原周右衛門

門
 一 荳之口下知 (オロ、權)

汾陽次兵衛 飯牟礼与左衛門 野津惣右衛門

小城吉左衛門 松元兵左衛門 城井長左衛門

木原三左衛門 村瀬孝右衛門 宮里正兵衛

武井清左衛門 川上仲兵衛 敷根重右衛門

相良八兵衛 鮫島市右衛門 二之宮権右衛門

一 足輕十三人

内、十老人荳之口下知、式人御用人方附、老人御目

付附、

右者、来ル十五日福山野御馬追被仰付候付、右人数来

ル十三日ヨリ差遣候条、御賦并往来乗船・送人馬、諸

事如先規可被申渡候、若天氣悪敷、船ニテ差越候儀難

成候ハ、陸路可被差越候条、送人馬等之手当可有之

候、串目下知之儀ハ銘々受取之場所へ直ニ差越事候間、

着船之所ヨリ送人馬等無滞諸事可被申渡旨御差図ニテ

候、以上、

享保三戌十月八日 高橋七郎右衛門

右之通、已前者諸所共ニ被差越候筋相見へ候、其後御

儉約ニ付御引取相成候由、年間追テ可糺、尤、諸所へ被差越候御証文銘々不書載、大概右之振合ニテ候、

二七七五

一薩州様宗信公、福山御馬追為御見物、御船ニテ御光越、

延享二年丑九月十四日

二七七六

一吉野御馬追ニ付、係リ役之外馬ニテ差越候人、御牧内

其外ニテ駈等乗候儀ハ勿論、致往来候節モ見物人等多

人数之事候間、猥ニ乗通候儀共堅留候、左候テ、罷

越候面々口論ケ間敷儀共一切無之、(空白、マ)ナトへ不相障

様万端可相嗜候、

右ニ付テハ、為締横目御鳥見ヲモ被遣候間、町家並末々

之者共へハ、猶又右之趣ヲ以、支配頭・主人ヨリ敷敷

可被申付候、

安永七戌四月

(小松清香)
帯刀

犬追物

御料理頂戴

御膳進上

御祝御能

士踊町踊

椀飯御飾

嘉祥玄豕

四首頭

御吉書御式

犬追物

一養和元年八月廿九日、武衛大庭平太景義ヲ被召出、兵

法ノ故実様々御尋有之、其後仰ニ云、頼朝以微力東国

ヲ征スト云トモ平家未武威ヲ洛中ニ振ヒ、中国・九州

猶彼カ下知ヲ守ル、仍チ源平互ニ相挑ント欲ス合戦ノ

最中ナリ、凡駈合ノ軍ニ候ハ、騎射ノ術ヲ心得スンハ

勝利ヲ得ル事少カラン、我兵ニ騎射ノ術ヲ習シメント

思ウ①習ふニ何ヲ以テセント仰ケレハ、景義御答フ、犬追

物ニ如モノ無之、夫犬追物ハ様々古実②式或ハ法有事ニテ、

景義モ往昔三浦介義明ニ伝授候③し、其起本ハ、近衛院

之侍女玉藻④の前、白狐ト変シテ妖ヲナス、三浦介義明・

上総介広常等ニ詔有之、是ヲカラセ給フ、於是兩人試

ニ走犬騎射ノ術ヲ⑤令習事数月ト云々、是犬追物ノ端興⑥權カ

ナリ、後終ニ此白狐ヲ退治ス、于時久寿二年七月ナリ、

事ハ詳扶桑見聞私記、其後武衛三浦介義澄上総介広常

ヲ召、於鎌倉致興行之、

一 犬追物之儀ハ、忠久於鎌倉被致稽古、此道専ラ弓馬之

故実有之事ニテ、当家代々致伝来、修練不怠、家督相

続ノ節ハ代初之犬追物ト申候テ必ス犬追物被致張行事

ニ候、大隅守光久代、正保三年四月七日、於江戸芝

屋鋪御老中様方致招請被致張行、同四年十一月十三日

於王子村致張行、被備 (家光) 大猷院様御覽ニ候、然処ニ

御先代生類御憐被仰渡候以来右張行ハ無之候ヘトモ、

此道ノ稽古ハ専ラ吟味申付事ニ御座候、

宝永七年上使

二七七九

寛政元酉年上使御答書之内

一 犬追物場所ノ儀ハ竹ニテ埒ヲ結ヒ、其内ニテ仕事ニ御

座候、

一 射手方人数ハ拾二騎ツ、三手ニ分ケ、三十六騎ニテ仕

候、於王子村備 御覽候節モ三十六騎ニテ御座候、

一 右射手方ノ外、検見・喚次トテ二ツノ揃御座候、

一 弓ハ馬上弓、矢ハ暮目ニテ御座候、

以上、

二七八〇

一 安永四末十一月廿一日、天氣次第犬追物就 御覽、御

手当之次第、

一 当日朝四ツ半時、四本御道具ニテ表御門ヨリ御出、稽

古場御成御門ヨリ御棧鋪ヘ可被遊 御入候、

一 御入前以見星付置、川上十郎左衛門ヲ初、射手人数支

度仕居、

一 御成御門内御通筋ヘ並居係リノ面々モ、支度不洗物・

麻上下着用ニテ罷出、可躰居候、

一 御鎗平、御棧鋪外場所見合可相飾候、

一 御棧鋪ヘ御入、

一 御盛塩上ル、

一 御薄茶上ル、

一 御多葉粉盆上ル、

一 御吸物上ル御盃掛、

一 御銚子上ル、

一 御菓子・御煮染上ル、

一 係ノ御家老並射手奉行・執筆・幣之役、御棧鋪次之間

へ相詰、

但、御家老支度不洗物麻上下、射手奉行・執筆支度

⑦素袍・烏帽子、幣之役支度△熨斗目・水干・末広、

一御用掛御用人兩人、御棧鋪次之間へ相詰、

一於御棧鋪 御名代ノ人、支度ノ儘ニテ 御目見可被仰付候、

一御棧鋪次之間へ手組看板相掛、 御入前以、十郎左衛

門ヲ初、射手人数一人ツ、罷出拜見、引取居時刻見合、
看板ノ通射手垣外へ相付相揃候節、 御意次第相初候

様射手奉行ヨリ檢見役へ相達、夫ヨリ 御名代ヲ初射
手人数手組之通垣内へ馬乗入、三手組ノ犬相濟候テ、
最前ノ通垣外へ出ル、

一右相濟於御棧敷 御名代ノ人並係ノ御家老へ御盃可被
下候、

一於御棧敷射手奉行並檢見・射手惣人数・執筆・幣之役
へ両銃子ニテ御通可被下候、

一射手人数ヨリ垣(軽カ)キ杉重一組進上、係御用人ヨリ御供ノ
御近習役へ相付可差上候、

一当日御一門並大身分・御家老、御棧敷於次之間拜見可
被仰付候、

但、支度不洗物麻上下、

一若御年寄・大御目付格マテ狼藉棧敷於上之間拜見、

但書同断、

一寺社奉行已上御役人限、御用不差支面々勝手次第於狼
藉棧鋪拜見、

但書同断、

一御立前以、十郎左衛門・射手人数・係ノ面々、 御入
之節ノ通 御通筋へ可罷出候、

一御婦館後、十郎左衛門ヲ初、射手人数相中ヨリ係御用
人ヲ以、係リノ御家老へ相付御礼可申上候、
一拜見人数、都テ四ツ時可罷出候、

一御一門方御棧敷へ御上リノ節、用心門ヨリ御通融、惣
供廻大門前へ被残置、門内刀番一人・草履取一人可被
召列候、

一大身分・御家老衆右同断ニテ、門内草履取一人可被召
列候、

一若御年寄衆・大御目付格衆、狼藉棧敷へ拜見ニ被為通
候節、稽古所大門ヨリ内練違幕構所ヨリ、与力一人・

草履取一人、与力ノ儀ハ中門へ差扣、草履取ノ儀ハ棧

敷マテ可被召列候、

一 刀ノ儀ハ犬追物御用係座へ可被召置候、

一 寺社奉行以下右同断、大門ヨリ内幕構ノ所ヨリ棧鋪マ

テ無供、

一 刀ノ儀ハ馬見所へ可被差置候、

一 御棧敷詰人数、惣テ用心門ヨリ通融、草履取一人可被

召列候、

一 御先番・御末廻リ・御書院方、惣テ御棧敷へ相係候人

数、出入右同断、

一 都テ惣供廻リノ儀ハ被差通、^⑨相濟候依程合可被召呼候、

以上、

安永四末十月廿六日

二七八一

落穂集

一 或問曰、御家ニ犬追物ト云射芸有之候処、致中絶当分

ハ無之由、何様ノ訳ニテ伝失候哉、答曰、此儀伝失候

ト申事ニテハ無之候、元来犬ノ場ニテ、寄合已上ハ申

ニ不及、心懸アル諸士毎日罷出、稽古有之事ニ候処ニ、

^(綱吉) 常憲院様生類御憐被 仰出、日本国中右ノ御政道有之

候故、犬ヲ射事不罷成、夫ヨリ右ハ稽古相止候処ニ、^⑩

文照院様御代ニ生類憐被差免候旨於江戸被仰渡候、扱

右犬追物ノ儀ハ川上十郎左衛門殿家ニ代々相伝為有来

事候処ニ、新納又左衛門殿御相伝被成、又左衛門殿ヨ

リ島津帯刀殿御相伝ニテ候、^(吉良) 淨国院様御家督已後帯

刀殿屋敷ノ後大屋敷有之候ヲ被召揚、稽古場ニ被仰付

只今只今広小路、帯刀殿御預リニテ島津近江殿^{後大藏殿ト申、}

北郷宗次郎殿・仁礼正膳五殿三人ニ相伝へ可仕旨被

仰出、其外寄合已上ハ不及申、小番人ノ内高持ノ面々

へ犬追物稽古被仰付候、何ケ様二十人計モ有之タルニ

テモ候哉、人数幾人ト申事ハ覚不申候、右稽古場へ每

日揃稽古有之候、然処ニ、有徳院様^{吉宗} 將軍宣下已

後、只今モ犬追物調可申哉ト御尋有之候処、久敷稽古

相止候故伝失、当分ニテハ^⑪調不申由被仰上、則諸人

稽古被相止候、為何御賢慮ニテ右通被仰上候哉、末々

ノモノ不存事候、其後 慈徳院様御代、又々十四五人^(宗信)

ニテモ可有之哉、稽古被仰付候処、無間モ御逝去之故、

其後御免ニテモ候哉、何ノ沙汰モナク罷成候、

一又問曰、川上十郎左衛門殿家ハ何ノ故ヲ以テ犬追物ノ家筋ニテ候哉、又ハ前年稽古被仰付候節、本家ノ事候ハ、三人相伝被仰付候節何ユヘ川上家者右ノ人数ニ被渡候哉、答テ曰、何カ様帶刀殿御相伝ノ訳ヲ以川上家ヲ被除候哉其子細ハ不存候、然ニ流鏑馬被仰付候人、揚馬ノ伝法例年十一月朔日於大乘院、大藏殿・宗次郎殿・正膳五殿三人出会ニテ相伝有来候、大藏殿大御目付被仰付候已後ヨリ御出席無之、其後宗次郎殿ニモ御早世、已後正膳五殿一人ニテ伝法有来候、近キ頃被相果候、今ノ十郎左衛門殿親父十郎左衛門親盈殿流鏑馬被仰付候節、大藏殿御家老ニテ、伝法ノ儀ハ正膳五方ヘ相伝可仕旨、月番御用人座ニテ十郎左衛門殿ヘ被仰付候処、十郎左衛門殿ヨリ、私ノ儀ハ家②付テ犬追物伝法仕居候故、流鏑馬等ノ儀ハ家伝ヲ以仕候ニ付、脇方ヘ受伝法候ニ及不申旨被申出、大藏殿①・宗次郎殿・仁礼正膳五殿三人ヘ犬追物方被仰付、只今マテ右之通候処ニ、如何ノ申分ニモ②、其上家伝ト申候テモ御免無之外々人可仕事ニ無之候間、川上家ヘ相伝候犬追物ノ書物取揚ニ被仰付候条、不殘可差出候、尤、此節ノ流鏑馬射手

モ被御免成候旨被仰渡、畏候由ニテ罷帰、翌日犬追物伝法ノ書物③致切封、御家老衆ヨリ御取揚ト有之候ヘハ、違背ハ不罷成差出申候、然トモ犬追物極意ノ儀ハ殿様御代々ト十郎左衛門家嫡代々ノ外伝受仕間敷旨、御家御代々様ノ御誓詞ニ被相載、教通致頂戴置候間、為御見分差出申候、右御代々様ノ御誓紙ニ右之儀相見得有之儀故、十郎左衛門ヨリ別立子細申上ニ不及、御家老衆ニテモ書物見セ申儀ハ不罷成由、月番御用人座ニテ申出及披露、御家老衆御誓紙御拜見ノ上、切封ヲ押破御覽ノ儀曾テ御成不被成、大藏殿ニモ御手持惡敷、被達 貴聞、④有邦院様被聞召届、御代々様ノ御誓紙ニ無別条被載置候上ハ何様トモ可被仰出訳モ無之、右ノ次第ニテハ外ニ伝受不成事候ヘトモ、大藏殿事数年犬追物方為被仰付置方ノ儀ニ候間、有邦院様御名代ニ、大藏一代マテニ相伝可仕旨被 仰出、十郎左衛門奉畏、大藏殿一代相伝為有之由、勿論御取揚ノ書物ハ如本被返⑤、已来流鏑馬伝受等モ川上家ト正膳五殿兩人ニト有之、正膳五殿死去ノ後ハ川上家ヨリ相伝有之候、

一 犬追物ノ儀ハ、川上家先祖川上十郎左衛門入道道安事、

御家十代 忠国公ヨリ御相伝有之、犬追物ノ名人ニテ

京都將軍時代京都マテモ相聞得候射手ノ事ニ候処ニ、

於京都小笠原流ノ犬追物有之由相聞得、見分ニ被遣度

候得トモ、俗体ニテ難被為登時節故、僧ニナシ御登被

成候此人勢少ク、世上ヨリ小僧ト申習候故京、將軍家ノ御所方

ニモ薩州ノ島津小僧忍テ登居候由相聞得、内々御詮義

有之候ヘトモ、随分被相忍居、御尋出得ラレス、折節

犬追物有之故、小僧此見物ニ出サル事ハ有マシキトテ、

其場ノ下知人共ヘ氣ヲ付見出候様ニ被仰合置候ヘトモ、

行脚体ノ様子故見出得ス候処、小僧小用ニ被立候跡ニ

替タル矢有之、諸見物感入居候処ニ小僧用事仕廻見物

場ヘ被立帰、見物人共ヨリ只今珍ラシキ矢有之候由ニ

テ咄候ヘハ、小僧大キニ驚キ、今日終日詰居候ハ万一

右之矢カ可有之ト存罷在候、夫社日陰ノ矢ト申物ニト

ヲ不致見物、残念ノ由被申候得ハ川上家ノ伝ニハ右ノ矢ヲ

夫故糺有之候、名乗ノ由申伝之由候ヘハ、是社正説ニテ、其節

可有之候得トモ、古キ書付ニ如本文記置候モ有之故記置候、
下知人日陰ノ矢ヲ修行者抔ノ可存様無之、其方ハ薩州
ノ島津小僧無紛者ト見得候由被問届、難遁被名乗、將

軍 義尚公御前ヘ被召出、御望ニテ犬追物被仰付候処

ニ、小笠原流射芸ヨリモ勝レテ見得、別テ御褒美有之、

御所黒ト申御馬一疋・花頭巾一・末広ノ御扇子ニ犬追

物ノ絵有之 義尚公御自筆ノ御讚有之ヲ拝領被仰付、

御名乗ノ字被下之、義久ト名乗被申候由、右ノ故ヲ以

子孫代々犬追物伝法ノ家ニ罷成、代々之 殿様ヨリモ

御誓紙被下、御稽古被遊来候由、川上十郎左衛門義久

ト為申人ニテ候ヘトモ、犬追物射手ハ本名ヲ名乗故実

ノ故、島津之 名乗候由、武芸ノ家ニモ有之候ヘトモ、

川上家ノ犬追物伝法ノ様ニ髓ニ為伝武芸ハ三ヶ国外ニ

ハ有之間敷候、

一 犬追物始リハ、昔 鳥羽院ノ御宇ニ玉モノ前ト申上童(上藤カ)

有之、帝御遊ノ節、折節秋ノ末ナルニ、サムキ山風

ニサソハレ御前ノ灯シ消ヘ、雲ノ上人立サワキ、灯明

得ト進ムレハ、玉藻之 前カ身ヨリ光ヲアラハシ、画図

ノ屏風萩ノ戸晴ノ夜ノ錦ナリシカト、サナカラ昼ノコ

トクナリ、夫ヨリ 帝御悩トナラセ給ヒシニ、阿部ノ

安業占ツテ、是玉モノ前カ所為ナリト申、則安業玉モ
ノニ御幣ヲ持セ折リケレハ、玉モ御幣ヲヲツトリ、八

足ノ狐トナリ飛去、下野ノ国ニ逃去、那須野ノ原ニ隠レシヲ、常陸介・上総介へ 勅使立テ、那須野ノ化生ノ者ヲ退治セヨトノ勅ヲ請、野干是犬ニ似タル^⑧ハ犬ニテ稽古有ヘシトテ百日犬ヲ射タリケリ、是犬追物ノ始ナリ、本ヨリ狐ハ数万騎那須野ヲ取囲、草ヲ別テ狩リ出射候処ニ、死体則石ト成、生類ノ命ヲトリシヲ、玄ヲフト云シ出家大キ成鉄ノツチヲ作、引導シテ打割シヨリ相納候由、石切モ是ヨリケンヲフトイイ、ツチヲ以大石割基トナリ候由、右両介カ狐退治ニ稽古セシヨリ^⑨關東武士犬追物ヲ伝へ、鎌倉御代殊盛カンニ犬追物有之、御元祖忠久公以来鎌倉御在任ノ故相伝リ、御当国へ専有之、寛陽院様御代正保四丁亥年、江戸王子カ原ニシテ、御家中衆ノ犬追物ヲ 家光將軍様被備 上覽候、此委細ノ儀ハ犬追物ノ書トテ判行ニ出有之故略ス、

以上、

二七八二

正保四年丁亥十一月十三日、 將軍御上覽ニ付、 光

久公武州王子原ニテ犬追物被遊候射手人数

上手組、犬七疋、放中矢三、其手組ハ鬪取ニテ定、

榊山 新納
島津諸右衛門一疋 島津四郎左衛門

鎌田又七郎 種子島為兵衛一疋

本田甚兵衛 福屋助左衛門一疋

上井采女 肝付半兵衛

島津弥一郎 寺山 島津又右衛門

吉田長次郎^(四) 本田休左衛門^(八)

川上 檢見島津十郎左衛門入道 喚次島津源左衛門^(七)

次手組、犬同、中矢同、

島津市正 島津中務

平山 島津源助二疋^(八) 山田弥九郎

島津七兵衛 榊山 島津長門

北郷 本田六左衛門 仁礼左近

島津作左衛門 比志島 村上左京

新納 入来院石見 村上内記一疋

檢見島津又左衛門 喚次島津作太夫^(佐大夫)

下手組、犬同、中矢同、

島津安芸一疋

川上
島津上野

又 御所ニ報スル役也、

島津主計

伊勢兵部

平田兵十郎

北郷
島津又次郎

柏原弥左衛門(本右衛門)

菊池太右衛門

御膳進上

種子島次郎右衛門二疋

新納
島津縫殿一疋

川上
島津助六

本田(右衛門)
大右衛門

二七八四

(後見)島津又左衛門

喚次島津(左大夫)
作太夫

一来ル廿七日、諸士相中ヨリ御膳進上、御能備 御覽候

射手組、犬十疋、中矢五

伊勢兵部

段、先達テ申渡通ニ候、月次御礼罷出候面々、熨斗目・
麻上下着用ニテ五ツ時罷出可相詰候、家督ノ面々ハ昼

島津市正一疋

種子島為兵衛一疋

一度御賄被下候、

種子島次郎右衛門一疋

島津七兵衛一疋

一寄合已上ノ二男三男・寄合並ノ嫡子、御能見物被仰付

島津又右衛門一疋

島津主計二疋

候条、麻上下ニテ可罷出候、

島津上野

村上左京

一御城内勉ノ筆者・小役人へモ見物被仰付候間、麻上下

村上内記

島津安芸

着用可致候、

福屋助左衛門

喚次吉田(久)
吉兵衛

右之通表方へ申渡、御側方・御勝手方へハ写ヲ以可相

検見島津又左衛門

達候、

寛延四未九月

二七八三

(島津久品)
主鈴

(二七八二号行間朱書)

一 検見ハ、射タル家ノ犬ヲ監察シテ、矢ノ中ルヤ否ヤヲ

考フル役ナリ、喚次ハ、検見ヨリ中リタルヲ云タル時、

二七八五

- 一 来ル二十七日、諸士御膳進上ニ付、座分左之通、
- 一 島津玄蕃殿へ御近習番所上之間ニテ御膳被下候、
- 一 大身分へハ於梅之間御膳被下候、
- 一 一汁三菜、外ニ香物
- 右、大御目付已上独礼・寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭、一所持ヨリ寄合並マテ、御家老座、
- 一 一汁二菜、外ニ香物
- 右、御側・表御用人ヨリ納殿役人マテ、御用人座、
- 一 一汁一菜、外右同
- 右、御普請奉行ヨリ無役ノ中通マテ、御使番役所・御目付役所ノ間、
- 一 一汁一菜、外右同
- 右、役係リ並御能方人数都テ、
- 右之通、御取替ヲ以被下候、足輕已下賄ノ儀ハ先例ヲ以可申渡候、

九月

主給

二七八六

- 一 九月二十七日、諸士御膳進上之次第、
- 一 御門内外立番張番、先例之通、
- 一 御床御棚飾、先例之通、
- 一 御対面所へ五ツ半時 御出座、
- 一 御出座前、御相伴備中殿・周防殿中段之間主位之方頭 二疊目着座、
- 一 御出座前、松之間・芍薬之間・杉之間・菊之間イツレモ罷出可罷居候、
- 一 御出座、御家老・若御年寄・大御目付中段中程罷出、御相伴人へ向、今日ハ御膳被召上難有奉存候通可申上候、其節御相伴ヨリ御執成有之候、御目掛相詰候面々並御能見物ノ面々マテ一同御礼可申上候、
- 但、御相伴御家老・若御年寄・大御目付支度熨斗目・長上下、年頭熨斗目着用ノ御役々ハ熨斗目・半上下、其外半上下・十徳、
- 一 寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭、一所持・同格・寄合、松之間・芍薬之間可相詰候、
- 一 御縁類詰例之通、

一 御熨斗上ル、

一 御茶上ル、

一 御熨斗下ル、

一 御能ノ御床机御免、御能支度(空白、徒カ)ヨリ相勉、

一 ④空焚香炉、二出ル、

一 御能三番目マテノ内孝行之間へ被遊 御入、御タハコ

盆・御菓子・御染物・御茶上ル、御相伴ニモ御前同前

御染物・御茶出ス、

一 御能三番・狂言マテ相濟、

一 御中入前、於敷舞台柏源右衛門へ巻物拝領、進物番持

出、奏者番ヨリ可為致頂戴候、中西政次郎・有川仁平

太へハ於樂屋拝領、右同断、

但、奏者番・進物番熨斗目・半上下、

一 御能方人数へ青銅百疋ツ、被下候、

一 御中入、

一 於御書院二汁三菜ノ御料理、

一 御膳木具ニテ上ル、御相伴塗、御配膳御小姓熨斗目・

長上下、御引物御家老ヨリ差上ル、御膳半御相伴マテ

御家老兩人罷出、御挨拶可申上候、

一 御引着御家老ヨリ差上可申候、

一 御吸物上ル、

一 御銚子三篇目島台上ル、御土器被召上候節御家老ヨリ

御肴被差上候、右御盃塗台居ヨリ下六枚目④之頭へ相下、

御家老へ 御盃頂戴、御肴被下、直同席ニテ御流、御

家老・若御年寄・大御目付頂戴、御肴從御相伴可被相

勉候、

一 御湯上ル、

一 御菓子上ル、

一 御後菓子上ル、

一 御薄茶上ル、

一 右畢テ御対面所へ 御出座、

一 御能初ル、

一 御出座ノ節、最前之通可相詰候、

一 進上ノ御折、表御小姓御中段へ持出ル、奏者番披露、

此時 御目掛相詰候面々平伏可仕候、

但、右御折表御小姓披之、 御前へ相詰候面々ニモ

被下候、

一 御能相濟、御家老・若御年寄・大御目付最前之通罷出、

御相伴へ向、御機嫌能御膳差上、御盃御流頂戴被仰付、難有奉存候通御礼申上候節、御相伴ヨリ御取成可有之候、

一 右畢テ 御入、

一 御家老・若御年寄・大御目付、御近習番所へ罷出御礼可申上候、

一 御後段、於御休息所 御意次第可差上候、

一 島津玄蕃殿並大身分へハ御膳^{②下}被下候、

一 寄合已上ノ二男三男・寄合並ノ嫡子並月次御礼罷出候

面々、御能見物、

一 諸御役人其外^{①御家内}勉ノ面々、菊之間・松之間ヨリ御能見

物、

以上、

寛延四未九月

二七八七

寛政元年酉^④△

一 一昨四日、御膳進上被仰付候大身分・寄合並諸御役人家督ノ面々、為御礼来ル九日四ツ時登城、於席々謁

可被申上候、

但、江戸へ兼テ御礼等被申上来候面々ハ、今月御使便ヨリ 中將様へ御礼可被申上候、

一 右同断、家督ノ家督並諸組与力、同日四ツ時登城、

御帳ニ相付御礼可申上候、

右之通、御両殿様へ御礼可被申上旨表方へ致通達、

奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政元酉十一月五日 (市田教園) 勘解由

二七八八

一来月四日御膳進上被仰付候ニ付、大身分・寄並諸御役人詰衆当日御膳進上仕候面々、為御礼御能濟於席々謁

有之、

但、芍薬之間縁頼謁相濟候テ、無役ノ大身分等同席

ニテ謁、

一 為御礼、右面々並諸士与力、大目付以上へ可被致廻勉

候、

但、小番・新番・御小姓与等不込合様、随分日割等

ノ儀、夫々支配頭ヨリ差図可有之候、

右、可致通達候、

寛政元年酉十月

(島津久金)
伊賀

二七八九

一来ル四日御膳進上ニ付、御城内ハ勿論、諸座都テ書役・小役人等マテ、麻袴又ハ十徳着用ニテ罷出候様可申渡候、

酉十一月朔日

右之通被仰渡候間、致通達候、以上、

酉十一月朔日

松崎次左衛門

二七九〇

寛政元年酉六月

一御初入部御祝御能並御膳進上ノ節ハ、
一御対面所、御掛物三幅対、立花二瓶中央卓、御棚飾、
右ノ振合ニ被相定置候、御書院モ可準之候、
右之通被仰出候条、可申渡候、

六月

(喜入久福)
安房

二七九一

齊宣公御初入部ニ付

大身ヲ初諸士マテ御膳進上並御能備 御覽候御手当
一御一門方・諸大身分・寄合並・御側役以上・諸地頭、
着服熨斗目・長袴、其外兼テ熨斗目致着用来候面々ハ
熨斗目・半袴・十徳、
一御城内勤ノ書役・小役人並給仕ノ御小姓与、麻袴、
一御対面所、御簾都テ垂、御上段ノ御縁頬不残並御中段
末ノ一間卷之、

但、御上段涯御左ノ^方、松之間ヨリ御上段見越候故、

御屏風角掛ニ立置、松之間ノ面々 御目見畢テ御屏
風松之間ノ方へ引、

一台子之間屏風構、御一門方可為休息所候、右下へ同断
相仕切、島津左衛門可致扣所候、

一御菓子

但、御染物相付、

一御茶

島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿
右、於休息所被下、

一山吹之間・柳之間・鴨之間差支候付、御番頭並詰衆ハ

大番頭座、小番ノ御番人ハ使者支度所、新番並御小姓

与ノ御番人ハ御讓御道具等御兵具所へ相直可相詰候、

但、御番人ノ儀、兼テ御座向夜廻等致来候分ハ掛テ

可相勤候、且諸御役所等鑰箱ノ儀、小番詰所へ相直、

受取渡可致候、

一椿之間

島津玄蕃殿

給仕表御小姓、

一右同仕切

島津左衛門

給仕表御小姓、

一水仙之間

島津美濃・島津凶書・島津筑後・島津出雲

給仕御小姓与、

右、御料理之内被下、

張紙

本ノ水仙之間差支候付、御側御用人座取扱、座ヲ構、

水仙之間ノ場被成、

一芍薬之間縁類

大番頭ヨリ当番頭マテ

給仕御小姓与、

一山吹之間・菊之間

一所持ヨリ寄合・同嫡孫

給仕御小姓与、

右、一汁三菜ノ料理、

但、香ノ物外、

一御用人座取扱、座ヲ構

御用人ヨリ寄合並寄合並ノ嫡子、大身分二男以下月次

御礼罷出候面々、直触

給仕御小姓与、

右、一汁二菜ノ料理、

一柳之間・四季之間、襖ヲ迦シ一席ニシテ

御作事奉行以下御役人限

給仕同心、

一鶯之間・雉子之間

役掛小役人等・御能方

給仕同心、

右、一汁一菜ノ料理、

但書同断、

一 御家老・若年寄・大目付

右、於奥一汁三菜ノ料理、

▽但書同断、△

一 御側御用人・御側役・無役ノ御近習通

右同断、直触已上ハ一汁二菜、其以下一汁一菜、

但書同断、

右之通、御取替調、同心已下賄ノ儀モ先例之通、

一 杉重一組

一 樽一荷

右、御膳上之面々相中ヨリ楽屋へ遣候付、御取替調、

以上、

二七九二

寛政元酉十一月

大身分ヲ初諸士マテ御膳進上並御能備 御覽候御次第

一 御対面所へ御出座、 御先立、

一 島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

右、御上段御縁類ノ方ヨリ出座 御目見御礼被申上、

御家老御取合、 御意有之、又御取合有テ退座、

一 島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後・島津出

雲

右、同御中段御闕涯へ罷出同断、御家老御取合、 御

意有之、又御取合有テ退座、

一 御家老・若年寄・大目付

右、一役ツ、一同罷出同断、畢テ御簾垂之、

一 孝行之間へ 御渡座、御襖開之、

一 大番頭ヨリ当番頭マテ無役大身分・寄合並マテ諸御役

人

右一同、松之間・芍薬之間・同縁類ヨリ末へ並居 御

目見、御家老御取合、畢テ御襖閉之、

一 御中段御縁類並御舞台涯・松之間・芍薬之間、御簾卷

之、御屏風モ松之間ノ方へ引、

一 御対面所へ 御着座、御上段御簾揚之、御能初伊勢播

磨、

一 御中段御縁類、御一門方

右同末、島津左衛門

張出上ノ席、島津美濃・島津凶書・島津筑後・島津出雲、

松之間・芍薬之間・同縁頬末へ並居、大番頭ヨリ当番頭マテ無役ノ大身分・寄合並ヨリ諸御役人

竹之間、直触已上諸御役人
右於席々相詰、

御中入

一 御書院へ御着座、 御熨斗 御茶、

御相伴、島津若狹殿・島津兵庫殿・島津備前殿

一 御膳 御二 御三 御向 御台引

若狹殿

一 御三献^⑨ 御引肴

兵庫殿

一 御島台 御肴

一 御盃被召上、若狹殿御肴被差上之、御加有テ其御盃御

上段御闕涯ヨリ二疊目^⑩ニ置之、同三疊目ニテ若狹殿

頂戴、御肴△被下、加有テ御返盃、

一 島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

右、順々御盃並御肴被下、イツレモ御返盃、其御盃二

疊目ニテ上席ノ御家老へ、

一 御家老・若年寄・大目付

右、順々頂戴、銘々御肴被下、加有テ末席ヨリ御盃持下ル、

一 御湯・御菓子・御濃茶・御後菓子・御薄茶
一 椿之間

島津玄蕃殿

給仕表御小姓、

一 屏風仕切

島津左衛門

給仕御小姓与、

一 水仙之間

島津美濃・島津凶書・島津筑後・島津出雲、

給仕御小姓与、

右、御料理ノ内被下、

一 御対面所へ 御出座、

一 御能相済候テ御上段其外御簾等如最前垂、御屏風モ立、

一 島津若狹殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

右、出座御礼、都テ如最前、

一 島津左衛門・島津美濃・島津図書・島津筑後・島津出

雲

右同断、

一 御家老・若年寄・大目付

右、一役ツ、同断、

一 大番頭以下無役大身分・寄合並等

右同断、

一 孝行之間へ御渡座、

以上、

二七九三

御家督御初入部為御祝御能御手当

寛政元酉十一月

一 椿之間

島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

給仕表御小姓、

一 屏風仕切

島津左衛門

給仕表御小姓、

右、一汁三菜ノ御料理被下之、

但、香物外、

一 御家老・若年寄・大目付

右、於奥同断被下之、

一 御番頭已上諸大身分・御用人・町奉行・寄合並、松之

間・芍薬之間、直触已上、竹之間、御作事奉行已下、

張出杉之間・菊之間へ相詰、

一 御一門方・諸大身分・寄合並・御側役以上長袴、其外

諸地頭並諸御役人半袴・十徳、

一 御対面所御中段御右ノ方御縁類御畳鋪付可申候、

一 掛ノ小役人等御能方人数へ一汁一菜ノ御賄被下候、同

心以下賄ノ儀モ例之通、

以上、

寛政元酉十一月

御料理頂戴並御盃同

二七九四

天明七未正月

一 御初入部ニ付御料理被下候節、又ハ何ソニ付屹ト御料

理被下候節ハ、左之通、

一 江戸中之間 御国元椿之間

御一門方

給仕表御小姓、

一 江戸中之間 御国元椿之間

島津左衛門

給仕右同断、

一 江戸角之間 御国元水仙之間

美濃・図書・筑後

給仕御小姓与、

一 奥

御家老・若年寄・大目付

一 芍薬之間

一一所持已下寄合並已上

給仕御小姓与、

一 奥

御側御用人已下奥向並御近習通ノ面々

一 梅之間

直触已上ノ表御役人

給仕御小姓与、

一 芍薬之間縁類

直触已下表諸御役人・御一門方付ノ諸御役人格

給仕同、

一 鋪舞台

小番・新番・御小姓与・書役・小役人

(給) 宮仕同、

一 山吹之間縁類

諸与力

(給) 宮仕同部屋栖、

右之通、已来被相定候旨被仰渡、

天明七未正月

二七九五

一 正月十一日御鎧餅ノ汁頂戴ノ席、以来左之通被仰付候、

一 梅之間

大目付以上

一 芍薬之間縁類

大番頭ヨリ詰衆マテ

一 竹之間

御側御用人ヨリ御右筆頭マテ

右外御役人ノ儀ハ当分之間、雉子之間詰合之諸士ハ於

驚之間頂戴被仰付候、

一 溜之間

大目付以上

一 同次之間

大番頭ヨリ御番頭マテ

一 伺公之間上

御側御用人ヨリ御右筆頭迄

一 同次之間

諸御役人

一 大溜之間

御殿詰合ノ諸士

右之通、於江戸頂戴被仰付候、

右之通申来候旨被仰渡、

天明六年午十二月六日

(喜入久福)
安房

(二五八五号文書に同じ)

二七九六

一 御鎧御祝ニ付、近年餅ノ汁マテ被下候ヘトモ、当年ヨ

リ左之通、

一 餅ノ御汁・向ニユテ矣

一 御酒

一 魚ノ吸物・御酒

右之通、御家老座・大御目付座・御用人座ニテ御祝頂

戴ノ人数へ被下候、

一 餅ノ御汁・ユテ矣

一 御酒一篇

右、驚之間ニテ御祝頂戴ノ人数へ被下候、

右之通被仰渡、

宝曆十二年正月七日

二七九七

一 正月十一日御鎧御祝ニ付餅ノ汁、於大目付座大目付・

御番頭已上へ被下來候へトモ、格別ノ御役席候間、以來左之通被仰付候、

一於大目付座、大目付へ餅ノ汁被下候、(給)宮仕表坊主、

一於大番頭座、大番頭ヨリ詰衆マテ同断被下候、

右之通被仰渡、

天明六年午正月

二七九八

一年頭又ハ何ソニ付諸御役人並諸士へ御酒被下候節、御肴被下候へトモ、以來御酒計被下、且是マテ諸御役人・

諸士へ御酒被下候節、塗杯等ニテ被下候へトモ、以來

土器ニテ被下候旨、被仰出候段被仰渡、

天明五巳正月

二七九九

正徳元年

一被召上候御土器ニテ段々幾人モ御流頂戴仕候儀ハ、御

盃ノ御流、

一被召上候御土器ノ御酒ヲ御提子ニ相移、土器ハ不被召

上土器ニテ御流被下候儀ハ、御流ト可相心得候、右之通被仰渡、

正徳元九月

右兩様唱分ノ様ニト被^⑨仰出候ニ付、被下様ノ儀御家

老中被仰談候覺

一御盃ノ御流ハ、初ニ被下候人ハ御盃ノ儀ニ候故、御盃

頂戴ノ通ニ可仕候、二番目ヨリハ御土器ヲ戴候マテ、^⑩

ロニ付申ニ不及、末々マテ頂戴可仕候、

一御流ハ被召上候御酒ノ御流ニ候へハ、最前ニ土器ヲ戴

ニ不及、尤、ロニモ付不申、御酒ヲ請候テヨリ戴申被

下可申候、

右之通、^(島津久寛)主殿殿ヨリ大目付要人殿へ御達有之、

二八〇〇

一寛延四年未九月、琉球小祿王子ヨリ於御書院二汁六菜

ノ御膳進上有之、右ニ付、寺社奉行ヨリ御側御用人・

御近習役・御納戸奉行マテ於御用人座二汁三菜、御小

納戸ヨリ御側医師マテハ御使番座ニテ一汁三菜、親雲

上以下ノ琉人虎之間ニテ一汁三菜、御城内へ相詰難迦

諸役人・筆者・小役人雉子之間ニテ一汁三菜、一身者
其外手伝・宮仕等(給)触役所ニテ一汁二菜、御物御取替ニ
テ被下候、

未九月

二八〇一

一寛延四年未九月廿三日、今度初テ 御下国ニ付、御膳
進上並御料理被下候儀、左之通、

一御一門ヨリ納殿役人マテ一汁三菜、御普請奉行已下一
汁二菜、御料理可被下候、

一御能可被仰付候、

一同廿五日、諸士へ一汁二菜御料理可被下候、

一同廿七日、諸士ヨリ二汁三菜ノ御膳進上被仰付候、

一御能可奉備 御覽候、

一同二十九日、御当地へ罷在 御目見被仰付候寺院並山

伏、於護摩所一汁三菜ノ御料理可被下候、

右之通被仰渡候、

未九月

二八〇二

一琉球人、親方以上ハ三位以上ノ位階ニテ候故、御料理
被下候節三方ニテ被下候旨被仰渡、

正徳四年八月二日

二八〇三

一重豪公御家督初テ就 御下国、御膳進上並御料理被下
候儀、左之通、

一來月四日、御一門ヨリ納殿役人マテ二汁三菜(二カ)、御普請
奉行以下諸御役人一汁二菜ノ御料理可被下候、

一御能可被仰付候、

一同六日、諸士へ一汁二菜ノ御料理可被下候、

一同九日、諸士ヨリ二汁三菜御膳進上可被仰付候、

一御能可奉備 御覽候、

一同十三日、御当地へ罷在 御目見被仰付候寺院並山伏、

於護摩所一汁三菜ノ御料理可被下候、

右之通被仰渡、

宝曆十一年巳十月廿五日

二八〇四

寛延四年未九月△

一来ル二十五日、組中ノ諸士へ御家督御任官御祝ニ付御料理被下候、屹ト上ヨリ御料理被下事候条、部屋栖ノ者ニテモ当分定筆者・小役人相勤候人ハ人体同前ニ御料理被下管候間、夫々ノ座々ヨリ一紙名書ヲ以、来ル十九日限ニ可被申出、御料理被下候ニ付テハ大御目付以上へ即日ヨリ兩三日ニ相懸リ御礼相廻候様被仰渡候間、右之趣ヲ以奉行・頭人ヨリ早々被申渡、右日限無滞名書可被差出候、此旨御差図ニテ候、以上、但、家督ノ者又ハ部屋栖ノ者ニテモ、小与頭相勤候者へ御料理被下候段ハ与頭ヨリ被仰渡候、士ノ儀モ同断、

未九月十七日

島津権左衛門

蒲生十郎左衛門

二八〇五

一御用人ヨリ納殿役人マテ御料理被下候儀ニ付、御次第書ノ内、

一御用人座へ、御側御用人・表御用人・町奉行・御近習

役・江戸京大坂御留主居・御納戸奉行・物頭・御守殿

保御用達・御船奉行・御使番・納殿役人・同格・近藤

七郎左衛門へ、一汁三菜御料理・御銚子三篇・御菓子・

御濃茶・御後菓子・御薄茶被下、町奉行以上支度熨斗

目・長上下、其外ハ熨斗目・半袴^⑦、給仕寄小姓支度半

上下、

一御用人座ニテ御料理被下候面々、御側御用人ヨリ納殿

役人マテ、

一御使番役所ニテ御料理被下候面々、御小納戸役ヨリ御

側医師並小坊主マテ、

一郡方ニテ御料理被下候面々、御普請奉行ヨリ御春屋役

マテ、

右之通、御座分ニテ御料理可被下旨、先達テ被仰渡置

候処ニ、夫々ノ座々ヨリ名書一紙ヲ以被申出候通、明

後二十三日五ツ時前被罷出、御料理頂戴可被致候、

此旨主鈴殿御差図ニテ候、已上、

未九月廿一日

島津権左衛門

二八〇六

一 正月十一日 御鎧ノ餅被下候節、御酒被下来候処、御
候約中不被下候ヘトモ、格別成御祝ニ候間、江戸御國
元共御酒可被下候、

右之通被仰付候条可申渡候、尤、御式迄ノ事候ニ付、

猥ニ御酒不取散様、於向々可致取締候旨ヲ以可申渡候、

寛政二年戊三月

(島津久祖)
求馬

二八〇九

寛政八辰

但、相残候面々、日限ハ追テ可申渡候、

寛政元酉十一月十六日 伊賀

御料理頂戴

二八〇七

一 今般初テ 御入国ニ付、来ル六日御能見物・御料理頂

戴被仰付候旨被 仰出候条、当日登 城可被致候、

寛政元酉十一月

(島津久金)
伊賀

一来ル十五日、大宜見王子へ御能見物・御料理被下候間、

御目見仕候人数召列登 城可有之旨、前日館内へ御使

番 上使ヲ以可被 仰出候、

一 右ニ付、王子為御請則日登 城、於敷舞台調、奏者番

退去、掛御用人・御目付出迎、杉之間へ案内、其外茶・

タハコ盆出候儀例年之通、

右之通、御使番勉方申渡、可承向々へ不洩様可申渡候、

辰八月

(二階堂行誓)
河内

二八〇八

一 今般初テ 御入国ニ付、諸与与力・同部屋栖ノ内御番

並番代定役ノ面々、来ル二十五日御能見物・御料理頂

戴被仰付候旨被 仰出候条、諸与ヨリ半分程罷出候様

支配頭申談、二十五日罷出候面々ハ夫支配頭於宅可申

渡、

二八一〇

為参府上国之王子其外へ御能見物・御料理被下候手

当

一 御対面所御床棚飾其外御座向等先例之通、

一 席詰御役々例之通、

一 相掛候御側役已上長袴、其外麻袴、

一 王子へ被下候御料理三汁九菜、薄盤、給仕表御小姓、

一 親方並親方格ノ親雲上へ三汁七菜ノ御料理出ル、切足、

但書同断、

一 親雲上・楽童子へ二汁六菜御料理出ル、切足、

但書同断、

一 御次第書別紙之通、

右之通、向々へ可申渡候、

辰八月

(二階堂行智)
河内

二八一

為参府上国之王子其外へ御能見物・御料理被下候次

第

一 大宜見王子登 城之節、虎之間階上へ掛御用人・御目

付出迎、虎之間へ案内、(原註「スキ敷」杉之間か)其外琉球人虎之間脇ヨリ罷登、

御目付案内ニテ虎之間へ差通、両席トモ茶・タハコ盆

出ル、給仕表坊主、

一 御対面所御中段末ニ御簾、御出座前以垂之置、

松之間、大番頭・寺社奉行・御勘定奉行・御小姓与番

頭・当番頭・掛御用人、

芍薬之間縁類末ヨリ竹之間ニ掛、御用人ヨリ直触御役

人限、

右ノ席々へ相詰、

一 杉之間へ御家老一同出席、挨拶通詞伝之、

一 御対面所 御上段へ 御出座、御先立、

一 正使 大宜見王子

右、御縁類ノ方ヨリ通詞相添罷出、御上段御敷居ヨリ

下二畳目ニテ御祝、奏者番披露、夫へト 御意有之、

其旨月番御家老ヨリ通詞ヲ以伝之、同御右之方二畳目

へ着座、通詞ヲ以今日ノ御礼被申上之、月番御家老御

取合、重テ 御意有之、其旨月番御家老ヨリ通詞ヲ以

申上之、御家老御取合有テ、王子ハ其儘罷在、通詞ハ

相退、御中段御縁類御杉戸涯へ相扣、

一副使並在番親方・親方格ノ親雲上

右一同、御中段御敷居一畳目下ニテ御礼、奏者番披露、

一 御上段御簾垂之、御中段末之御簾卷上、

一 王子

右、御用人案内ニテ御中段御縁頬へ着座、

但、見物席仕切屏風、

一 親方・親方格之親雲上

右、同断案内ニテ鋪舞台御庭ノ方御敷居涯ヨリ末へ掛

一同着座、

一 中官・楽童子

右、御目付案内ニテ親方末へ一同着座、

一 御上段御簾卷之、此時中官・楽童子一同奏者番披露、

一 御能初、小林一学、

一 正使・副使・在番親方、於見物席御茶・多葉粉盆・御

椀・菓子・御煮染・和名酒・御吸物・御銚子・御小皿

物・御銚子・御坪皿物・御銚子、中官・楽童子へ塗

^{⑨縁高}
被下之、

一 御能三番過、御中入、

一 杉之間 王子

右、御料理頂戴、給仕表御小姓、

右、月番御家老出席、此時王子席ヲ迦相進、緩々可有

頂戴御意ノ旨伝之、御礼有テ御家老退座、

一 虎之間 親方・親方格ノ親雲上

同末之間 中官・楽童子

右、於席御料理頂戴、給仕表御小姓、

右半、御用人出席、何レモ席々ヲ迦相進、御用人挨拶

有テ退座、

一 右畢テ、王子初最前之通見物席へ帰座、御能初、

一 御能済、御上段並御中段簾垂之、王子ハ御中段最前ノ

席へ御用人案内ニテ着座、通詞出席、親方已下ハ席々

ニ相還、

一 御上段御簾卷之、此時王子、御能見物・御料理頂戴被

仰付、従者マテモ同断、重疊難有旨通詞ヲ以申上之、

月番御家老御取合有テ御礼、退座、

右畢テ 御入、

一 王子、御家老今日ノ御礼申上之、奏者番取合、其已下

謁奏者番同断申上之、退去、

以上、

二八二

一 明十五日、大宜見王子へ御能見物・御料理頂戴被仰付候間、五ツ時 御出座被遊管候、依之王子其外琉球人六ツ半早目登 城可有之候、此旨琉球館聞役へ申渡、可承向々へモ可申渡候、

辰八月

(二階堂行智)
河内

仕表坊主、

一 御次第書別紙之通、
右之通、向々へ可申渡候、
寛政八年八月

(二階堂行智)
河内

二八一四

大宜見王子御膳進上御次第

一 王子登 城ノ節、虎之間階上へ掛御用人・御目付出迎、杉之間へ案内、副使同断、虎之間脇階ヨリ罷上、御目付案内ニテ虎之間へ差通、両席トモ茶・多葉粉盆出之、給仕表坊主、

一 椿之間

大番頭・寺社奉行・御勘定奉行・御小姓与番頭・当番

頭

一 水仙之間

御用人詰衆

右、席々相詰、

一 御書院御上段へ 御出座、

御先立、

二八二三

御膳進上

大宜見王子御膳進上御手当

一 御書院御床御棚飾其外先例之通、
一 相掛候御側役以上並御給仕長袴、其外麻袴、
一 進上之御膳部三汁十一菜、
一 大目付以上於奥御膳下差出之、
一 王子・副使へ於梅之間料理差出、其外ノ琉球人へハ虎之間ニテ同断出之、

但、王子・副使へ給仕表御小姓、其外琉球人へハ給

一 御太刀 王子

右、御太刀目録奏者番持出之、三之間於敷居内五疊目相備之、同四疊目ニテ御礼披露有テ退座、御太刀目録奏者番引之、通詞差添候テ王子再三之間前之席へ出礼、御意有之、月番御家老ヨリ通詞ヲ以王子へ伝之、二之間御敷居内御右之方へ着座、御膳差上、難有仕合ノ旨通詞ヲ以被相演、月番御家老御取合、重テ 御意有之、月番御家老通詞ヲ以伝之、御礼被申上、如最前御取合有テ、扣之間へ被退、

一副使・在番親方

右、三之間御敷居内二疊目ニテ一人ツ、御礼、奏者番披露、

一中官・楽童子

右、同一疊目ニテ一人ツ、御礼、披露同前、

右畢テ 御入、

一 御膳於奥上ル、

一 御書院御上段⑨、御出座、

一 王子

右、三之間御敷居内四疊目ニテ御礼、月番御家老会釈

有テ最前之(1,2)

一 御吸物 御島台 御膳⑩ 御銚子

御前へ御盃被 召上、王子御着被差上之、二之間御敷居内ニ出座、御盃御上段御敷居涯ヨリ下へ五疊目へ置之、六疊目ニ王子出座、御盃御酌ヨリ被渡之、頂戴、御着被下、加へ有テ、御盃御勝手ノ方へ持下滴、御同朋頭最前之席へ持出、御酌、持出候御台ニ可載之、御前へ御酌差上之、王子御礼、復座、御銚子入、御吸物等引之、

一副使、三之間御敷居内二疊目ニテ御酒被下、

畢テ王子退座、

右相済テ、 御入、

一 王子

右、二之間最前ノ席へ着座、

一副使・在番親方

右、三之間御縁類上御敷居ヨリ下二疊目へ相詰、

一 楽人

右一同、鶴之間へ列座、

一 御上段へ 御出座、

右面々、一同御礼、楽人共ト奏者番披露、畢テ退座、

王子・親方ハ其儘罷在、楽相初可申旨、月番御家老ヨ

リ御用人へ達之、御用人通詞へ申聞、相初、

一音楽相濟、王子其外退座、

但、此時ハ通詞鶴之間へ罷在、

右畢テ 御入、

一王子・親方出座、最前ノ席へ相詰、重テ 御出座、唐

踊・琉球踊 御覽、

右相濟テ、王子退座、

一親方並中官・楽童子已上、於 御前御酒被下之、

但、親方ノ分ハ三之間御敷居内三疊目ニ御酌罷在、

二疊目ニテ一人ツ、頂戴、中官・楽童子ハ御敷居内

二疊目ニ御酌罷在、一疊目ニテ兩銚子ニテ頂戴之、

一王子

右、御上段御敷居ヨリ下へ五疊目ニ奏者番御目録持出

相居、同六疊目へ出座、拝領ト達候、御家老御取合有

テ退座、

一同人

右、重テ三之間四疊目ニ通詞差添出座、拝領物御膳進

上、從者マテモ 御目見難有奉存候旨通詞ヲ以申上候、

月番御家老御取合、 御意有之、御家老通詞ヲ以伝之、

蒙 御意難有旨、又通詞ヲ以申上候、御家老御取合、

退座、

右畢テ 御入、

一水仙之間へ御家老一同ニ出席、王子・親方今日ノ為御

礼謁有之、

以上、

御取次
吉井新太夫

御祝御能

二八二五

御家督御初入部御祝御能ノ御次第

寛政元酉

一御座之間へ 御出座、

島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

右一統 御目見、 御意、御家老御取合有テ退座、

一 島津左衛門

右、御目見、

一 御家老・若年寄・大目付

右、一列ツ、一統 御目見、御意有テ退座、

一 御対面上御上段(所カ)へ 御出座、

御簾揚之、

御能初、伊勢播磨、

御中段御縁類へ被相詰、

一 島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

一 右同末へ島津左衛門

御中入

一 椿之間

島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

一 屏風仕切

島津左衛門

右、御料理被下之、

一 御家老・若年寄・大目付

右、於奥御料理被下之、

一 島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

右、御能濟、御目見、如最前、

一 島津左衛門

右同断、

一 御家老・若年寄・大目付

右同断、

右畢テ 御入、

以上、

二八二六

御家督御初入部為御祝御能御手当

一 椿之間

島津若狭殿・島津兵庫殿・島津備前殿・島津玄蕃殿

給仕表御小姓、

一 屏風仕切

島津左衛門

給仕右同断、

右、一汁三菜ノ御料理被下之、

但、香物外、

一 御家老・若年寄・大目付

右、於奥同断被下之、

一御番頭已上諸大身分・御用人・町奉行・寄合並、松之間・芍薬之間、

直触已上、竹之間、

御作事奉行已下、張出杉之間・菊之間へ相詰、

一御一門方・諸大身分・寄合並・御側役已上長袴、其外

諸地頭並諸御役人半袴・十徳、

一御対面所御中段御右之方御縁類、御畳鋪付可申候、

一掛ノ小役人等御能方人数へ一汁一菜ノ御賄被下之、同

心已下賄ノ儀モ例之通、

以上、

別紙二通ノ通被仰渡候間致通達候、右ニ付テハ御手当

ノ儀トモ於向々不洩様可被申渡候、左候テ、掛ノ小役

人等御能方人数並同心已下ノ御賄被下候ニ付テハ、御

日限相知候節名書人数是又向々ヨリ可被書出候、以上、

西六月二日

島津主水

二八一七

一宝曆二年申二月、重年公御覽ニ付、御次第・御手当
左之通、

一上下土踊 御覽被遊候付、御犬垣⑨内ニテ踊被仰付候、

一御棧敷先年調方被仰付候内、書拔左之通、

一御座之間十帖敷、蠟引筥備後置、

一御棧敷前後妻日覆並敷込様ノ儀⑨條⑩様ハ、屋根蠟引筥疏尺置、

一御次之間八帖敷、杉柱小丸太、屋根渋紙筥葺、壁無之

由候、

一御⑨書隱屋根筥葺ニテ可有之、

一御末之方御次之間ニ相統候、十三間一統統調方可有之

候、屋根ハ渋紙筥フキ、

右之通、先年ノ模ヲ以御作事奉行ヨリ申出候、

一上下土踊・町踊ノ場所並外廻ニモ、前晚ヨリ当日朝ニ

懸リ、水又ハ汐打候様可致候、

一上下踊、当日諸御役座明⑨候ニ不及、見物可罷出候、八

ツヨリ内、踊相済候ハ、明候様可致候、

右之通、可承御役々へ申渡、御普請奉行へモ可申渡候、

土踊

申二月十八日

(島津久岳)
主銘

二八一八

一二月二十一日二十二日間天氣次第、上土踊、

一同廿三日廿四日ノ内天氣次第、下土踊、

一同廿五日廿七日ノ間天氣次第、上下町踊、

右之通、御覽可被遊旨被仰出候、

一上下踊之次第

一当日四ツ時上踊 御城御門橋々涯④之ヨリ御廐之方へ掛、

踊人数疊罷在、下々儀④之モ当日四ツ時島津善次郎殿角ヨ

リ島津將監屋敷ノ方へ掛リ、踊人数疊罷在、相揃候首

尾与頭ヨリ御用係ノ御用人へ可相達候、

一右首尾有之、御棧敷へ 御入、

一御側廻、御棧敷末段々可相詰候、

一御先供十五人、

一对御道具・御長刀・御手道具、

一大御目付、踊路へモ罷在、差引可有之候、

一備中殿其外独礼並無役之一所持ヨリ寄合マテ右同断、

御棧敷次之間ヨリ見物勝手次第被仰付候、

但、詰並見物ノ面々支度不洗物・麻上下、

一諸御役人、金藏之方幕構ノ内ヨリ勝手次第見物被仰付

候、

一御前置十五人

但、御供之御步行、

一御前置ヨリ少々相隔相勉、西並北双方へ御側御用人・

御近習役可相詰候、

一北之方御側御用人・御近習役詰所ヨリ少々間ヲ置、表

御用人兩人可相詰候、

一上下踊人数疊罷在候所へ物頭・肝煎召列可相勉候、

一御棧敷被遊 御入候テ踊可繰入候、

一与頭小頭召列、踊場ノ下知可致候、

一御目付、踊場ノ差引可致候、

一進上之折一合三種二荷、御出前、与頭兩人罷出、御

近習役へ相付可差上候、

一隅州様へ進上ノ二種一荷、踊前、与頭一人小頭召列御

下屋敷へ致持参、御近習役へ相付可差上候、

一踊相濟、引取候以後、則御棧敷前二ツ縁垣取除、御棧

敷ヨリ六七間ノ所へ長御座可敷付候、

一上下共与頭四人御棧敷前へ被召出、御通被下候段、

御側御用人ヲ以被仰渡、与頭ヨリ踊人数へ申聞、上ハ

二十銚子、下ハ三十銚子ニテ御通可被下候、大勢故着

ハ被下間敷候、酌表御小姓、支度不洗物・半上下、

一御通被下候節、与頭並小与頭ヨリ御目付段々差寄差引

可仕候、

但、御通被下候節、刀並藁地ハキナカラ罷出、鉢巻

ハ取ニ不及候、カフリモノ取可申候、

一御通相済、御意次第踊行列並供行列可行立由候、行^⑦

列 御覽ニ付テハ御棧敷御堀之方御屏風可取除候、

一行列 御覽ノ節ハ御前置御堀之方へ可相詰候、

一御通被下候内、進上ノ御折相披キ、御菓子差上、御棧

敷次へ相詰候面々へ御菓子可被下候、

一供行列マテ相済、御帰館、

右之通被仰渡、

二月

取次

肥後平左衛門

二八一九

一上下町踊之次第

一今月廿五日七日ノ内天氣次第、

一四ツ時御城下御木屋ノ場前外ツナキ前上下一所ニ相揃、

其首尾町奉行ヨリ御用係ノ御用人へ可申出候、

一御棧敷へ御光越、御多葉粉盆上ル、

一御先供十五人、

一对御道具・御長刀・御手道具、

一御棧敷ノ次之間ヨリ見物被仰付候面々並御棧敷詰御前

置、土踊ノ節同断、

一諸御役人見物ノ儀、土踊ノ節同断、

一御意次第踊可操入候、

一町奉行並御目付、踊場へ罷出、可致下知候、

一進上ノ御提重一組二種一荷、御出前、年寄十三人町

座筆者召列^⑧罷出、御用人へ相付可差上候、

一御隠居様御方へ進上ノ二種一荷、年寄二三人町座筆者

召列御下屋敷へ持参致シ、彼方差図次第可差上候、

一踊ノ内、進上ノ御菓子差上、相詰候人数へ可被下候、

一踊本ノ処へ手引取合候、

一首尾掛ノ御用人相詰、外ツナキ前長御座敷付、中銚子

ニテ御通可被下候、着ハ不被下候、酌足輕、支度麻上

下、

一右席へ町奉行可相詰候、罷出次第、町座筆者・町役人

トモ差引可仕候、

一 右相濟、上下共ニ 御城下御下屋敷ノ方へ罷通、御台

所御門下中通筋ヨリ札之辻ノ様引取、上ハ江戸橋筋堀

畑可罷帰候、下ハ直ニ町内ニ可引入候、

二月十四日

取次
肥後平左衛門

二八二〇

一 高一石ニ付出銀一分六リ

但、無高並一石以下ノ人ハ一石分、其外ハ勺才マテ

ノ出銀、

右ハ、此節下土踊ニ付諸入目料御物御取替ヲ以相調候

ニ付、先例ヲ以割付候処、出銀右之通候間、銘々出銀

取揃置、一紙総ニ不及差出マテ来月五日限下土踊方へ

差出候様可被申渡候、左候ハ、納方ノ儀ハ追テ可申渡

候、尤、出銀皆同上納相濟マテノ間御座相立居事候条、

右日限無延引首尾有之候様、支配中へ不洩様、是又可

被申渡候、以上、

但、拝借上地高相除、先達テ差出置候現高ヲ以割付

相究候ニ付、其首尾増減等有之候テモ此間申出置候

差出本ノ通首尾可有之候、

寛政二戊五月十八日 下土踊方御小姓与番頭

諸御役 名宛略ス

二八二一

一 諸武芸

一 土踊

但、着用ノ品ハ此已前之通可相心得候、尤、異様ノ

着具等取拵、或作物・長物等一切無用可致候、其外

新ニ不益ノ品等相調候儀^⑧、堅致間敷候、

一 町踊

右ハ、此節 御初入部ニ付先規之通可被遊 御覽旨被

仰出候間、此旨申渡、尤、取調申出候儀トモハ可申出

候、右ニ付テハ諸事費筋無之様可取計旨、可承向々へ

可申渡候、

天明九年酉二月

(市田教團)
勘解由

二八三二

一 御小姓与番頭

右ハ土踊惣差引ノ儀、此已前之通被仰付候、依之小番・

新番並諸与与力ノ儀モ踊ニ付テハ都テ可被致差引候、

一御関符 御覽ニ付テモ右同断差引可被致候、

右申渡、諸向ヘモ可申渡候、

但、若年寄ヘハ別段申達候、

寛政元酉五月

(市田教團)
勘解由

椀飯之御飾

二八二三

一正月元日御書院之御飾ナリ、大晦日御包丁人勉之、元

日御式済、直ニ収之、年頭武家之規式ニテ、鎌倉御代

ヨリ專為有之筋相見ヘ候ヘハ、御元祖様ヨリ御伝来

之御式ト相見ヘ候、昔ハ家々ノ椀飯致進上候筋ニモ相

見ヘ、旧記之内、何某殿椀飯出候、何某殿椀飯直之候^①

杯有之候ヘトモ、年頭規式之品ヲ進上ヲモ致候哉、

二八二四

(二八二三号行間朱書)

一椀飯ハ、諸郷百姓ヨリ山海ノ産物ヲ年頭領主ヘ進上ノ

品、万寄物ニテ調進ノ筋相見ヘ候、^(義弘)惟新様御代ニハ

慶賀受合ニテ百姓ヨリ反錢三文ツ、取候由、右故ニテ

モ^②ヤ、年頭 御城ヘ御祝申上候、^③是又伊地知殿ヲフ

ハン、伊集院ヲフハン出候杯ト有之候ハ、年頭私領ヨ

リ到来ノ初穂ヲ 上様ヘ進上ノ意ニテ可有之、 惟新

様椀飯ノ品書ニ、何々一竿、何品二包ト可有之候ヘハ、

竿ニヌキ候テ諸郷ヨリ致持参候ヲ直ニ其儘御飾ニ相成

候哉、于今ヲフハン竿ト言伝候モ右ノ遺意ニテ可有之、

二八二五(の1)

天正十二年正月日帳

一朔日、伊地知殿ヲフハン、二重十二合樽十五ナヲシ申

候、海山同前三献ニハ初献ヨリ被参候、

一二日未ヨリ晩ノ御セク参候、其後伊集院ノヲフハン、

先樽十九ナヲシ申候、二重同前御三献参候、三献目地

頭被参候、

一三日、市来ノヲフハンニ、先樽十九二重ナヲシ申候、

御差出被成候ニ三献参候、

一七日、平田殿ヲフハンニ、樽廿三・十二合海山御座候^{②ト}

ナラシ申候、又御三献ニハ初献ヨリ御参候、

一十五日晩ニハ本田紀伊守殿ヲフハン、二重十二合樽三

十五御座候^{②ト}ナラシ申候、三献ニハ初献ヨリ御参候、

(二八二五の2)

一東鑑、正応三年、禁制^③造作修理用途・碗飯役・五節

供充^{スルコトヲ}課百姓^ニ

右之通相見得候へハ、諸郷百姓ヨリ山海ノ産物ヲ相納^{②調}

右之品ヲ年頭相飾候哉、

(朱書) 一本文東鑑ノ文ニ依テハ、年頭ニ不限五節句ニモ有之

候ヤ、

(二八二五の3)

義弘公御碗飯左之通、

一青銅三千疋 一御樽十荷<sup>但、五
十盃入</sup>

一猪二丸但、二竿一鯛魚十掛一竿

一鴨十二一竿 一塩俵一竿

一コフ 一ノシ

一山イモ 一栗

一餅目籠一竿

一雉子十二一竿

一目籠九包一竿

一クシカキ

一里イモ

一トコロ

一ヲヤシ

一代々

一カツヲフシ

右之通、伊地知氏ヨリ^{②始}慶賀三頭鹿兒島・伊作・田布

施碗飯反錢四方一段ニ錢三文ツ、掛、

右ヲ以考候へハ、田地畦反ニ掛、碗飯錢百姓ヨリ差出

事候哉、

(二八二五の4)

一当時ノ御飾左之通

一白餅 一梨子ノ間^{クハイ}

一栗 一山イモ

一^{②荒}布 一干鯛 一猪二丸^{②一}当分^{引ケ}

一雉子雌雄 一鯉一本 一串柿

一里イモ 一小豆餅<sup>柘榴
ノ間</sup>

二八二六

一正月元日碗飯並御三献、以来ハ御留主年モ 御在国之

通御書院へ差上、其節御役々相詰可申候、尤、給仕ハ

奥御小姓可相勉候、

但、奥御小姓不在合節ハ表御小姓差^(空白)候様、御側役

へ時々可相達候、

一御家老へハ右之節於椿之間被下候、^⑧之

以下略ス、

安永四年未八月

二八二七

一年頭ニ付御書院碗飯ノ御飾ノ儀、御年限中御引取被仰

付候条、可承向々へ可申渡候、

文化六巳四月

(願姓久庵)
信濃

二八二八

一太平記綱目卷ノ二評ニ曰、六波羅ニ急アル時、洛中洛

外ニ散在シタル武士ヲ招集ン為ニ、六波羅ノ御家人四

十八人ヲ撰テ箒ノ長トシ、諸国へ課役シテ洛外ニ箒ノ

処ヲ定テ是ヲ焼シメ、辻々ヲ堅固ニ守護ス、中略、

此箒ノ役四十八人ハ檢非違使ノ庁ノ如ク、碗飯領ノ調

物ト同ク諸国ノ課役ニヨルカユヘニ如此言ヘリ、此碗

飯ノ供米・供錢ハ嵯峨帝ノ時ヨリ始レリ、其レモ幾内

五国ヲ除キ二島ヲ加テ六十三箇国ナリ、東海道十五国

ノ中、伊賀・志摩・伊豆ノ三国ハ下品ノ国ナレハ、余

国ノ三分ノ二ヲ除テ、十町ノ田ニ米三石二斗・錢四貫

文ヲ納ム、伊勢・武蔵・上総・下総・常陸ハ大国ナレ

ハ上品ノ国ト均シ、尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・

相模ハ上品ノ国ノナレハ、十町ノ田ニ米九石六斗・錢

十二貫文ヲ納ム、安房ノ国ハ中品ナレハ三分ノ一ヲ除

テ十町ノ田ニ米六石四斗・錢八貫文ヲ納ム、余皆如此、

近江・美濃・信濃・上野・下野・陸奥・出羽・越前・

加賀・越中・越後・丹波・但馬・因幡・伯耆・出雲・

播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・紀伊・

讃岐・伊予・阿波・筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・

豊後上品ノ国ナリ、若狹・能登・佐渡・丹後・石見・

長門・土佐・日向・大隅・薩摩ハ中品ノ国ナリ、飛騨・

隱岐・淡路・宍岐・対馬ハ下品ノ国ナリ、如此国ノ上

中下ノ品ヲ分テ、其国々ノ国司、定法ノ如ク^⑧米錢ヲ納

テ、毎年檢非違使ノ庁ニ奉納ス、是ヲ以テ碗飯役其外

ノ役事ヲ致セリ、

嘉祥玄猪之事

二八二九

一 嘉祥玄猪

右、以来御祝日被相立候付、大御目付以上並奥勉人数於奥御祝儀可申上候、且又大奥ハ兼テ御広敷ヘ罷上リ来候面々並御広敷勉ノ面々ハ御祝儀可申上候、玄猪ノ儀ハ晚方御祝儀申上候、

但、支度ノ儀、嘉祥ハ染帷子・半袴[㊟]玄猪ハ不洗物・

半袴△、

右之通、以来被相定候条、御本丸・山下築地御屋敷ノ儀モ江戸大奥御式ニ被準候様被仰出候、右ニ付、

御一門方ヲ始於宅祝日ニ被相立候儀勝手次第被仰渡候、

天明二寅十一月廿五日

(島津久徳) 仲

二八三〇

一 玄猪御祝ノ節、於御座ノ間 御年月御祝ノ餅大御目付

以上ハ可被下候、

一 御入以後、右御餅御座之間御敷居内一疊目ノ上相備、

御側御用人以下奥向ノ面々ハ罷出、自身頂戴可仕候、

右之通、以来被相定候、尤、是マテ差上来候玄日御式ノ儀ハ、江戸御国元共差上候様被仰出候、左候テ、

諸帳面等玄日御規式ト有之候処、玄猪御規式ト可相直旨被仰渡、

天明三卯六月十日

(島津久邦) 左

二八三一

嘉祥御祝

一 塗竹 盛交 大マンチウ キントン[㊟]九△ ・煮染・大麵五・ヤウカン五切

切熨斗十筋 杉ノ葉カヒシキ

右御薄盤ニ請 尺長御箸、

右、於 御休息所 御前ヘ差上候、

一 奥向御座御飾五節句之通、

一大奥ヘモ可差上候、其外御同前、

右之通被相究候旨、被仰渡候段被仰渡、

天明三卯六月十日

▽④ 新安手簡△

一嘉定玄猪ノ儀、御尋ノ事条一々奉承知候、某事當時ハ
 歳初又ハ俗節ナトノ出仕ノ外ハ蟄居候ヘハ、大儀ヲ見
 候ニ及ハス候、トヤカク承ル事ニ候ヘトモ、ソレ又心
 フトメス候故ニタシカナル事ハ不存候、但シ、(家意)文廟ノ
 御時ニハ、イカナル思召ニ候カ、年中ノ行事 祖宗ノ
 旧義ニタカヒ候事モ候カ又讓(譲)スヘク候事モ候カ、所存
 ヲ不殘可申候、但シヨク見ヌ事ハ疑シク可有之トノ御
 事ニテ、最初 將軍宣下ノ日ヨリシテ年中ノ御儀又ハ
 御法会等ノ儀マテ、ツネニ 上壇ノ御座ノ後ニ侍シ候
 ヘク候ヨシニテ、某タ、一人ハ御後ニツネニ差置レ候、
 其時ニ近習ノ衆ノ戲言ニ、某ヲ呼レ候テ紫微座後ノ一
 小星ト申サレ候事ニ候キ、如此ノ奇遇ニヨリ候テ、形
 ノコトクニハ大儀ヲモ見候テソレヲ議シ候ニツキテハ、
 祖宗ノ法ヨリテ始ル所(訓)ヲ究シ候キ、今ハ某見及候時
 ノ事トハ毎事改リ候ヤウニ承及候ヘハ、詮ナキ事ニ候
 ヘトモ、先 祖宗御旧儀ノ事トモヲ存出候ニ任セ、ア
 トサキモナク筆ニ任セ候、コレニテ御尋ノ事条モ事濟

候ハンカ、 祖宗已来ハ年始ハ朔大形ツリ合候、大儀
 ニ付年始ノ事ハ万国一統ノ事申ニ不及候、八朔ノ儀類
 ノ節供ノ故トハ不承候、コレハ世ニ申伝候東御入国
 ト申事天正十八年八月朔日ニテ候、コレニヨリテ当家
 ノ吉例ノ第一ニ成来候カ、其頃ニ御家人ノ轄地ヲ改賜
 リ候ニ、三千石已上ハ大名ト申候故ニ、今モ此日ハ三
 千石ヨリシテ太刀・馬進上ノ事モ候カスヘテ三千石已上ニ
 候ハ、其定ノ事ヘヨ
 レニ、次ニ嘉定ノ事又大儀ニ候、是又 当家ノ吉例ニ
 候、元和元年五月七日ニ大坂事終リ候テ京師ヘ入ラセ
 ラレ候テ初テノ賀儀ニ候、殊京ニテハ堂上ニテ此日ノ
 事ヲ賀セラレ候故ニヨリテ候カ、玄猪ハ餅着到トカ申
 事ニテ三州ニ入ラセラレ候時ノ御例ト申候、イカ、左
 モ候カ、(秀忠)台徳院様御代マテ凡ソ御家人一人モ殘ラス
 出仕、御手自餅ニツ宛被下候、コレニヨリテ、其後二
 三日ハ御肩ヲイタマセラレ、近習ノ衆ウチ候テマイラ
 セ候、御鷹師衆ニ誰トハ申人ノ餅戴ニ出ラレ候カ、ヲ
 カシキ体ニ候テツネニ笑ヒタル事ニ候コレニテ末々マテ出
 任推シテ知ルヘク候
 △、(家光)大猷院様御代モ、始ハ一二年旧例ノ如クニ候ヒ
 シニ、程ナク番頭衆マテハ御手自被下、已下ハ人々ミ

ツカラ取テ退ク事ニナリ候ト、コレラノ事トモ某故主
 土屋民部少輔(利直カ)ツネニ語ラレ候ヲ、イカニモイカニモ
 タシカニ承及候事ニ候、毎月廿八日ノ参賀ト申ス事モ
 諸説区(タ脱カ)ニ候ヘトモ、コレハ三河ニイラセラレ候時、遠
 所住居ノ衆中且那寺参詣ノ日ニテ肩衣次手ニ参ラレ候
 ヲ、終日御座ヘ出ラレ、御对面候子共ナトヲ御目ニカ
 ケ候ナト、多クハ此日ノ事ニテ候キ、遂ニ 当家ノ新
 例トナリ候、其事ノ由ハ 御廿八日様ノ事ニヨリ候ト
 テ、フルキ人ノ笑ヒツ、ヲシヘラレ候事ニ候、又寄合
 衆ト申事ハ、ムカシハ大身衆ハ一備々々自分備勿論ニ
 候、小身ノ衆ハ御番衆ト申候テ、是又一備々々ニワカ
 タレ候、大身ト申ニモナク御番ニモ入ラレカタキ衆中
 ヲ組合セラレ、年寄衆ノ下ニ附ラレ候テ備ヲワカタレ
 候、其衆ヲ寄合衆ト申タルニ候、其証ハ大坂陣ノ時ノ
 御備定ヲ御覽合ラルヘク候此頃マテハ年寄中ニ大、コレニ
 身ナルハスタナク候
 ヨリテ 殿(家親)有院様御代マテハ寄合衆ト申モ限有事ニテ、
 皆々年寄衆支配ニ候キ、其中交替衆ト申ハ殊ニ限有事
 ニ候キ、常憲院様御代ニ、御役不相応、御番不相応ナ
 ト、申事ニ候、サスカ節朔(注)ノヲト、メラレ候程ノ重

罪モナク候衆、一タヒ御役ヲモ御近習ノ御番ヲモ勉候
 ヲ、皆々寄合ノ中ヘヲシ入ラレ候故ニ、日々月々ニ其
 数ヲ増シ、今ハ千人ニ及ヒシ事ニテ、ツイニ若年寄衆
 ノ支配ニ成候トテ、三年前ニ九十ハカリニテ死セラレ
 候遺老、昔老中ヨリ支配ノ事ニ付テ給リ候手紙ナト見
 セ語ラレ候キ、如此ノ事ニ成来候ヘハ、玄猪嘉定ニハ
 寄合ノ面々ノ中御座近ク参入ノナリカタキ大半有之候、
 其上其頃ニハ少モハヤク礼畢リ御座ヲタ、レ候ヤウニ
 役人中トリハカラヒメサレ候事ニテ、人ノ数スクナキ
 程ヲヨシトメサレ候故ニ、寄合ノ面々嘉定玄猪ニ出候
 ハンヤウニナニトナク成来候、 文廟(御)ノ時ニ到リ、
 初政ニ、彼 御目見遠慮ナト申人々ヨリ始候テ、御預
 ケ・遠島ナト申ニ至マテ、凡三千余人一時ニ御免シ候
 事ハ定テ其許ニテモ御覚可被成候、⑧さて何事も 祖
 宗の旧法のことくとの△御事ニ付テ、コ、ニヲヒテ寄
 合ノ面々又玄猪ニモ嘉定ニモ出仕候、 当代ニ至リ候
 テ又毎事文廟ノ御沙汰ヲ改ラレ候ニ付テ、 祖宗ノ旧
 法ヲ併テ改ラレ候事モ候テ、玄猪ニ寄合出仕無用トノ
 事ニテ、コレヨリ又相止ミ候、其翌年カニ又寄合モ三

四首頭

人ツ、出候ヘシ、但シ其人ヲハ上ヨリ差定アルヘク由
ニテ、今モ三人ツ、先期ニ若年寄中ヨリ差紙ト申モノ
ニテ御申付候ト承候、コレニヨリテ嘉定ニ推参ノ衆中
モ候ヘ共、コレニハ数ノ定メモ出仕候マシキトノ御定
モナク候ヘハ、ムカシハ嘉定玄猪ハ同シ儀ト見ヘ候ニ、
当時ハ二ツニワカレ候式ニ罷成候カ、但シ前ニモ申コ
トク、当時ノ事^⑧見聞ニ及候ハヌ事、伝聞ノ訛多ク候
故ニ如此候、コレラノ事ノ如キモ皆々其ヨリ来ル所ア
ル故ニ、半ヨリ申候テハ事明ラカニナラヌヤウニ覚候
間、申ツ、ケ候事ニ候、末略ス、

二八三三

⑧ 合類節用集△

一 嘉祥

伝云、仁明帝朝承和十五六月、豊後国献ニ白亀一、故朝
廷設^レ宴改元^スニ於嘉祥^ト、是濫觴、

一 嘉定

伝云、後嵯峨帝潜龍時、以^ニ宋嘉定錢^一十六文^一、此日適
有^下設^ニ饌供^一之義^上、踐祚之後、猶用其式、是權輿、

二八三四

一 正月二日、於福昌寺御規式、

御名代御家老・川上嫡家・住持、

御次第

一 福昌寺へへ御名代御刻限五ツ時、

一 御名代御入ノ節、侍衆小門マテ、住持東玄喚マテ罷出、

八尺之間へ被為入、四首頭御規式、

一 御相伴、川上嫡家・御家老・住持、

一 湯之御礼

一 茶之御礼

一 御山

一 御茶

一 末広

右、福昌寺住持ヨリ 御代参へ進上、侍衣披露、

一 福昌寺へ御祝物被下候、披露同断、

一 三番点心

一 御茶

但、御給仕出家、

憩月之間御規式

一 御盛塩 一 御前菓子 一 御茶 一 御雜煮

一 酢ノリ 一 御吸物 一 御茶

一 御相伴、川上嫡家・御家老・住持、

但、給仕表御小姓、

一 福昌寺三役人

右、御目見、披露奏者番、

一 於釈迦堂大般若執行、

一 浴主へ被下物有之、

以上、

案スルニ、此御式ハ 仲翁様 元久公ノ御宗子ヲ以、

御出家福昌寺御住職被成候故、 久豊公御家統ヲ被為

継候ニ付、分テ御大切被成、年頭為御祝儀先ツ早ク為

被為入ニテ可有之哉、右之御規式御代々様へ相伝リ、

于今御規式ニ相立居候哉ト奉考候、福昌寺御崇敬ノ儀

ハ旧史段々相見へ候、分テ大庫理(禮)茅負ノ御規式ハ諸士・

住持ハ勿論、古代ハ 上様ニモ被為登候由、其後 御

名代被為登候処、天明之頃カ、茅負ノ御式御引取相成

候、旁ヲ以相考候へハ、福昌寺御崇敬ノ儀ハ古来ヨリ

事ト相見へ候、夫ユへ年頭ニモ五社參御引次ニ被為入

御式有之候哉、

一 正月二日福昌寺へ被遊 御入御規式有之候事ハ、御

元祖様(禮)被遊 御參ニテ無之候、御規式ニ付 仲翁様

へ被遊 御入事候、左候へハ福昌寺住持ハ 仲翁様

御名代ニ罷出事候へハ、 太守様ヨリモ福昌寺へハ

御名代被仰付、二日ニハ 給州様御方へ年始ノ御礼可

被遊御入候間、後年トモ左様相心得候様、福昌寺へ可

申渡旨、寺社奉行へ被仰渡、

享保十巳十二月廿九日

御吉書御式

二八三五

一 正月十一日、 御对面所御上段へ 御出座、御熨斗目 御長袴

御先立、 御中段御勝手襖涯へ御家老同公、若年寄・

大目付敷舞台御勝手方へ相詰、

一蓬萊

一大服ノ御茶

但、御配膳表御年男、

一御吉書之御料紙御文台ニ載、御右筆持出之、御上段御

敷居内上へ一畳目上ニテ御吉書書認、畢テ御硯ヲ添、

御前へ差上之、御判被遊、本ノ席ニテ読之、

一神社・仏閣修造興行ノ事、

一可專勸農事、

一国々ノ可徵納年貢事、

右任三ヶ条之旨可有沙汰候条如件、

年号月日 御名乗御判

一御家老拜聞、御文台ニ置^{⑧候}テ、御料紙・御硯持下之、

一御家老一人ツ、御上段へ罷出、御吉書頂戴之、復座、

続テ御右筆頂戴之、直御中段下御敷居涯へ着座、

一右相濟テ、御吉書御对面所御床御右ノ方へ上之、

但、表御年男勉之、

一御盃^{御土器}
三方

一式御三献^{但、御相伴御家老並御右筆}
〔本膳計被下、足折〕

一長柄ノ御銚子<sup>御初献マ
テ御加</sup>

一御加

御前被召上、御加有テ、御上段御敷居内一畳目上へ相

下、御家老一人ツ、罷出、御通ニテ頂戴之、復座、其

御盃御中段ヨリ二畳目ニ置之、御右筆罷出頂戴、

御盃持下之、御銚子入御三献等引之、

但、御給仕表御年男、御相伴給仕表御小姓、

一白銀三両広蓋ニ受之

御吉書勉之御右筆、右御中段上之敷居ヨリ三畳目上へ

再罷出拜領、表御年男達之広蓋共ニ持下、

但、拜領物進物番持出ル、

島津家歴代制度卷之四十

天明
元禄

奥表出入

造士館

演武館

宗門改

公義御尋者付囑託

御国元上使

上御屋鋪上使

公義廻浦

他国使者

御役柄並奥表出入一卷

二八三六

一 御家老 御側詰 若年寄 大目附

一 御役ニ付対客又ハ面会等申込候節ハ、被定置候通、表
向書院其外ノ席、応向々ノ格式可致応対候、尤、朝出

勤前ト相心得可申事、

一 右体表向対客等ノ節モ、兼テ出入ノ面々迎モ表向ノ座

敷ニテ可致応対候事、

一 祖父母・親子兄弟・伯叔父母・聿嫁舅姑ニ付、出入可

致、尤、右ノ面々トテモ先方格別輕面々候ハ、不相越

様心得之事、

一 従弟・甥姪之分ハ、手前へ招呼候儀苦カル間敷候事、

一 略服略供等ニテ鹿兒島中往来ハ、ヲノツカラ有之間敷

候、將又御役柄ニモ候故、自分ノ下屋敷等ハ格別、其

外ニハ夜分マテノ滯座ハ遠慮可致候事、

右之通、向後屹ト可相心得旨 御沙汰ニ候事、

天明五巳五月

二八三七

(二八三六号行間朱書)

一 御側廻並表方ノ面々、諸稽古方等ハ日ヲ替又ハ時ヲ替、

一切相交候儀致問敷旨被仰渡、

安永五申八月

二八三八

口達之覚

一面会ノ儀、朝出勤前ト為被 仰出事候ヘトモ、ハツ後

又ハ夕方ニテモ其面々申込ノ趣ニ応、面会可致事、

一御側役ナト面会ノ節モ其向々ニ応、上下又ハ袴ニテモ

致着、表向ノ座敷ニテ可致面会事ニ候、大目附以上ハ

猶以其通有之筈ト 御内沙汰モ有之候、

一從弟・甥姪ノ分ハ招呼候儀不苦候、右ニ付テハ從弟・

甥ノ妻ハ招呼候テモ不苦、姪ノ夫ハ不相成筋ニ候、何

分男ノ方ニ相附候趣ニ候、尤、伯叔父母モ同然ノ筋ニ

候、

一奥・表出入被差留候人数ハ書通トテモ致問敷候、御礼

事ニ相掛候儀ハ有来通可相心得候、

一御役柄勤柄ニ付、御礼事並自分尋問ニ差越候分ハ、御

礼事ハ勿論、安否尋等表向一通ノ儀ハ書通モ可致候、

是以内用向等ノ自分事ニ相掛候儀ハ一切書通致問敷候

旨被仰出、

天明五巳六月廿九日

二八三九

一奥勤ノ面々へ致出入候儀ハ前々ヨリ被相禁、殊去ル卯

年被定置候処、兎角品ヲ付入交、^(カ) 繁方ニ成立候、畢竟

心底ニ不弁所ヨリ右通有之筋ト相見得候、第一被定置

候儀不相守、不埒ノ至候、依之向後祖父母・親子兄弟・

伯叔父伯叔母・聾嫁舅姑・嫡家末家・師匠ヲ出入、從

弟・甥姪ハ手前へ招呼候儀ハ不苦候、其外為親類縁者

共出入被差留候、若無抛儀モ候ハ、可願出候、且内用

向相願、不致出入候テ不叶面々ハ是又可願出、尤、医

院・社家ノ儀ハ御定ノ外ニ候、

一御役ニ付御礼廻勤、其外依御役柄、依訊面会ノ儀ハ、

被定置候通、書院其外表向座敷ニテ可致対面候、内証

向等ニハ面会ハ決テ致問敷候、御近習トテモ御用ノ外

ハ入交申間敷候、

一大御目附以上ノ宅へ差越候儀、御役場付テノ儀ハ格別、

其外ハ被定置候通可相心得候、

右之通相心得、向後用向ノ儀ハ手寄ヲ以可申通候、然
トモ何ソニ付不打寄候テ不叶節ハ、其節ニ限可申出候、
且差越候訳合ニテ入交モ致候ハ、追テ届可申旨被
仰出候条、以來ノ儀、猶以無忘却吃ト可相守候、被
仰出候、

天明五巳六月廿九日

二八四〇

一 今度奥・表出入被相定候付テハ、江戸表於御長屋、祖
父・親子兄弟・伯叔父・舅舅ノ外、同宿致間敷候、尤、
右外、願出候テモ御免被仰付間敷旨被 仰出、

天明五巳六月廿九日

二八四一

一 大身分ヲ初、夫々家柄ノ向々心身分、格別輕向其外へ
無差別差越又ハ相招候儀共、其心得ヲ以、平生ヲ相慎、
家格通之詮相立候様分て可申渡置旨被 仰出候、

天明五巳六月廿九日

二八四二

一 御一門方ノ儀、身柄モ被為替候儀故、諸人無差別致出
入間敷候、尤、祝詞尋問等ニモ表向罷出候儀ハ其通可
有之候、向後心得違無之様可申聞置旨被仰出、

天明五巳六月廿九日

二八四三

一 奥・表出入、猶又不相定候付テハ、大御目附以上へハ
御礼廻勤ハ勿論、御役柄付テハ自分尋問等表向差越候
儀ハ可有之事候、面会等申込候ハ、朝出勤前可相越
候、

一 御側御用人・御側役へ御礼廻勤ハ勿論、勤柄ニモ候間、
自分尋問等表向差越候儀ハ有来通候、是以面会ノ儀ハ
朝出勤前可差越候、右両御役ヨリ自分尋問表向ノ面々
へ自分差越候儀ヲ致間敷候、

一 右外、奥勤へ表方ノ面々ヨリ御礼事ニ相掛候儀ハ可差
越候へ共、自分尋問ニハ表向一通タリ共被差越候儀ハ
有之間敷候、尤、奥向ノ面々ヨリ表方へハ御礼事ノ外
ハ是又一切自身差越間敷旨被 仰出、

天明五已六月廿九日

二八四四

一 聳方ノ父母兄弟

一 嫁ノ兄弟

一 他家ヲ為繼候子ノ父母並其家内ニ罷在候兄弟

一 姉妹聳並其舅

右、時々届置、可致出入候、

一家内ニ罷在候兄弟ノ子、養子ニ參候ハ、養家ノ父母

兄弟等ト実家ノ父兄等ハ可致出入事、

一同断兄弟ノ娘ヲ他ニ遣、其方舅同断可相心得候、

一 姪ノ夫ハ不相成、甥ノ妻ハ不苦候、都テ婦人ハ夫ニ相

付、夫ハ妻ニ不相付候間、其通可相心得候、

一 妻ノ兄弟並妻ノ家元へ罷在候甥姪ハ招呼候儀不苦候、

右ハ、奥勤ノ面々其外出入ノ儀、先達テ被相定、猶又

右ノ通相心得候様、御沙汰ノ趣申来候段被仰渡、

天明五已七月十六日

二八四五

⑦前条、大身分初夫々家柄之面々と有之場、朱書△

一本文家柄ノ面々並格別輕向ト有之候儀、難決候間、伊(島)

賀殿へ得差図候処、家柄ノ面々ト有之候ハ寄合並以上、(津久金)

格別輕向々与力以下ト可相心得候、左候テ、与力以下

へモ何ソ用向等ニ付テハ致面会候儀モ有之管候間、其

節会积等万端家格通ノ詮相立候様可有之候、尤、諸士

ノ内勤方等モ無之、平日格別輕キ所作振ノ向へ面会等

致候儀モ有之節ハ、是以会积等其勤弁モ可有之旨、口

達ニテ被仰渡、

天明五已八月八日

二八四六

一大身分初家柄ノ面々、応身分、格別輕キ向其外へ無差

別差越、又ハ⑧相招候義共△其心得ヲ以平日相慎候様

トノ儀ハ、格別輕キ向ト有之候ハ与力以下ノ儀ト可相

心得旨申渡置候へトモ、夫々応家格御役相勤候内ニテ

モ御役格ノ高下有之事候へハ、身分輕重ノ御格式相立

候様トノ趣候間、其心得ヲ以、万端高下ノ差別相分リ、

先達テ申渡候趣、尚又無間違相守候様、向々へ寄々可致通達候、

天明六年六月

(島津久金)
伊賀

二八四七

一大御目付已上ノ御役々へ初テ相越候面々、是マテ多分夕方罷越候振合候へトモ、向後出勤ノ障不相成考ヲ以罷越、又ハ退出掛ケ一通㊦可致対面候、其砌持参物等不及、以後見合輕キ品応分限相送候儀ハ可為勝手次第候、

一御側表御用人・御近習役並支配下有之面々モ、右ニ準シ可相心得候、

右之通、御国元江戸詰ノ節トテモ以来相心得候様被仰

付候旨被仰渡候、

安永七戌閏七月

二八四八

一御供目付御目付方出入ニ付、左之通、
一聳方ノ父母兄弟

一嫁ノ兄弟

一他家ヲ為継候子ノ父母並其家内へ罷在候兄弟

一姉妹聳並其舅

右、時々届置、可致出入候、

一家内ニ罷在候兄弟ノ子、養子ニ参候ハ、養家ノ父母兄弟等ト実家ノ父兄等ハ可致出入事、

一同断兄弟ノ娘ヲ他ニ遣シ、其夫舅同断可相心得候、

一姪ノ夫ハ不相成、甥ノ妻ハ不苦候、都テ婦人ハ夫ニ相

付、夫ハ妻ニ不相付候間、其通可相心得候、

一妻ノ兄弟並妻ノ家元へ罷在候甥姪ハ招呼候儀不苦候、

右之通可相心得旨可申渡候、

天明五巳六月

(二階堂行且)
主計

二八四九

一奥・表、道中同立不相成候、無抛詛合ニテ同立不差越

候テ難相濟節ハ可願出候、将又同立無之、長々留置候

テ御不益ニモ相成候ハ、其節々候事、

一同船ノ儀モ不相成事候間、是以別船ニテ御不益ニモ相成候ハ、船間別段立切、同船可為致旨被仰渡、

天明五巳七月十六日

二八五〇

(行間朱書)

「此ヶ条、前後年間次第ヲ以可見、」

一 御家老・若御年寄・大御目附・御側御用人・御側役

右宅へ、

一 親類又無拋縁者

一 諸細工人

一 諸師匠家

右外ノ人ハ内用向相頼候者計可致出入候、尤、内用向

相頼願置候者名前ノ儀ハ御側御用人へ相附可差出候、

一 御役ニ付御礼事等其外玄喚マテ相見廻候儀ハ有来通、

一 依訳面会ノ儀申込候人有之候ハ、朝出勤前応御役格、

書院等其外表向ノ席々ニテ一通リ可致出会候、尤、御

役ニ付贈物等ハ可致受用事候、

一 御用ニ付参人ハ前条ノ振合ヲ以可致対候、

一 奥向人数宅へ、

一 親類又ハ縁者

一 諸細工人

一 諸師匠家

右外人数、用向相頼候者計可致出入候、

一 無拋不致面会候テ不叶儀有之候ハ、勤ノ服ニテ表向

ノ座ニテ可致面会候、

右之通被相定候条、表向一切相交間敷候、稽古事等モ

日並時ヲ替可申候、万一致出入輩有之候ハ、双方共

屹ト可及迷惑候、此已前ヨリ度々被仰渡事候処、頃日

大形ノ聞得有之候ニ付、此節分テ被相定候条、此旨屹

ト可相守候、仮令是マテ致出入人モ候トモ此節相改、

双方共相断致出入間敷旨、被 仰出候段被仰渡、

天明三卯十月

二八五一

一 大御目附以上宅へ奥向人数出入ノ儀ハ有来通、

一 奥勤ノ面々、御側御用人・御側役宅へ互ニ出入、有来

通、

一 御家老以上・奥勤ノ人へ、御近習通ノ人トテモ出入不

相成候、

一 大御目附以上並御側御用人・御側役等ノ勤方有之人、

家ニ付指南事存来候人、御役内^⑨弟子中出入不相成候間、門弟中ニモ功有之者ノ内、中師匠申付為致指南、致直談間敷候、

一 嫡子末子部屋栖ニテ同家内罷居候所へ表方ノ面々出入ノ儀ハ是迄ノ通不苦候ヘトモ、右序ニ右ノ御役々勤ノ親兄弟対面ノ儀ハ不相成候、

一 大御目附以上並奥勤ノ人へ公私ノ用向ニテ參、致用談候儀ハ不苦候ヘトモ、用事相濟致滯座候儀ハ曾テ不相成候間、用向相仕舞次第直ニ可罷帰候、

右ハ、大御目附以上並御側御用人・御側役・奥勤人数宅へ出入ノ儀、先達テ被仰渡趣有之申渡置候間、右ノ通相心得候様、被仰付候旨被仰渡、

天明三卯十一月

二八五二

一 此節大御目附以上並奥・表出入等ノ儀、猶又分テ被仰出候付テハ、イツレ大御目附以上ハ相揃候様有之度候、面々ノ見込通有之、不相並候テハ守ノ詮難相立候故、左之通相心得可然事、

一 御家老・御側詰互ニ出入ノ儀、格別無抛内談等ノ節ハ同役へ相届置、差越致面会候様相心得可然事、

一 若年寄・大目付へ右様ノ節ハ、同役へ相届置、相扣候様心得可然事、

一 若年寄・大目付へ右様ノ節モ、相振合相心得居可然事、

一 祖父母・親子兄弟・伯叔父伯叔母・甥嫁舅姑・嫡家末家、互ニ出入、併末家ノ儀ハ身近親類ノ外此方ヨリ差越候儀相成サル筋心得ノ事、

一 師匠家ハ、用事等相濟、長滯座無之筋可然事、

一 他家へ罷在候男女ノ孫並右ノ妻夫召呼候儀、仰出ニモ不相見得、他家ノ孫娘・其夫ハ不相成方ト存候、

一 申込面会ノ儀、可成程表向ニテ朝出勤前ト可心得事、

尤、無抛申込晚方面会候共、用事相濟滯座無之様可相心得候事、

一 従弟・甥姪ノ分ハ召呼候儀不苦候、右ニ付テハ、従弟・甥ノ妻召呼候テモ不苦、姪ノ夫ハ不相成、伯叔父母不苦、伯父・叔父ノ妻モ不苦、伯母・叔母ノ夫ハ不相成筋相見得候、

一 出入書出ノ人外ハ、奥・表共、不致面会候テ難叶節ハ、御届申出候上面会ノ筋兼テ心得居候事、

一 御用ニテ召仕候書役ノ儀ハ、取扱ノ御用ニ付テハ召呼候筋心得罷在候事、

一 諸細工人・御断理役類用事相頼候筋、内々召呼候筋心得罷在候、尤、面会ハ不相成事、

一 俣方御役相勤候ニ付テハ、御用筋ニ付出入又ハ兼テ用向等頼置相弁候者ノ致出入候テ不苦筋存罷在候、面会ハ不相成候、

一 俣孫共諸稽古方ニ付テハ、師匠並同門中相手ニ差越致修行候儀不苦筋仕立、尤、面会ハ一切不仕候、

一 致出入候向ヘ無抛差越候節ハ申込、其家内マテ致出会、尤、夜分マテ滞座不致様相心得候事、

天明五巳五月

二八五三

朱書

一 御一門方ヘ大御目附以上御用又ハ内用向ニ付差越候筋

ハ、前以家内中ヘ申込置、表向可差越候、其節ニ同役

ノ内ヘ届置候筋可然哉、

一 大身分ヘ大御目附以上右同断ノ節ハ互ニ申込置、前条同断表向可致面会哉、

一 御女中方、右同断可有之哉、

一 御役柄ニ付对客又ハ面会ノ節前以申込、振掛差越候人ヘハ面会無之、出勤前召呼候筋可然哉、尤、御側役以上申込向、八ツ後ニテモ差越候人ハ都テ夫々格式ノ服ニテ差越可然哉、

一 大身分初家柄ノ面々家格通相嗜、格別輕キ方ニハ不差越、不断ノ交敵重有之候様被仰渡置候、且格別輕キ向ノ儀ハ与力以下ト被仰渡置候間致吟味、左之通申出候、

一 御家老与以上ノ面々ハ可成長其与合中ニテ相交候様可被致候、右以下トテモ依訳ハ出入可有之候ヘトモ、其

節ハ尊卑ノ差別屹ト相分り候様被取計候様可有御座候、^{⑨ト}一 嫡家末家互ニ出入^{⑩ト}ハ有之候得共、依家柄ハ末家数多有

之、不断ノ出入繁候ニテハ却テ見聞モ疑數相見得可申哉、^{⑪ト}本家嫡家互ニ出入、末家ノ儀ハ用向ニテ召呼候儀

ハ不苦、尤、末家ノ内身近親類ノ外此方ヨリ差越候儀ハ不相成筋可有之哉、

右ケ条ノ儀ハ、大御目附以上御役名ニテ被仰出候御書

付ニハ出入沙汰不相見得候ヘトモ、奥掛ヘ被仰渡候趣ニ準候ヘハ、右振合有之候テモ可然哉ト相見得候、且監物ヨリ末家ノ者内用頼願出候付テハ、兼テ出入不苦筋ニテ候、不都合ニモ御座候間、右通致吟味候、

八月廿一日

右、朱書之通致吟味、張紙ヲ以申出候処、弥吟味ノ通可相心得旨、伊賀殿ヨリ致承知候事、

大御目附

但、右ノ趣ハ大御目附以上心得等ノ儀ニテ、末々ヘ為被仰渡儀ニテハ無之候、

二八五四

一大目附以上並奥動向ノ諸人ヘノ交、分テ被 仰出置、

表同役人ノ儀モ世上徘徊入交等ノ趣、去年申渡有之、

面々心得違ハ無之筈候ヘトモ、町奉行以上ノ儀ハ御役柄ニモ候故、支配下下役等ノ宅ナト②式之ヘ或ハ吉凶事等付、

表向見廻ノ外謾ニ相越候儀ハ遠慮可致事候、用事ニ付

自分所ヘ差越候程ノ儀トテモ取次等ヲ以可相違、不致

面会候テ不叶節ハ依向服柄相改、脇方出会・世上徘徊

ノ折モ略服等ニテ軽々敷無之様相心得、内証向ニテ無

差別入交候儀ハ有之間敷候、右以下御役人ノ儀モ支配下下役等ヘ対シ右ノ心得ヲ以相慥、屹御役柄ノ詮相立候様可有之旨被仰渡、

天明八申四月廿八日

(麥刈実祐)
大炊

二八五五(の1)

一町奉行・御納戸奉行・御船奉行・高奉行・物奉行・山

奉行・御代官・御家老座・御勝手方・大目附座・御用

部屋・吟味役・御徒目付・横目・蔵方目付、故御役又

ハ御座柄動向ニ付出入等ノ儀、去ル酉年別紙ノ通申渡

有之候処、近来緩セ相成候向モ有之由相聞ヘ不可然候、

向後無取違、屹ト可相守旨可申渡候、

寛政七年卯九月

(市田教國)
勘解由

(名越信篤)
右膳

(二八五五の2)

別紙

一町奉行

右御役場ノ儀ハ、専町家引受、多人致支配事候付テ

ハ、万端町人共御役場外ニミタリニ為致出入候儀ハ堅相慎可申候、左候テ、右通多人數ノ支配、殊軽キ者共候ヘハ、書役ノ儀是又入念、町人共出入ミタリニ無之様ニトノ趣、就中内談向ニ付テハ申込等不承様兼々堅申付、平生質素ニ心掛可為精勤候、

一 御船奉行・高奉行・物奉行・山奉行・御代官

右御役柄ノ儀ハ、專御勝手方向御出方等ニ相掛リ候動柄故、右ノ儀ニ付、大家ノ向ヲ初、諸所ヨリ内意事等ニ付テ逢様差越又ハ伺申込等手前ニテ致内談等ノ類ノ儀ハ屹ト可相慎、勿論町家ノ者共猥ニ為致出入候儀ハ、猶以有之間敷事候、右へ相勤候書役ノ儀モ同斷ノ振合ニ相心得、平生質素ニ心掛可相勤候、

一 御家老座・御勝手方・大目付座・御用部屋

右御座柄ニ相勤候書役ハ、万端重立候御用向致取扱候ニ付テハ、大家之向ハ勿論、其外無用ノ方へ常々出入等致間敷事ニ候、其御用ノ程ニヨリ自然ト及面会候向ハ左モ可有之、其分無益ノ交リ等決テ致間敷候、畢竟御用向不洩様ニトノ儀第一ニ候条、其心得ヲ以屹ト相慎、平生質素ニ心掛可致精勤候、

一 御納戸奉行

右御役場ハ、格別成勤向且御勝手向ニ相掛候儀ヲモ致取扱候ニ付、諸向交等ノ儀ハ奥向一統ノ場ニテ兼テ被定置候通ニ候、御用ノ程ニヨリ自然ト致面会候向ハ左モ可有之候ヘトモ、其御用ニ相掛候内意書ノ申談等ハ屹ト可相慎候、勿論町家ノ者トモ猥ニ為致出入候儀ハヲノツカラ有之間敷候、将又右へ相務候書役ノ儀モ御役場ノ事故、常々無用ノ方へ出入、又ハ内意事ノ申談等、或町家ノ者共猥ニ為致出入候儀共無之様相慎、平日質素ニ心掛可致精勤候、

一 御勝手方吟味役

右ハ、祖父・親子兄弟・伯叔父母・娉嫁舅姑・嫡家末家へハ出入、從弟・甥姪ハ手前へ召呼候儀ハ不苦候、其外御一門方並差立候人体ハ勿論、親類縁者タリトモ出入被差留候、無抛出入不致候テ不叶儀有之候ハ、可願出候、尤、是マテ大家ノ向等ヨリ内用ノ儀共被願置候者有之候トモ、已来相止候様可致候、勤方ニ付面会等ハ有来通表向致对面、内談向ノ面会曾テ有之間敷候、

一 御徒目付・横目・蔵方目付

右勤向、面会见聞ニ相掛、格別ノ御用筋取扱ニ付テハ、

二八五七

役場ノ事故、大家ノ向ハ勿論、其外無用ノ事ニ常々出入或ハ無益ノ交等致候儀共ハ決テ致間敷候、将又町家

一犬追物稽古場

ノ者共猥ニ為致出入候儀ハ、尚以有之間敷事候条、屹

一馬場

ト相慎平生質素ニ心掛可致精勤候、

一弓場

以上、

一鎗術ノ場

以上、

一剣術ノ場

聖堂・造士館・演武館・神農殿

右ハ、別紙ノ通諸稽古場被仰付、右場々へ相建筈候間、聖堂一囲ノ境ヨリ新小路マテ、堅横間敷相究、鹿絵図可差出候、此旨御普請奉行へ可申渡候、

(安永二) 同年巳二月

左京

二八五六

一今度聖堂・講堂其外諸稽古場マテモ被相建候、此儀ハ

二八五八

諸人^問学文芸術一涯改テ相励出精仕、猶以往々御用相立、

一御下屋敷下空地ノ内

尤、風俗モ正敷方ニ相成候様被 思召上、畢竟 御領

一聖堂屋敷一囲

國中為教学、右之通御造立被仰付思召ニ候間、難有承

但、御下屋敷下通六拾五間、南泉院四拾七間余、枿

知可仕旨被仰渡、

形ヨリ新橋通折廻シ二十五間余・拾一間余・三十九

安永二年巳三月

(樺山久智) 左京

間余、稽古場境通五十八間余、

右之通、聖堂地面被仰付候、

一右同空地ノ内、聖堂屋敷境ヨリ新小路マテ、諸稽古場

一冊

⑦ 右之通被仰付候、△

右之通、御勘定奉行へ申渡、御普請奉行其外可承面々

へ可申渡候、

安永二巳二月

(權山久智)
左京

二八五九

一 聖堂成就ニ付、来ル廿九日ヨリ積菜ノ規式被仰付候旨被仰渡、

同年巳八月十二日

二八六〇

一 此節御建立ノ聖堂成就ニ付、来ル廿九日御遷座、積菜ノ規式被仰付候間、右相濟候以後、平日御領国中面々不依貴賤勝手次第参詣御免被仰付候、然トモ到テ凡下体ノ者ハ参詣不相成候旨被仰渡、

一 聖堂へ平日諸人参詣ノ次第

一 参詣ノ人ハ、入徳門小門外ニ刀ヲ為持置、小門入口ニ

ハキ物技置、参詣可有之候、

但、御一門ハ小門入口ニ刀ヲ可為持置候、

一 御一門以下諸土迄堂内於拜席拜礼有之、外城衆中ノ儀

モ同断拜礼可致候、

一 士ノ外ハ杏壇門外ニ脇指差置、堂外唐戸坂ニテ拜礼可

仕候、

但、大小帯候者ハ刀門番所へ可差置候、

一 琉球人並旅人、参詣不相成候、

一 服忌穢ノ人参詣不相成候旨被仰渡、

安永二巳八月十六日

二八六一

一 来ル廿九日積菜ニ付、仰高門内ヨリ敷付等有之、家来下人召入候儀不相成候条、仰高門外ニ刀持セ置、参詣可有之候、以来積菜ノ節モ右之通可被相心得候旨被仰渡、

(安永二年)
同年巳八月廿二日

(島津久金)
左中

小林中太兵衛

二八六二

一 講堂学業ノ次第

一 組方講釈、講堂へ被相直、来月ヨリ隔日四ツ後講釈被仰付候、

一 与頭三四人ツ、此内ノ通可罷出候、

一 士ハ勿論、外城衆中ノ儀モ聴聞罷出、其外家来・寺家

マテ至テ志厚ノモノハ末席ヨリ聴聞申付候、

一 士ノ子共、於講堂素読等致度所存ノ人ハ勝手次第可罷

出旨被仰渡、

巳八月

テ惣名ヲ聖堂ト唱来候得共、造士館ト可相唱候、

一 諸稽古場ノ儀、演武館ト可相唱候、

一 聖堂・諸稽古場御差分銀ノ儀、府学料ト可相唱候旨被仰渡、

天明六年九月

(喜入久福)
安房

二八六五

一 銀二兩ツ、御一門

一同一兩ツ、大身分

一同一兩ツ、大御目付格以上

一 青銅二百疋、寺社奉行ヨリ御近習役マテ

一同二百疋、御留守居ヨリ納殿役人マテ相中

一同三百疋、御普請奉行以下御役人相中

右、二・八月初ノ丁日、釈菜ニ付、以来右通献納被仰付候間、当八月釈菜ノ節ノ通、納方可有之候、

一 無役ノ一所持・一所持格・寄合・寄合並、致献納度存候人ハ、不依多少心落次第講堂へ可被致献納候、

一 諸士以下町家マテ致献納度存候者ハ、不依多少心落次第、是又講堂へ可致献納候、

二八六四

一 聖堂掛ノ儀、御国ノ学校所ニ候処、未名目無之、是マ

天明二寅七月

二八六三
(二八六二号行間朱書)

一 講堂ニテ式日ノ講談又ハ会読等ノ出席ノ面々、以来聖

堂奉行ヨリ致星合、翌月初、星帳諸稽古所係御目附方

へ差出候様被仰渡、

一 外城衆中又ハ町・浜ノ者ニテモ致猷納度存候者ハ、右
同断ニ・八月初ノヒノトノ日積菜、已来右之通可相心
得候、

右之通被仰付候旨被仰渡、

安永二巳十二月

左中

二八六六

一 林家へ諸士学文入塾ノ儀、是マテ其身ヨリ願出来候へ
トモ、向後聖堂へ願出、吟味ノ上聖堂奉行ヨリ可申出
候、其外他国ノ学講所へ入学ノ儀モ同断可相心得旨、
被 仰出候段申来候条、此旨聖堂奉行へ申渡、可承向々
へ不洩様可申渡候、

天明五巳九月廿二日

二八六七

一 安永二巳九月、神農堂御造立ノ儀被仰渡、
一 神農堂成就ニ付、来ル十七日(重要) 太守様被遊 御参詣候
旨被仰渡、

安永三年三月

二八六八

一 此節神農殿御造立有之、且医学院マテモ被相建、医書
講談被仰付、往々医術精密相成、御領國中諸人療養ノ
益ニ相成候様ニト御憐愍ノ思召ヲ以被 仰出事候、然
ハ医道修行ノ面々専心掛出精不致候テ不叶事候、当分
講釈聴聞ニハ致出席管候へトモ、聴聞ノミニテ差置候
テハ古書ノ意味致会得候儀不厚管候間、自今ハ初心ノ
面々式日相立、於医学院講習・討論・会読等可致候、
其節ハ当分講談医師ノ内ヨリ一兩人ツ、繰廻致出席、
意味判断可致候、尤、作法正敷、礼讓ヲ以相交、猥無
之様可相心得候、右会席へ致出席候者ハ御城下士ノ儀
ハ勿論、外城衆中・足輕・家来・町人ニ至り候テモ志
有之面々ハ出席可致旨被仰渡、

安永三年四月

二八六九

一 張番所詰物頭
一 締方御目附
一 右同横目

一 御名代方勤表御小姓

一 右同御茶道

一 御家老方勤表坊主

一 御供所詰御包丁人頭

一 右同御包丁人

一 右同御料理役

右、於聖堂当秋ヨリ毎年春秋積菜ノ節、右之通勤方被
仰付候、

安永二己七月十二日

二八七〇(の1)

一 講堂学規ノ次第ハ先年被定置趣有之候処、猶又此節別
紙之通 御沙汰被為在、学校中へ申渡候、依之致学問

候向等ヲ始、何レニモ承知仕候様、諸向へ可申渡置候、

寛政七卯正月

(市田教頭)
勘解由
(山田有義)
伯耆

(二八七〇の2)

別紙

一 学校中へ

学文^⑩ハ人ノ人タル職分ヲ尽ス儀ニ候、臣子トシテ^⑪忠

孝ノ実ヲ好ミ、節義ヲ嗜候ヲ真ノ学問ト可心得候、仮

令数万卷ノ經史ヲ博覽強記シ、講説イカホト巧ミニ有

之候テモ、其実行ニ薄キモノハ却テ風俗ヲ破候間、其

段能々弁別致シ可相慎候、

一文芸モ学問科中ノ一端ニ候ヘトモ、夫ノミニフケリ候

モノハ多ク本業ヲハスレ、浮靡輕薄ノ陥リ、其害不少

候、

但、文芸ヲ学文ト心得、実行無之モノハ、タトヒ才

学スケレ候テモ擢用有之間敷候、

一 学校ハ礼義第一ノ場ニ候、^⑫長ヲ崇敬候ハ勿論、等輩

モ互ニ遜讓ヲ先トシテ可相交候、師員專ラ此旨ヲ以、

能々可致教導候、

一 師員ハ子弟ノ教育ヲ專トシ可致事ニ候、若自己ノ読書

作文^⑬ニフケリ、其職ヲユルカセニイタスモノハ可被

退候、

一 学問等相進^⑭、行義正敷、才幹有之モノハ、自其身相

当ニ擢用可有之候、

右、学規ノ次第ニ付、先年被定置候ヘトモ、猶又此節

前条之通 御沙汰被為在候間、何レモ慎テ可相守者也、

寛政八年辰正月

二八七一

一寛政三年(二年戌カ)亥五月廿四日、松平越中守様被成御渡、京極

備前守殿ヲ以被仰渡候御書付

林大学頭(信敬)へ

朱学之儀ハ、慶長以来、御代々御信用ノ御事ニ候、

已ニ其方家代々右学風維持ノ事被仰付置御儀候へハ、

無油断正学相励、門人共取立可申管ニ候、然処近キ頃

世上種々新規ノ説ヲナシ、異学流行、風俗ヲ破候類有

之、全ク正学衰微ノ故ニ候哉、甚不相濟事ニ候、其方

門人共ノ内ニモ右体學術純正ナラサルモ折節ハ有之候

様ニモ相聞へ、如何ニ候、此度聖堂御取締嚴重ニ被

仰出、柴野善助(彦)・岡田清助儀モ右御用被 仰付事ニ候

へハ此旨申談、急度門人共異学相禁之、尚又不限自門

他門申合、正学講究イタシ、人材取建候様相心掛可申

事、

二八七二

示諭

一御当家開国ノ砌、宋学御取立被成、統テ聖堂御建立有

之候儀、全ク風俗正敷相成、人材致成就候様ニトノ

御美意ニ有之候、然処追々種々新奇ノ学流起リ、我等

門人ニモ右体ノ学致シ候モノ有之候様相聞、今度蒙

御察度候段、於我等モ恐入、失面目候仕合ニ候、此

後ハ門下一統正学致出精、每物相慎候様急度相心得可

申儀ト存候、修行方ノ儀ハ追々可申聞候、

亥五月

大学頭

二八七三

一先日申達候通、弥申合、正学相励可申儀勿論ノ事候、

乍去面々見込モ有之物ニ候へハ、我等家学存念ニ不叶

儀モ有之間敷トモ難申候、門人ノ内左様存込候者モ有

之候ハ、勝手次第門人名面相除可遣候間、無遠慮可

申出候、尤、此儀ニ付、聊隔意有之儀ニハ無之候、

但、当時ノ儘ニテ罷在候、内々異学ヲモイタシ候様、

追テ於相聞ハ屹度取扱方有之候間、兼テ其旨申聞置

候、

亥五月

大学頭

二八七四

一 聖堂御創立ノ意趣ハ人々承知ノ前ニ候、学問ハ究理ヨ
(良カ)リ領知識ヲ開發致事候ヘハ、程朱ノ学ヨリ外無他事候
 処、間ニハ偽学ノ者モ有之由相聞得不可然候、依之講
 釈人者勿論、入学ノ徒実程朱ノ正学ヲ相崇、一切異説
 ヲ不可交旨、先年被 仰出申渡置通ニ候、今度從 公
 義林家へ被仰渡、門人中へ申渡ノ趣、別紙ノ通ニ候間、
 弥先年被仰渡候 御趣意、聊無忘却堅可相守候、
 右之通、聖堂掛ノ面々へ申渡、向々へモ可申渡候、
 寛政三年亥六月三日 (比志島範章)
 要人

二八七五

昌平国学之記

天下之本在国、国之本在家、家之本在身、身不修而家
 齐、家不齐而国治、国不治而天下平者未之有也、故欲
 平天下者先治其国、欲治其国者先齐其家、欲齐其家者

先修其身、修其身之要、蓋本於正心、誠意而自致知格

物始此大学之所以不可不設也、今 尊大君幕下当国之

十有一祀為元禄三年秋七月、大降 台命新営聖殿算月

者六、算日者百有余旬、至臘告成、改其地曰昌、名其

殿曰大成、別設学舎、博延生徒、講習討論、常々而在

吟唔之声、琅璅之響不舍昼夜、負笈担簷重爾接踵、往

来絡繹、更天下之耳目、恢日域之風化、於往古於来今、

於本朝於異邦、赫々焉照々焉、尽美矣尽善矣、五教於

是乎敷、於是乎成、国子監林公章創之、中大夫柳公澗

色之、雖有大君之明徵二公之力、則未必至此、雖有二

公而不遇 太君、則亦莫能為之、上下相交、天人相合、

蓋千載而一時也、聖人之道不行於今、則亦未如之何也、

已矣、博之弗類也、謬辱 師命抽在群書生之上、十月

所視十指所指、不任其任矣、乃推 上之心、舉 師之

命、質以聖賢之言、揭示于衆曰、天下何為而平国、何

為而治家、何為而齐身、何為而修心、何如則可以正意、

何如則可以誠矣、有致知而已致知之方、何如在即物而

窮其理也、蓋人心之靈莫不有知而天下之物莫不有理、
 惟於理有未不窮故、其知有不尽也、父子之親、君臣之

義、夫婦之別、長幼之序、朋友之信、物之理也、知父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序、朋友之信、知之事也、親何如而親、義何如而義、別何如而別、序何如而序、信何如而信、知之而窮之、推之而盡之、則所謂物格而知至也、知既至而後存其所知之、理於中而於一念之發無一点之忘、則意誠而心可得而正矣、所謂忿懣恐懼好樂憂患者心之用而人不能無者也、一有之而不能察、則欲動情勝而其用之所行或不能不失其正矣、於此察之而不失其正、則身之所處不至陷於所偏而無不修矣、身既勝則於家於國於天下、齊之治之平之、其亦舉而措之耳、此古之大學所以教人之法也、而聖經賢傳之文粲然明白言之長也、姑舍之、今之學者多事訓詁記誦之習、或經旨未明或躬行未粹者有之而不足取焉、間有離訓詁記誦之域者或談禪或譏聖、謂聖學為淺近、謂禪理為高明、亦有之矣、非我徒也、我何論之、又有自許其身以聖人處之者、其言曰、學庸非正經也、濂洛非本原也、我能得我聖人之心也、我能承我聖人之統、遂至以孟子為縱橫之士、以文公為迂濶之老、如是乃聖門不可容之罪人也、國有典刑將不免之悲矣、若夫飾文詞

事薄繪者山川之砂礫粟米之秕糠問實理則不與焉、尋正味則無在焉、彼哉然則大學之道何在哉、經曰、在明明德(親之)在新民(至力)在止於止善、夫格物致知誠意正心者所以修身而明明德之事也、齊家治國平天下者推修身之方以新民之事也、格致誠正而身修者明々之止於至善也、身修而家齊國治天下平者新民之止於至善也、豈有他哉、從事於斯而無少間斷學而習強不息、言之則可行、行之則可言、愚者足其不及、智者損其所過、言必本於大中至正之理、行必進於至公無我之道、以明其德、新其民則至善之地將以履之得以處之而上則不負、大君之志下則不虛、二公之功乎此國學之所由設也、故曰、天下之本在國、國之本在家、家之本在身、自天子以至於庶人、老是皆以修身為本、其本亂而未治者未之有也、嗚呼、自西自東自南自北與其進也、不與其退也、蓋今日之言、則天下之公言也、

元祿四年辛未五月十五日 昌平學職菊池九万記

二八七六

安永六西

一六月聖堂積菜ニ付、寺社奉行以下御役人並無役ノ中通
マテ御物御取替ヲ以献納銀ノ首尾、物奉行受込ニ候へ
トモ、御用多取込候間、聖堂方首尾被仰付度、物奉行
申出趣有之、物奉行方ニテ致首尾候通、聖堂方受込ニ
テ被仰付候、此旨可承御役々へ可致通達旨、市正殿御
差図ニテ候、以上、

酉八月廿日

高橋縫殿

二八七七(の一)

一聖堂方銀錢首尾方ノ儀ニ付、此節左之通吟味仕候、
一春秋積菜ノ節、御献納白銀三枚、御目錄相添、以御
使番受込ニテ取仕立、聖堂方保ノ内御使番役所へ前日
呼出、御目錄・銀子共引渡候様ニ被仰渡置候ニ付、御
目錄並銀子マテモ聖堂方へ受取来候、然トモ已来ハ御
目錄マテヲ御使番ヨリ聖堂方へ引渡、銀子ノ儀ハ物奉
行受込ニテ金藏へ入付候筋被仰付、其段被仰渡奉存
候、

一大番頭ヨリ御役人^(空目、迄はカ)引札有之、同断ノ節、寺社奉行
ヨリ御側役並マテ相中青銅二百疋、御留守居ヨリ御広

敷頭マテ相中青銅二百疋、御普請奉行已下御役人限相
中青銅三百疋献納被仰付、積菜前日聖堂方へ納方有之
候様被仰渡置候ニ付、目錄並現錢マテモ聖堂方へ受取
来候、尤、右現錢ノ儀、最初ハ御物方御取替御使番取
仕立ニテ聖堂方へ受取、追テ物奉行所引付ヲ以、銘々
人別返銀上納有之候処、其後聖堂御差分銀方首尾方都
テ聖堂方受込被仰付候ニ付、右献納銀錢ノ儀モ聖堂方
御取替ノ筋ニテ金藏ヨリ聖堂方へ取入、追テ聖堂方引
付ヲ以、銘々ヨリ金藏へ上納有之事ニ候、然共是又以
来ハ金藏ヨリ聖堂方へ現錢取入方ニ不及、先目錄マテ
ヲ聖堂方へ受取、現錢ノ儀ハ当分有来通、聖堂方引付
ヲ以、銘々ヨリ上納有之候様被仰付候段、被仰渡奉
存候、

但、本行献納銀ノ儀被仰渡候已後ニ、大御番頭・聖
堂奉行御役被相建候ニ付、当分ハ大御番頭ヨリ御側
役並マテ、御留守居ヨリ聖堂奉行マテ相中献納二百
疋ツ、ニテ御座候、

一外城郷士其外御城下並外城ノ町・浜マテハ引札有之、
同断ノ節、外城郷士其外御城下並外城ノ町・浜マテモ

心落献納ノ儀ハ、銘々支配ノ所へ取揃、聖堂方へ相納候筋被仰渡置候ニ付、郷土献納^⑨錢ノ儀ハ地頭所次書ヲ以聖堂方へ差出、聖堂方ヨリ受取書相認、致割印候テ相渡候様仕来候、^{⑩然共}已来ハ是又献納目録相認、聖堂方へ差出、現錢ノ儀ハ聖堂方引付ヲ以、夫々ヨリ直ニ金藏へ致上納候様被仰付、其段被仰渡度奉存候、

但、家来・町・浜ヨリノ心落献納有之候ハ、皆共
本文ノ例ニ準候様被仰付度奉存候、

右之通、聖堂方へ現銀錢献納有之候ニ付、积菜献納銀錢ノ儀ハ銘々員数相改候テ受取置、以後都合員数相改、箱又ハ櫃ニ入付、聖堂奉行覚悟又ハ聖堂方文庫へ格護仕候、积菜外ノ節、献納銀錢ノ儀モ右同様ノ例ニ仕来候、尤、积菜献納銀錢員数ノ首尾ハ早晚积菜後ニ申出置、且又兩积菜外ノ節ノ献納銀マテモ惣合員数相記、翌年初、首尾申出候様ニ仕来候、左候テ、聖堂方文庫格護ノ銀、^{⑪錢}時々出入ヲ以、金藏へ預置、五六年ニモ及候節、屯ノ献納銀錢惣合イタシ、御物へ御借入ニ相成候様仕来候、右通ノ仕向ニテ首尾方少モ無相違只今マテ済来候へトモ、右通銀錢出入致取扱候儀ハ畢竟

藏方勉向同様成筋ニテ、通例諸座仕向ニモ不相並候ニ付、何レ往々当分ノ仕向ニテハ相濟不申筈ノ儀ニ御座候ニ付、此節ヨリ銘々右ヶ条之通被仰付度儀ト吟味仕候、尤、积菜ノ節、御献納銀並御一門家已下郷土等マテ献納ノ儀ハ、御目録並目録ヲ聖前へ相備、規式相濟申事候故、現銀錢ノ儀ハ追テ金藏へ納方有之候テモ差支ノ儀ハ無御座候、弥右吟味ノ通被仰付儀ニ御座候ハ、积菜後首尾ノ儀ハ早晚献納目録面マテノ員数ヲ申出置、翌年初ニ相成候節、金藏納ノ現錢員数ヲ相記、首尾申出候様被仰付度奉存候、右ニ付テ、^⑫去ル子年ヨリ当年マテ三ヶ年献納銀錢、聖堂方文庫格護又ハ金藏へ預置候錢、此節都テ引付ヲ以、聖堂方ヨリ金藏へ入付、何程入付候段首尾申出候様可仕候、此段申上候、以上、

天明二年子八月廿一日
聖堂奉行^(正題)
山本伝藏

(二八七七の二)
張紙

本文御女中様方ヨリ御進納銀有之候節、御広敷頭ヨリハ分達テ首尾申出ニ不及、其外都テ申出ノ通申付候条、此旨申渡、首尾懸へモ可申渡候、

子九月
(書入久備)
主馬

取次
平田平太左衛門

図可差出候、此旨御普請奉行へ可申渡候、
安永二巳二月
(權山久智 左京)

(二八五七号文書に同じ)

二八七八

一 聖堂積菜ノ節、寺社奉行以下諸御役人、無役ノ御近習
通マテ、献納物目錄認方並名書取揃方ノ儀共、御使番
受込ニ候ヘトモ、以来聖堂方受込被仰付、

二八八〇(の1)

安永九子二月廿一日

一 此節御造立ノ諸武芸稽古場成就ニ付、来月朔日ヨリ別
紙日賦ノ通、夫々師匠家へ相付罷出可致稽古、外城衆
中致稽古度所存ノ者ハ、是又師匠家へ相付罷出可致稽
古候、

演武館

右之通被仰渡候間、与中・諸外城へ不洩様ニ可申渡候、
(安永二年) 巳十月
(島津久金 左中)

二八七九

(二八八〇の2)

一 犬追物稽古場

一 初日、川上庄八郎

一 馬場

一 二日目、川田彦七・菱刈新五兵衛

一 弓場

一 三日目、川上庄八郎

一 鎗術之場

一 四日目、町田佐次右衛門

一 劍術之場

右人数、馬、

右ハ、別紙之通諸稽古場被仰付、右場々へ相建筈候間、

一 鍵、梅田九左衛門

聖堂一囲ノ境ヨリ新小路マテ、豎横間敷等相究、鹿絵

一 長刀、佐久間勘左衛門

右兩家、隔日、

二八八一

一初日、東郷長左衛門・[▽]平田平右衛門△

一此節聖堂並諸武芸稽古場被相建候ニ付、諸御役人ノ儀

一二日目、高田茂太夫

モ御用ノ透有之節ハ講堂講釈ノ席ヘ罷出、諸稽古場ヘ

一三日目、伊集院理安

差越、師匠家ヘ相付致稽古候様被仰付候、

右人数、弓

右之通可申渡候、

一初日、東郷藤右衛門

(安永二) 巳十月

(島津久金) 左中

一二日目、田中喜助

一三日目、大山角四郎

二八八二

一四日目、木藤太郎右衛門

一師匠家ノ面々・諸武芸稽古場御役人ハ、ハツ後ヨリ可

一五日目、和田源太兵衛

罷出候、

右人数、劍術並居合前稽古所、

一御番人、御番当日ハ御番頭ヘ申出置可罷出候、

一初日、大脇主右衛門・野崎次郎左衛門・小野郷右衛門

一勤方有之人ハ御用不差支様同役申談、頭人ヘ申出置可

一二日目、東次郎左衛門

罷出候、

一三日目、有川彦左衛門

一小番・新番ノ儀ハ上下致着候様被仰付候、

一四日目、[▽]加藤九兵衛△

右之通被仰渡候条、如例可申渡候、

[▽]一五日目、△鈴木弥藤次

安永二巳十一月

左中

右人数、右同断、

二八八三

一早水孫次郎・木脇権一兵衛・川上弥三太・木村四郎左

衛門

右、諸武芸稽古場係リ被仰付候、

安永二巳十月

二八八四

一講堂並武芸稽古場へ大御目付已上御用ノ透有之候節、

稀ニハ致出席候様被 仰出候、

但、講堂へ被差越候節へ前以案内申遣ニ不及、武芸

見分ノ節へ前日与頭へ可相達候、

安永二巳十月

二八八五

一諸武芸稽古人数、稽古所へ罷出候節へ、師匠家へ星帳

取仕立^①致星合、翌月初武芸掛御目付へ差出候様可

致候、

一師匠家ニモ罷出候ニ付テハ、諸稽古人数同前、星帳ニ

相載可申出候、

一師匠家他行ノ節へ、跡差引人何某へ相頼置候段、武芸

懸御目付へ首尾可申出候、尤、式日当日何ソニ付差支

候節ハ差引人ヨリ星帳ニ可記置候、

一星帳ノ儀ハ武芸方係御目付ヨリ時々可差出候、

右之趣、大御目付衆^(兼別実務)ヨリ口達覚書ヲ以、諸師匠

家へ被仰渡、

安永十年巳三月

二八八六

一武芸致見分候節、稽古人数ノ内勉方有之面々ハ、当日

別星帳^①ニテ罷出候様被仰渡、

安永七戌八月廿一日

宗門改

二八八七

一切支丹改ナトノ儀御尋被成候ハ、面々宗旨・檀那寺

相究、寺証文取置、生子モ同前ニ檀那寺相究申候テ、

五ヶ年ニ一度ツ、宗門札改ト申候テ出入証文・寺証文

見届、木札ニ名書・宗旨附仕、國中男女不殘渡置申候、

是ヲ手札ト唱申候、國中ニテ縁与又ハ住所ヲ替申⑧候、節

ハ右ノ手札ニ札元ヨリ証文相添候、其居先ヨリモ札元ノ証文取置申候、乍其上毎年人別ニ宗門改兩度ツ、堅固ニ仕、其支配頭ヨリ役所へ書物相調申候、

一宗門改ノ支配ハ誰某仕候哉⑧ト於御尋ハ、家老之者一人引受支配仕、其外下役段々ニ御座候、左候テ、改無別条節、改証文切支丹御奉行様へ毎年八月相調候節、家老三人ノ印判ニテ差上申候、

一一向宗御禁制ノ事於御尋ハ、当国ノ一向宗ハ上方筋ノ宗旨ニ相替、新宗ト申候、邪法ラシク、障碍ヲナシ、同宗ノシタシミ強ク、徒党ヲ結ヒ、君臣ノ礼ヲ背キ、父子ノ分モナク、無作法ニ有之、仇ヲナシ候儀モ御座候付、代々制被申事候、

上使御答書 宝永七年

二八八八

札改条目ノ内

一御一門家名方夫婦・嫡々夫婦、手札御免、隠居後室同断、

一独礼ノ面々、同断、

但、独礼ニテ無之人妻、独礼格ノ人ニテ候ハ、縁与内夫婦共手札御免、隠居後室同断、

一独礼ノ人実母、手札御免、

但、独礼格ノ人女子計出生ノ実母モ手札御免、

一御一門方二男ヨリ末子マテ息女方モ家内ニテ⑧被罷居候内ハ手札御免、

但、別立又ハ養子縁付ノ節ハ其家格ノ通、

一御城代・御家老・御側詰・若年寄・大目付・大目付格、其身夫婦手札御免、御役御免以後ハ可為手札事、

一万石以上ノ面々、其身夫婦・嫡々夫婦・隠居後室マテモ手札御免、

一御一門・御家老・一所持・一所持格・寄合・寄合並・

御側御用人・御側役・同格マテハ、札改帳⑧内諸証文役人印形、

一右何レモ直子出生候ハ、近所ノ士不及証判、

一御一門方四家家中士ハ、手札無年付、名字付記之、主人ノ仮名不及肩書、家々一所領地ノ郷ヲ可書記、召仕候女ハ内女ト記、是又無年付、帳面ニハ家中士・内女

共年附、

一御一門家来、別府・中村・肥後・猷納^(新納)・曾木・日野・

町田・川上・町田・近藤・栗川・矢野十二家ハ、其身

夫婦並嫡子夫婦マテ手札・帳面共無年付、尤、娘ハ諸

士同然縁与被仰付、俗生付無之、

一右四家家来、梅元七左衛門・緒方伊左衛門跡・中村鉄

五郎・川上左織・比志島方之丞・本田源右衛門・伊集

院八兵衛・安山三左衛門・梅元武右衛門・樺山喜内・

託摩勘兵衛・浦川家跡十二家ノ儀、延享三寅年、依願

前条ノ十二家差次ノ格ニ被仰付候間、手札・帳面・縁

与等前条同断、

一寄合並以上ノ面々、妾服ニ嫡子致出生、其妾ヲ実母札

ニ願出候儀ハ、札改間ニ申出、御免ノ人ハ御用人証文

被出置候間、右証文見届、実母札可出候、尤、手札・

帳面共ニ年付可相除事、

一寄合並以下ノ面々実母札願ノ儀モ、右同断御免ノ者ハ

御勘定奉行証文被出置候間、右証文見届、実母札可出

候、尤、手札並帳面共ニ年付可相記事、

一以前ヨリ寄合並已上ノ面々妾年付有之、実母札申受又

ハ寄合並以下ノ者妾手札^②年付相除、実母札取来候者

ハ有来通ニテ被差置候間、其通手札可為取事、

一達 貴聞縁与被成御免候諸士ヘハ、足輕・御口ノ者・

御数寄屋仕坊主又ハ家中士名字付者ノ娘・内女札ノ者、

縁与不被成御免候、乍然本妻離別又ハ死後罷成、右体

ノ者ノ娘内々ニテハ妻ニ致置、嫡子且又二男以下致出

生候ハ、実母札御免可被成候、尤、御作事奉行以下諸

役人並二百石已上面々ヘモ、以前ノ通右格式ノ者ノ娘

縁与不被成御免候事、

一出家・山伏成、寺社奉行可為証文事、

但、当山派山伏修驗宗、本山派山伏天台宗ト手札ノ

面宗旨附可有之候、

一南泉院・福昌寺・大乘院・浄光明寺・坊津一乘院

国分弥勒院・大龍寺

右七ヶ寺現任、年頭御札ノ節着座ノ僧故、手札御免、

隠居ハ可為手札事、

一志布志大慈寺事、現任紫衣ノ僧住職ノ節ハ着座被仰付

ニ付手札御免、着座無之住持ハ可為手札事、

一大奥女中ハ、士・人家来・町・浜・寺門前・在郷者ニ

テモ、手札御広敷格護ニテ奉公中無札、

一大奥女中、御次已上相勤候ハ、家来・町・浜・在郷・寺門前タリ共、土縁付御免、

但、御広敷御用人証文ヲ以、以後新札申受、俗生付・年付ニ不及、尤、首尾不宜被召下候者、家来以下ハ

土縁付可相障候、

一御半下以下相勤候者ハ、首尾好罷下候テモ土縁付御免無之、

一代々小番、幼稚ニテ御番不相勤内ハ、家来共下人ト書記、御番相勤候節ハ御格之通、家来名字附、

一小番ノ者ヘハ郷養子不被仰付事候ヘトモ、無是非願出候者ハ御小姓与ニ被召入御格ニ付、家格被相下候節ハ家来共下人札ニ可申受事、

一土生子ハ、直子無別条旨、鹿兒島ハ近所ノ土兩人証文、郷ハ五人与、無之所ハ近所ノ郷土兩人証文ヲ以、新札可出之事、

一養子成、為致家督者ノ家内ニテ手札申受候、養父母ノ養姉・養妹何ト、都テ養ノ字可書記事、

但、養父母養ヒ子致置候ハ、養父母養ヒ子何ト可

書記事、

一不達 貴聞縁与取組ノ士並諸与与力・郷士ヘ者、足輕・御小人・御口ノ者・御数寄屋使坊主又者家中土名字付ノ者ノ娘・内女札ノ者、縁与御免被成候ヘトモ、此跡ノ通、妻札ニハ不仰付候、妻札ニテ年附・妻ノ親ノ名並何方座付・家中土等ノ訳、手札帳面ニ書記可申候、親相果候ハ、兄弟又ハ家部ノ者ノ名ヲ可書記事、

一小番妾服ニ致出生候子者、其身書物、近所土兩人ノ証文ニ小番掛御用人ヨリ当人宛ノ添書ヲ以、札改奉行所ヘ申出、免許証文ニテ直子札可申受事、

一新番右同断ノ節ハ、其身書物、近所土兩人ノ証文、大番頭座ヨリ当人宛ノ添書ヲ以、可為右同断事、

一御小姓与右同断ノ節ハ、其身書物、近所土兩人ノ証文、触次組頭次書、御小姓与番頭奥書ヲ以、可為右同断事、一諸与与力右同断ノ節ハ、其身書物、近所土兩人ノ証文ニテ、御兵具方ハ肝煎、御広敷ハ小頭、夫々次書、支配頭奥書ヲ以、可為右同断事、

但、郷士永代下女腹ニ出生ノ子、直子札願出候節ハ、其身書物、五人与並与頭・郷土年寄次書、地頭奥書

ヲ以可申出候、

一 諸士家内札ニテ罷居候者娘、士筋慥成者ニ候ハ、不達 貴聞縁与取組ノ者ヘハ御免被成候事、

一 士家内札又ハ足輕・御口ノ者・御小人家内ノ者ニテモ名字附有之、足輕・御口ノ者・御小人・御教寄屋仕坊主同格ノ者ニテ筋目慥成者ノ娘、不達 貴聞縁与仕候者ニハ被成御免候事、

但、右体無名字者ノ娘ハ士ヘ縁与不被成御免候、併右腹ニ士ノ子共致出生候ハ、吟味次第、実母札ニハ可被成御免候、

一 社家・寺門前者ノ娘、士ヘ縁与不被成御免候事、

一 士並郷士ヘ下々ノ者娘縁与又者右ノ子共養子致儀御禁止候間、能々入念可相改事、

一 郷士、鹿兒島士被召成候者ノ妻子者、古札見合、相違ノ儀無之候ハ、同前手札可相達候、父母ノ儀、其家内ニ入、手札願候者、本在所ノ郷士年寄役々証文ニテ手札可出之、札之面々何某家内札、父母ノ訳肩書可有之、其外兄弟親類家内札ノ者共ハ本之在所ニテ手札可相渡事、

一 士並郷士御暇申出、家中入候者ハ、已来共ニ婦參ノ儀御禁止ノ条、若永代暇イタシ候節ハ親類ノ家内ニ相附札ヲ為取、手札・帳面本何親^(親類)ト肩書可相記候、尤、名字相除、年附可有之事、

一 士並郷士ノ妻離別イタシ、女子母方ニ付遣候娘、立帰候家内ニテ介抱難成、或右外ニテモ家内ニ罷居候女子、或離別ノ実母後之夫相果右式介抱難成、又ハ無拠訊ニ付協方家内ニテ可致介抱候間、何某何ト手札被仰付度旨、家内替之願申出候ハ、吟味ノ上、由緒於無別条ハ願之通手札可為取事、

一 諸役座付之者共、手札・帳面共ニ名字付ニテ致年附、足輕以下互之縁与御免ノ事、

一 御駕籠ノ者・御挾箱持・御食焚、数年首尾好相勤候者ハ、御見合ノ上、其身計名字付御免ノ事、

一 郷士直子有之者、致養子儀御禁止候、雖然直子定病片輪者ナトニテ其家相統難成訊有之者ハ、其段申出、地頭承届候上、養子差免候間、右体ノ者入念相改、手札可出事、

一 郷士ノ娘、諸家内中又ハ社家・門前類、年附有之家内

ニ致縁与候者ハ、其家内同前、手札年附可相記候、

一諸郷へ罷居候渡人並右村郷足輕ノ子共、其郷々ハ互ノ

致縁与、妻札ニ申請候儀御免ニテ候、其郷ヨリ他郷へ

致縁与儀御免無之事、

一飯島ノ儀ハ、一島ニテ地方ニ相替、入来者モ無之、郷

士相当ノ縁与難調候ニ付、島中百姓・浦浜・社家類、

互ノ縁与御免候間、所役人証文ニテ手札可相直事、

一志布志郷士、新地並川原田・毘砂ケ野・大河内辺路番

人共、山中故縁与ハ無之候ニ付、町人・百姓・社家・

寺門前者ノ娘縁与被成御免候、尤、余例ニハ不被仰付

候事、

但、年付・俗生付等ノ儀ハ御格之通可相記候、

一志布志田ノ浦ノ内二本松へ辺路番所被召建、番人二人

引移、定番被仰付候ニ付、縁与前条同断御免、

安永八亥年

二八八九

一高岡・綾・倉岡・穆佐社人、依願四ヶ所百姓・町人縁

与御免、

一加久藤社人、同所ニ之宮現主頭取黒木多中、同所社家、

加久藤・小杉(小林カ)・飯野百姓共・町人抔ト依願、天明元丑

年御免、

二八九〇

一帖佐願成寺門前、依願町・浜人並家来、一往縁与御免、

明和六丑十二月

二八九一

一高原狭野権現並同所東御所社家、依願郷内並近郷百姓・

町・門前へ、入縁ハ当年ヨリ先二十ヶ年御免、

(寛政カ)
寛永十二年申七月

二八九二

一高原神徳院・同所錫杖院門前へ、右同断十ヶ年御免、

右同年

二八九三

一帖佐心岳寺門前、百姓・町・浦人・家来類縁与御免、

天明六年七月

二八九四

一苗代川ノ者トモ、氏当分十七姓ノ由候、依之名ノ上ニ面々氏ヲ一字ツ、可書記候、勿論名字ニテハ無之候、格式モ此中ノ姿ニ候、且又李壽衛・仲守碩・朴兵寿・伸春秋事ハ、先年伊集院郷士ノ格被仰付候、右四人ノ者共、嫡子マテヲ郷士ノ格被召成、二男ヨリ此中ノ通ニテ被召置候、氏⑨之字御免被成候儀ハ、本国ニテ持合ノ字故、一字ツ、氏ノ字書候儀ニテ御免被成候事、

一苗代川役人、伊集院郷士格、

一苗代川へ百姓・浦浜・町其外ノ女入縁与ハ御免、縁与出候儀ハ堅御禁止候事、

但、大奥ニテ御次以上ノ御奉公相勤、首尾能御暇ノ女ハ御差図次第何方へ縁与御免被成候、尤、其節ハ御広敷御用人証文ノ上、手札可相渡候、

一鹿屋笠野原へ被召移候苗代川者、互ノ縁与出入等ノ儀、前条同断、

(卷之三十一 二〇九三号文書に同じ)

二八九五

一鹿兒島三町、縁与・養子等ニ付、右三町外浦浜へ出候者ハ、町奉行可為証文事、

但、下人下女他方へ相除候儀ハ前々ノ通、

一右同断ニ付、三町中互ノ出入ハ五人与証文、

一鹿兒島三町ノ者、縁与・養子成等ニ付、浦浜へ相除、又ハ浦浜ヨリ右次第ニテ鹿兒島三町へ入来候者ハ、町奉行所・御船手へ申出、両奉行証文ヲ以、札年可相除候事、

但、右三町且又両御船手付ノ者並南泉院・南林寺・大慈寺・大姓院(性)・海德寺・永恭寺門前ノ儀、⑨百、水主カ相立候付、町・浦浜互ノ縁与御免ニテ候、其外浦役不相勤候ハ右縁与御免無之候、

一鹿兒島町人、名頭計都テ名字付御免候間、家部ノ者マテ手札・帳面共名字可相記候事、

一諸士・家来並寺門前・社家召仕ノ下女、在郷へ入縁与ハ御免ニテ候間、主人証文ヲ以、所役人ヨリ郡方へ申出、郡奉行証文ニテ百姓妻札可相直事、

一百姓家内ヲ差分候儀ハ、檢地門割又ハ家内人数多罷成

候節、郡奉行見計ノ上、為別立儀候間、札改ニ付、名頭又ハ名字等付ノ儀、不書違様古帳引合、先改以後別立候者ハ郡奉行証文ノ通可書記事、

一郡奉行承候上、百姓養子仕置候者、且又嫡子ヘ名頭相讓候儀ハ、郡見廻・庄屋証文ニテ札改ノ節ハ名頭可相直候、嫡子[㊦]養子[㊧]外ヘ相讓候者ハ郡方ヘ△申出、郡奉行証文ニテ名頭可相究事、

但、名子出入等ノ儀ハ郡方ヘ申出、郡奉行証文ニテ可相究候、

一門地致附屬候者ハ、先名頭何左衛門、当名頭何左衛門、且又跡地方請取候者ハ当名頭何左衛門、先名頭何左衛門ト手札・帳面共可相記事、

附、百姓共男子、都テ一字相付タル者男女紛敷候ニ付、相付間敷候、

一社家・寺門前者並下女下人、在郷・浦浜ヘ入縁与ハ御免ノ事候間、致縁組候者ハ百姓並浦浜ヘ手札可相直事、
一百姓・社家、自分官名付間敷事、
一百姓男女共余方ヘ出候儀御禁止候、雖然年季ニ出候者ハ郡奉行証文ニテ鹿兒島土相抱候儀[㊨]御免許候、尤、

札元相直儀ニテハ無之事、

一百姓又ハ右野町ヨリノ者縁与ハ、庄屋・部当・郡見廻証文ヲ以、手札可相直事、

但、百姓ヘ野町ヨリ入来候儀ハ御免ニテ候、百姓ヨリ野町ヘ出候儀、且又野町ヨリ町・浦浜類ヘ互ノ出入御禁止候、

二八九六

一横井野町、勞候御取訳ヲ以、百姓互ノ縁与御免、

一高岡・綾・穆佐・倉岡野町人同断、内場百姓ヘ縁与會テ仕間敷候、

一右四ヶ所野町人、名頭並子共、伯父甥従弟類迄、名字付御免、

一諸縣郡吉田野町、百姓ノ娘縁与御免、

一飯野・加久藤・小林五日町十日野町人共、名頭計名字付御免、

一野尻野町、依願野尻並小林中百姓ノ娘縁与御免、

一吉松野町、依願百姓互ノ縁与御免、

一大口野町、依願百姓入縁与御免、

宝曆四年戊年

二八九七

一 高崎野町、宝曆五亥年、依願百姓縁与御免、

二八九八

一 高尾野野町、宝曆七丑同断、

二八九九

一 山野野町、百姓互ノ縁与並人家来下人ヨリ入縁与御免、

宝曆八寅

二九〇〇

一 諸郷野町並浦浜人ノ儀、百姓・浜人同前ノ者ニ候故、

名字付御免無之候、然共境目ノ郷ハ依願名頭計名字付

御免、

一 国分両野町、年行司相勤候者ノ家筋並乙名ノ者共ハ、

名字御免、

天明五巳正月

二九〇一

一 諸縣郡高城野町、依願名頭マテ名字付御免、

天明五巳

二九〇二

一 末吉野町人岩崎源太郎・加藤貞市・岩崎宇右衛門、恒

吉野町人岩崎戸右衛門事、依願名字付御免、

寛政十二年申五月

二九〇三

一 末吉野町人二十八人、依願右同断、

天明六年七月

二九〇四

一 志布志町人六人、境目御取訳ヲ以、脇差且足輕勤致候

節ハ大小ヲモ御免ニテ名字付御免、

天明六年三月

二九〇五(の1)

一 御船手定船頭ハ名字付、定水主無名字、

一 浦浜人縁与ニ付、他浦ノ出入ハ御船奉行可為証文事、

其所中ノ縁与ハ浦浜役人可為証文事、

一 浦浜人名頭並名字讓候者、且又家内差分別立候者ハ、

御船手へ申出、御船奉行証文ヲ以可相究事、

一 浦浜町ノ儀、浦人浜人同格ノ者ニ候間、改方ノ次第浦

浜可為同断事、

一 御船手附ノ者、上下西田町、互ノ縁与御免ノ事、

(二九〇五の2)

一 加治木毘沙門町名頭半兵衛事、加治木蔵方用銀子大分

無利ニテ差出候付、加治木役人ヨリ依願、其身一代名

字付御免、

天明七寅年

(卷之三十一 一九七一号文書に同じ)

付御免、

天明五巳十二月

(卷之三十一 一九七二号文書に同じ)

二九〇七

一 国分小村ノ有川金右衛門、兼テ心入宜御用立候ニ付、

其身一代鹿兒島町人被仰付、

天明七未八月廿七日

(卷之三十一 一九七三号文書に同じ)

二九〇八

一 山川ノ伝左衛門、桜島燃ニ付、銀子致助勢候御取訳ヲ

以、其身計名字付、鹿兒島町人同前被仰付、

天明六年正月

(卷之三十一 一九七四号文書に同じ)

二九〇六

一 高山波見浦ノ重新兵衛・重政右衛門・重新助、凶年ノ

節所中難渋者へ致合力候、心入宜ニ付、其身一代名字

二九〇九

一 内ノ浦ノ須田儀兵衛、浦中へ合力銭差出候御取訳ヲ以、

代々名字付、其身一世帯刀御免、

天明六年正月

(卷之三十一 一九七五号文書に同じ)

之助幼少ニ付、年々致上坂、彼是御用立候ニ付、其身
一代下町年寄格被仰付、

寛政九巳十二月

(卷之三十一 一九七八号文書に同じ)

二九一〇

一 福山町ノ兵右衛門・弥兵衛、桜島燃ニ付、助勢米差出
候ニ付、代々嫡子マテ名字付御免ニテ鹿兒島町人被仰
付、

天明六年午正月

(卷之三十一 一九七六号文書に同じ)

二九一一

一指宿湊浦ノ浜崎太平次・摺ノ浜ノ吉(空白、崎カ)弥右衛門、兼テ
奇特成心掛ノ者共ニ付、代々名字付御免、

寛政六寅二月

但、末子マテモ御免被仰付、

(卷之三十一 一九七九号文書に同じ)

二九一二

一指宿町ノ源次兵衛・同所宮ヶ浜ノ休次郎・摺ノ浜ノ彦
兵衛事、地頭飯屋石垣・板屏等仕調修補料差出候ニ付、

一世名字付御免、

天明六年正月

(卷之三十一 一九七七号文書に同じ)

二九一四(の1)

一 諸士ハ組帳、郷士ハ高帳、召載候、
一 士並郷士、致欠落欠戻り候者ハ遂披露、於無子細ハ無
名字ニテ親類家内ニ可入置事、

二九一三

一 水引浦人太原武兵衛事、親類大坂御藏本御名代太原道

一 諸士並郷士御咎目者又ハ欠落者、本人ノ儀ハ士被召放、
右家内罷居候者組帳・高帳被召除、親類家内札被召入
候者ハ養子・別立其外御奉公方等不被仰付候、右格式

同様共不相究者名字名乗候儀ハ勝手次第、

一欠落婦參者、札ノ面・帳面ニモ欠落婦參、他国出禁止

ト可相記候、

(二九一四の2)

一上方永代抱者儀ハ、抱主人親子兄弟ノ外ニハ札元相直

候儀不相成御法ニテ候処、御国居付者ノ儀ハ勝手次第

抱主人相直事候間、上方永代者ハ居付者同前相對相除

候儀被成御免候旨被仰渡、

安永四未十月

(卷之十三 七〇三号文書に同じ)

二九一五

一上方年季者・居付者・永代者並他国者、御国へ居付候

男女共ニ初テ手札取候者ハ年季座可為証文、

一右ノ者共並古永代者、従前々手札取来候者ハ如相札可

為取事、

一年季明、上方へ請取人無之者、居付願候ハ、抱主ヨ

リ年季座へ可申出候、不肩付内ハ年季証文ヲ以、手札

可申請事、

一問屋付稼証文ノ旅人ノ子致^(出生方)出来候ハ、其訳法様ノ書物ヲ以、札改奉行所へ申出可相究事、

一御国居付者ノ女、御当地町人女同前、縁与出入被成御

免候間、町奉行・御船奉行・主人証文ヲ以、手札可相

直事、

一金山根帳付ノ者、諸士又ハ家中者永代召抱候節ハ、金

山奉行ヨリ御勝手方へ申出、御免許ノ上相抱事候間、

向後札改奉行所不及証文、金山奉行証文ニテ手札可相

直事、

一諸国者、数年御国へ罷居、諸郷方ニ致徘徊、手札不申

請者於有之者、詮議ノ上、何国ノ者何年ヨリ参居候段、

其所郷士年寄・役人へ委細相札、札改奉行所へ可申出

事、

一依御勸氣、士・郷士並足輕・御小人・御口ノ者・御數

寄屋仕坊主被召放候者手札ノ儀ハ、親類ノ家内又ハ何

方ニテモ其身望次第可為取候、手札ノ面・帳内マテ、

名字相除、年付可致候、尤、妻子又ハ其者ノ家内人數

マテモ可為同断事、

一諸士並郷士、遠島被仰付候者ノ跡家内ノ儀、親類家内

不入召入候条、跡々ノ通ニテ手札可申請事、

但、座付者・人家来・杜家・寺門前・百姓・浦浜・

町人等、遠島被仰付候者親族無御構由被仰渡候者、

右準帳面相調、手札可申請事、

一遠島被仰付候者共ハ於配所ノ島手札申請事候間、古札

可取移(揚カ)ノ事、

但、士被召放、遠島被仰付候者共、札ノ面名字相除、

年付可相記候、士不被召放者ハ本ノ姿ニ名字可相記

候、

一手札取渡候者、一改科錢一貫文ツ、可申付候、

一手札失候者、証拠於有之者科錢二百文可申付候、証拠

於有之者(無カ)科錢可為五百文事、

但、手札盜ニ違候者、男女違手札取候者、科錢可為

五百文候、

一火災其外不定ノ災ニテ手札捨候者、科錢可為五百文事、

但、証拠有之者科錢申付間敷候、

一ヤシナヒ子ヲ直子札申請候者、科錢可為(二貫文カ)二百文事、

但、右実父、科錢五百文可申付候、

一科錢二百五十文ツ、

右、郷士並私領ノ者共、組中へ不念ノ儀有之候節ハ、

組中組頭、町ハ年寄・年行司・名頭、在ハ庄屋・名主・

組中、其外寺門前・浦浜右ニ準ヘク事、

但、郷ハ郷士年寄・与頭(脱リカ)並私領ハ役人、逼塞・遠

慮等ノ御咎目ノ節科錢可被仰付旨、戌三月被仰渡置

候ヘトモ、札改方ノ儀ハ科錢被仰付候、

一百姓・町人・浦浜人・寺門前者ノ娘、借銀利錢ノ方ニ

内々ニテ召仕候儀御禁止候、若利錢ノ方並為日雇召仕

置、自然出生ノ子於有之ハ、母方へ可相付候、右体ノ

儀ハ御法様違候条、両親へ科錢一貫文ツ、可申付事、

但、百姓・町人・浦浜人・寺門前者ノ内々ニテ日

雇ニイタシ置、諸士ノ下女へ取合、子共致出生候ハ、

出生ノ子父方へ可相付候、右式ノ儀ハ御法様違候間、

両親へ科錢可為右同断候、

一百姓・野町・浦浜人並寺門前者娘、免証文ナシニ召仕

置、子出生候ハ、両親へ科錢可為一貫文ツ、事、

一慶賀並穢多村ノ者へ百姓致縁与候者、双方共ニ科銀可

為一枚ツ、事、

一手札改ニ付、何ソ無調法有之節ハ、士並郷士・寺持出

家ニテモ夫々相当ノ科錢可被仰付事、

一手札ノ面削捨又ハ書改候者ハ、縦不案内幼少タリトイフトモ科銀一枚、自然幼少者無調法候節ハ、親兄弟・親類ナトノ内引請居候者ヨリ科銀可出事、

一手札ノ面、輕キ文字少々ノ書違ハ御咎目ニ不及候ヘトモ、多人數ノ書違、又ハ年付・肩書等類書違候ハ、書役ノ儀ハ勿論、改方へ相懸候役々御咎目可被仰付事、一何方ノ支配ニモ不相付者於有之者百姓ニ被召成御法ニ候、右体之者於有之ハ可有披露事、

但、此以前ハ右体ノ者浮世人ト相唱候間、入念可相改候、

一依科^(揚カ)移者ニ被仰付置候者ノ娘、本在所へ縁与為致間鋪候事、

一江戸定府・京・大坂居付ノ面々ハ、手札不及被仰付候、宗門人數付帳マテヲ差出、札改方へ格護致置、後年改ノ節、帳面引合候様ニ可有之事、

一諸士、依科家来下人・揚者被仰付候節、申請ノ者、寄合以上ニハ御免無之御法候、且又右移^(揚カ)リ者、屬当^(揚カ)リノ者ヨリ以後協方へ永代ニ相直候儀御免不被仰付事候、

然共申受人相果主人無之節ハ、願ノ上協方へ相直候様ニ被仰付候、

一諸所へ被召置候綱差、家部被召立候付、中間^(繼与カ)与マテニテハ難相調、百姓・町人等互ノ縁与御免被仰付度旨、御鳥見頭申出趣有之、百姓・町人互ノ縁与並養子^(弟)等越候様御免被仰付、尤、綱差ノ儀ハ百姓ニテ其家部嫡子代々綱差勤被仰付、其内末子ニテモ綱差職分勝テ御用立候者モ有之候ハ、綱差ニモ可被仰付候ヘトモ、先二男以下ハ百姓被召成、所役々見計ヲ以申出、明合田地ニテモ為取、百姓ノ家業相勤、綱差家内へ罷居候末子ハ年季奉公等出候節ハ御鳥見頭ヨリ差免、百姓相成候以後ハ外百姓同様ノ仕向被仰付旨、寛政七年卯四月被仰渡、

一慶賀・穢多・行脚ノ者、手札可為横印事、

但、直印取来候慶賀ニ付、先規ノ通可為取之、慶賀下人ノ儀ハ可為横印候、

一男女共行脚罷成候者、其家内相除候ハ、近所ノ証拠書差出、支配有之者ハ支配頭証文ヲ以、札本可相除事、

以上、

寛政十二年申八月 札改方御条目ノ内

二九一六

一 地神・盲僧・平家座頭カ・都テ俗生相札、手札・帳面共
可記置候、子共ノ儀ハ親俗生ノ通、片付手札可為取事、
一 諸寺院門前ハ先規ノ通、可為無名字事、

但、福昌寺役人ノ儀ハ先規ノ通名字付、大乘院・浄
光明寺・大龍寺・興国寺・南林寺・妙国寺、右六ヶ
寺役人ノ儀ハ有来通、手札・帳面共年付・名字付可
相記候、

二九一七

延享五辰年

一手札紛失・虫付・焼失・疵付等ノ節ハ、同断書物、諸
士ハ筋々ノ次書・与頭奥書ヲ以申出来候ヘトモ、向後
ハ其身書物直ニ御勘定所ヘ差出、与頭ヘハ首尾マテヲ
可申出候、直子札・母札願ハ有来通可申出候、

一 右同断ノ節、外城衆中ハ筋々ノ継書・地頭奥書ヲ以申
出来候ヘトモ、向後其身書物直ニ御勘定所ヘ差出、地

頭ヘハ首尾マテヲ可申出候、直子札・母札願ハ有来通
可申出候、

延享五辰二月

二九一八

一 御一門ヲ始、諸士並以下ノ者娘又ハ召仕女、名ノ上ニ
ヲノ字ヲ付、宗門改方帳面・手札、且又屹立候書付等
ニ書記候儀不宜候間、向後於ノ字書申間敷候、平生唱
ノ儀ハ以来ヨリ有来通可有之候、
此旨支配中へ可被申渡者也、

享保十巳十月十六日

御家老座印

二九一九

一 於諸所一向宗執行ノ者有之候節、加役共ヨリ宗門改方
マテ被申出、本人支配頭へ申出ニ不及候段被仰渡、

安永七戌五月

披露ノ場案ニ、

二九二〇

一 一向宗ノ儀ハ段々被仰渡、法元不慥山伏・社人・念仏坊・平家座頭・地神座向・子安觀音守・他国ヨリ入来候六十六部類共へ祈念等相頼間敷旨被仰渡、

享保十年巳八月

二九二一

延享五年巳

覚写

一 上方年季者並永代者・非人、男女共二年季座差引ノ旨、右座任証文新札出候事、

一 浦浜ノ男女出入ノ儀ハ船手差引ノ旨、船奉行証文ニテ札方候事、

一 鹿兒島町名頭・名子出入ノ儀ハ、町奉行ヲ以証文ヲ以可相改事、

一 出家成ノ者、寺社奉行所証文見届、手札相替候事、
一 額入墨流人ハ、手札肩書ニ何某内入墨流人者可被相記

付、証文ハ年季者座へ被申出、可被取置候事、
右々々、先年如被仰渡候、此節モ其心得ニテ証文取替、

内改可被仕置候、改衆急ト可被仰付候間、聊油断有間敷候、先年御改ノ刻、内改大形ニ有之候間為隙入ハ、

此節御改ノ儀ハ内改無口能ヲヒテハ其帳面ニテ清書可被仕之由、改衆へ被仰渡答ニ候間、能々可被入念候、

今度札改、我々可致差引旨被仰出候付テ如此候、慥ニ被見届被相廻、末ノ座ヨリ札奉行所へ可有首尾者也、

延宝五年九月十三日

禰寝八郎右衛門 印

新納五郎右衛門 印

島津守右衛門 印

島津豊前 印

二九二二

一 高拾七石七升八合六勺七才

但、屋敷高込

右ハ、享保十六年已来郷土一向宗依科御取揚高ニテ、是迄帖佐与御蔵入相成候へトモ、当未秋ヨリ右所務御

立直成ヲ以算用相究^⑨錢成、正二月中宗門方へ入付、以前右通ノ御取揚高同断申付候、左候テ、先年已来一

向宗訴人依功高屋敷被返下候節ハ、御取揚高ノ内ヨリ可被相返候、右年間以前御取揚高有之、其子孫マテモ

訴人依功被返下候節ハ、外帖佐与御蔵入高ノ内ヨリ可被返下候、

此旨御勘定奉行・宗門改役・御代官（御も）へ申渡、御側方へ相達、可承向々へモ可申渡候、

天明七年未八月 （島津久邦）
和泉

申渡、宗門改役へモ可申渡候、

天明七未八月

（妻利美菴）
和泉
大炊

二九二二

（二九二三号行間朱書）

一此節宗門方御蔵被召建候ニ付、銀錢米出入ノ節、日雇ノ者へ錢十貫文并米一俵ニ付錢二文ツ、取来、役人手伝日雇夫勉向、是迄ノ通金蔵役人受込ニ被仰付候旨被仰渡、

天明八申正月

二九二五
札改条目

一江戸定府・京・大坂居付之向々者手札（面々カ）被仰付候、宗門人数付帳マテヲ差出、札改方へ格護致置、後年改ノ節、帳内引合候様ニ可有之事、

一欠落帰参ノ者、札ノ面・帳面モ欠落帰参、他国出禁止ト可相記候、

二九二六

正徳三年巳

一御一門並独礼ノ御城代御家老ノ妻ハ、札改方帳面ニ何某奥ト書記可申候、

但、独礼格ノ人ニテ無之候トモ、妻独礼格ノ人ニテ候ハ、何某奥ト可書記候、

一右人数ノ外、一所持・一所持格（寄合脱カ）・寄合並ノ面々妻ハ、

二九二四

一諸郷地頭 領主 大番頭

町奉行 御船奉行 郡奉行へ

諸郷・私領宗門方加役並訴人共、一向宗締方不行届致露頭候、不念ニ付、郷士ヨリ私領役人マテモ科銀、右ノ以下科錢申付来候へトモ、向後一統科銀可申付候条

何某内ト可書記候、手札ニモ右同前ニ可相記候、

一 諸士並以下ノ者トモ妻、此已前ハ女房ト書記候、①得共 一

統ニ妻ト可書記候、

右之通、此節札改ヨリ手札・帳面ニ書記候様ニ被仰付

候間、向後何角書付等ニモ右之通書記、常式ノ唱ニモ

此通唱候様可仕候、以上、

巳九月十一日

取次

堀甚左衛門

二九二七

一 於諸所一向宗執行ノ者有之候節ハ、加役トモヨリ宗門

改方マテニ申出答候処、百姓相交居候ヘハ取違、改方

ヘ首尾申出候所モ有之候ヘトモ、右宗旨ノ儀ハ兼テ申

渡趣有之、別テ被入御念事候間、若執行ノ者有之候ハ、

一切不申散、随分致隱密、夫々支配頭ヘ申出ニ不及、

早々宗門改方ヘ可申出候、

此旨諸外城・私領ヘ申渡、御役人限承置候様、是又可

申渡候、

安永七年戊五月

(小松清善)

帶刀

(島津久健)

仲

二九二八

一向宗頭取又ハ本尊持ノ者ヲ密々致訴人候者、縦雖為

同類、其身ノ咎ヲ差免、直ニ本人ノ科銀為御褒美可被

下候、

一 御城下三町ノ儀モ町役ノ内ヨリ宗門方加役申付置候、

年々月限不審成者有無ノ訊、首尾書並互ニ組中掛合印

形帳、諸外城同前申付、中宿者ノ儀ハ近所掛合為致印

形、宗門改方ヘ差出候様申付候、

右之通申付候条、支配中並諸外城マテ不洩様如例可申

渡候、

安永申正月

(五年)

主膳

(小松清善)

帶刀

二九二九

一向宗締方ニ付テハ、先年以来及度々分テ申渡置趣モ

有之候処、其旨ヲ不相守、今以執行ノ者不相止、甚不

届ノ至候、依之此節ヨリ都テノ御咎目重ク可申付候、

一向宗不締ノ者、宗門改役又ハ其所加役トモ於所格護

申渡候節、親類・与中並上番マテモ召付事ノ儀候処、

到頃日、自害又ハ欠落ノ者及多人数候、畢竟加役共大形ニ申渡、番人トモ不念ノ所ヨリ右体ノ者有之候、以来不審ノ者格護申渡候節ハ随分致嚴密、其所役所又ハ地頭仮屋ノ内不差障所へ召置、親類・与中並為上番體成衆中兩人ツ、代合、昼夜不寝ノ番付置、上番ノ者專入念、緩セ無之様可申付候、乍其上大形ノ儀於有之ハ、番人並加役マテモ屹ト御咎目可申付候、

一致欠落候者、密々御國中へ入来、宗旨相勸候ニ付、到今執行ノ者不絶筋相聞得候間、右体不審ノ者見得来候ハ、相捕、早々宗門改役へ其首尾可申出候、若見逃又ハ相付致執行候者有之、及露頭候ハ、其身ハ勿論、加役共マテモ是又屹度御咎目可申付候、此旨末々ノ者マテモ不間違様加役共へ可申渡置候、

一宗門改役ヨリ宗門不審ノ者格護申渡候節、未番人等不付置内致欠落候者有之由候、畢竟所役々大形ニ取計、

同類ノ者聞付為知候テ致欠落儀モ可有之候間、已来右体不審ノ者有之候節ハ随分致隱密、御用筋緩セ無之様可入念候、万一乍此上大形ノ儀於有之ハ、役々可為越度候、

右之通、諸外城・私領・鹿兒島近名並町・浜・寺門前へ不洩様、地頭・領主・月番御用人其外支配頭ヨリ委曲可被申渡旨申渡、宗門改役へモ可申渡候、

安永七年戊十二月

帶刀

(山岡久澄)市正

二九三〇

一一向宗御取締ノ儀ハ、先年已来申渡置候趣有之候処、

近来猶以他領ヨリ一向宗僧等忍入、段々宗門ノ法義相勸候故、及多人数候段相聞得、畢竟輕キ者トモ説法等ニ迷、信仰の深相成、背御法度候儀、甚以不屈ノ至候条、人々心懸、且掛役ノ儀モ猶又氣ヲ付、胡乱成者致往来候ハ、相捕、早々可申出候、尤、一向宗僧トハ乍存、

為致止宿又ハ説法等承候者ハ、一涯御咎目可申付候、且又右宗旨ノ者於訴人者、同類タリトイヘトモ其科ヲ

免シ、御褒美可申付候、就中代々訴人ノ儀ニ付、一向宗依科百姓被召成、其身ノ依功本々ノ通郷士被仰付、百姓ノ儀モ同断ニ付移科差免候者モ有之候ヘトモ、一涯難有奉存、精々心掛可申出候、若脇方ヨリ相頭候

ハ、屹ト御答目可申付候、右ノ趣、掛役々ハ勿論、

末々ノ者トモマテ致得心候様可被申渡旨申渡、尤、訴

人中へハ宗門改役ヨリ訳テ申渡候様是又可申渡旨、

文化四年卯六月廿七日

(島津久泰)

將監

(顯姓久番)

信濃

西恰之助

二九三二

写

一 毎年宗門改ノ儀、道ノ島中銘々家内札元人数・出入・

生子・死人等相改、切支丹宗門不審成者無之通、名書

一帳相調、代官役所銘々召出、印形可申付旨、去年七

月中渡趣^⑧有之候へ共△、島中ニテモ遠方ヨリ代官役

所へ銘々召出、印形申付候儀ハ難成儀モ可有之候間、

公義御条書並御家老中書付写ヲ以、間切支配ノ与人方

へ渡置、役所へ召寄談聞、印形帳相調、代官所へ差出

候様申付、左候テ、先達テ申渡候通、印形ハ代官役所

へ差置、代官ヨリノ一紙書、毎年七月限宗門改方へ可

差出候、此外ノ儀ハ去年七月申渡候通相心得候様、道

ノ島代官へ可被申渡候、以上、

⑧ 寅四月廿八日△

樺山主計

⑧ 御勝手方

種子島彈正殿△

二九三二

元禄十四年マテ、水引寺田堅吉日記帳^⑨ノ内

覚写

一 他国へ致欠落欠戻又ハ被召捕者ノ儀、以後他国へ不召

出様ニ申渡、右ノ訳手札ニモ書記置候様ニト此節被

仰出候、然ハ於江戸致欠落帰参者ノ儀ニ付、去冬委曲

申渡置候、^(格護カ)護ノ節、地頭並領主方へ手札可差出候付、

明所ノ儀ハ当番御用人方へ可差出事、

一 右体ノ者他国へ召列候儀又ハ一節ノ雇ニテモ曾テ遣間

敷候、此段モ去冬申渡置候へトモ可存此旨事、

右之趣、所中へ堅固ニ可申渡者也、

巳三月五日

評定所印

伊集院ヨリ出水マテ

噯中